
アルカサル of 黒い剣

くろねこ 8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカサル黒い剣

【Nコード】

N4956BA

【作者名】

くろねこ8

【あらすじ】

プルームと呼ばれる地脈エネルギーを利用し、便利で快適な生活を謳歌する文明に、存続の危機がおとずれる。

次第に減り行くプルームを、使用量を押さえて文明そのものを永らえようとする王。

しかし彼の政策は国民の反感を買い、ついにクーデターを許してしまう。

新王は、さらなるプルームの汲み上げを指示するが、果たしてその選択は、彼らの国に、文明により良い未来をもたらすのだろうか。

かねてよりブルーム枯渴説を訴える主人公クロエに、しかし、未だ
まともに耳を貸す者はいない。
前王の妹ミラ一人を除いては……。

序章（前書き）

某ラノベ賞で一次にもかからなかったものです。

お暇つぶしにでもなれば幸いです。

あと、気が付いた点などあれば感想頂けると幸いです。

序章

カスパリア王国南方、マウラ砂漠の中ほどに、カヴァという街がある。

元々、小さなオアシスに人々が定住を始めた事で発展を始めたこの街は、今ではマウラ砂漠を抜ける旅人であれば、商人だろうと軍の一個師団であろうと必ず立ち寄る、南カスパリア地方で最も代表的な宿場町と化している。

そんなカヴァの酒場は、今夜も今夜とて、夜空に天の川が輝く頃合となってもなお、煌々たる灯りと旅人達のおしゃべり、そして、そんな旅人達の前で奏される楽の音によって満たされていた。そして今宵も、とある酒場では、流しの豎琴奏者が安物の商売道具を片手に、これまた酷い演奏で酔っ払い達の耳を騙しつつ小金を掠め取っていた。

その日、彼が豎琴の弦を掻き鳴らしつつがなり立てていたのは、散々唄い古された英雄譚でも、また、月並みで退屈な恋物語でもなかった。それはつい先日、カヴァから程近いクルスという街で起こった、とある出来事を即興詩に仕立てたものだった。

常に方々を移動して回る旅人達にとって、彼らのような楽士の唄は、時に新しい事件や政変の話題を得るための重要な情報源となる。そして、この夜も旅人の多くは、唄よりもむしろ政情の変化や、どこぞの街で起こった貴族達の醜聞を耳にするべく、彼の唄に聞き入っていた。

が、その日、彼が伝えた事件は、どこぞの貴族の乱れた色恋沙汰などと違い、気軽に酒の肴へ上げられるような類のものでは決してなかった。

調子外れの琴の音に乗せて、男は唄う。

——砂漠の街、クルスが消滅した。

そこに広がっていたのは、瓦礫でも死体でも、まして砂でもなく、

一面の白い、白い灰、ただそれだけだった。

白亜の荘厳さを誇る大理石の屋敷も、エメラルド色にきらめくオリブの木々も、槌で刀を打つ屈強な男達も、ぶどうの豊作に歓喜する美しい女達も、全ては灰と化し、月明かりの中で白々と輝いていた――

男の唄、いや話に、カウンターに居並ぶ男達の誰もが、グラスのぶどう酒をあける事も忘れ、じっと聞き入っていた。詩の美しさに対してではなく、その詩の示す情報に息を？んでいたのだ。

クルスと言えば、カヴァからは人の足で三日ほどの、彼らにしてみれば比較的身近な街である。それが、つい二日ほど前に、跡形もなく消滅したのだという。

演奏を終えるや、小さな革帽子を片手にカウンターを巡り始めた豎琴奏者は、やがて、その末席まで至ったところで、一向に懷をまさぐる気配を見せない一人の青年を見咎めた。

すぐさま青年の隣席から先客の老人を追いつき、代わりに水袋のような腹でずいと椅子を占めると、いかにも腹藏ありげな顔で青年に声をかける。

「やあ君、どうやら私の唄がお気に召さなかったようだね」

それまで、黙々とぶどう酒を舐め続けていたその青年は、唐突な呼びかけに、「え」と微かな声を上げた。そこで初めてあなたの存在に気付きました、と言わんばかりの態度が癪に障ったか、楽士は、赤カブのような顔を一層赤らめ、先程よりもお慇懃な口調で続けた。

「ひょっとすると、君のような若い人間には、どこかの街が住人ごとと消え去ったという話よりも、宮廷での目くるめく恋愛話の方が面白かったのかもしれないね」

卑しい面を構えたその初老の楽士にとって、青年の澄ましきった態度は、何とも鼻持ちならないものだった。自分の演奏を聞くだけ聞いておいて、金を払わないとは何事だ、という訳である。たとえば青年が自分の演奏の間中、一度として振り返りもせずにはちびちびと手

元のぶどう酒を舐め続けていたとしても、その楽士にしてみればどうでも良い事だった。耳さえあれば、唄は聞けるのだ、と。——ところか。

「実はつい先程、そのクルスの調査を終えてきたばかりなんです、僕」

「は？」

今度は、楽士の方が驚きに相貌を崩す番だった。改めて、青年の姿をつぶさに眺めた楽士は、その服装が示す身分に気付くや、ただでさえ醜い顔をさらに怪訝な色で歪めた。

「君、ひょっとして変換士かい？」

楽士は、青年が羽織った黒いジャケットを指して訊ねた。青年の服は、ジャケットのみならずパンツ、マントに至るまで、いずれも夜空よりなお深い漆黒色で揃えられている。

「はい」

「やっぱりそうか。——で、その髪は、北方の血が混じっているのかな？」

「はい、母が、ルノア人で」

燃えるような赤銅色の髪こそが、彼らの国で大部分を占めるカスパリア族の一般的な髪色だ。酒場にたむろする老若男女の多くが、白髪や禿頭でもない限りは揃って情熱的な髪色をランタンの光に晒す中、一人、青年の髪だけは、濡れたように艶やかなカラス色を纏っていた。

「ああ、道理で、綺麗な顔立ちをしてる訳だ。ルノアには美人が多いからな」

「いや……どちらかと言うと、僕は父親似なんですけど」

「ああそう。お父さんは、カスパリア人？」

「はい。生粋の……それに、僕と同じく変換士でした」

「なるほど、その青い目はお父さん譲りという事か。——しかし、いるもんなんだねえ、親子揃って変換士なんて人間が……で、その変換士なんて大層な仕事をなさってる御仁が、あんな流れ星の落ち

た跡地なんぞに行つて、一体何を調べていたんだい？」

訊きながら樂士は、青年の小鉢からオリーブを摘み上げると、何らの断りを入れる事もなく、それをポイと口に放り込んだ。

一方の青年は、そんな男の図々しい態度を咎めもせずに答える。

「街の崩壊状況と、その原因についての調査です。ようやく報告書がまとまったので、学会に提出するために、明日から王都へ向かうつもりなのですが」

「原因の調査？ 落ちた流れ星でも探してたのか？」

樂士の言葉に、ふと、青年は表情を強張らせた。

「しかし、つくづく信じられない話だね。つい前日まで幾百人もの人間がひとところに暮らしていた街が、ある日突然綺麗さっぱり、消えてしまうなんてね。しかもここ最近、流れ星が街を襲うって事件が、随分と増えているそうじゃないか」

そう言つて樂士は、それがさも己のものであるかのように、青年の小皿に再び手を伸ばした、が。

「違います」

「え？」

青年の思いがけない言葉に、樂士の手が止まる。

が、一方の青年は、そんな樂士の様子に気を払う事もなく、じつと、手元のグラスを見下ろしながら続けた。

「流れ星が原因という通説は、真っ赤な嘘です。本当は――」

青年の続きの言葉は、しかし、突如彼らの背後で上がった怒声によつてあっさりと掻き消されてしまった。フロアの中ほどのテーブルで杯を呷っていた酔っ払い達が、互いに睨んだの睨まれたのだと、やおら掴み合いの喧嘩を始めたのだ。

「いいぞ！ もっとやれ！ そこだ！ 殴れ！」

あっさりと興味の軸足を移した樂士の無邪気な表情を、呆れたように横目で一瞥すると、再び青年はグラスに目を戻し、手元の小皿に手を伸ばした。が、いつしか小皿からは、既に最後のオリーブの一粒さえも、その姿を消してしまっていた。

一章

季節は、間もなく冬を終えようとしている。

その日、王都カスパリエの上空には、既に次の季節を先取りしたかのような、柔らかな霞を帯びた優しい色合いの青空が広がっていた。広々とした港町の空を彩るのは、白い羽根を伸ばしつつ気持ち良さそうに空を舞うカモメ達だけではない。カモメ達のさらに頭上を行き交う、おびただしい数の空中帆船もまた、青いキャンバスに趣を添える重要な役者達だった。それらはいずれも、地下から沸き出す地脈エネルギー、通称プルームを利用し浮力を得る船である。

ただし、いくら空中帆船とはいえ、停泊するのはやはり海岸に設けられた港だ。人や荷物の積み下ろしは、空を飛ぶ船であれ飛ばない船であれ、皆、この港にて行われる。

その港から、王都の城門へ至る長い石畳の坂を、幌馬車から牽引用の馬を取り払ったような形の荷車が、乗客を満載しゴトゴトと行き交う。これらは、プルームによって動力を得る自走車である。初めてこの国を訪れる旅人は、ほぼ例外なく、この自走車を目にするなり腰を抜かして驚く。が、ここカスパリア国内においては、今や自走車は、貴族のみならず平民の足としても親しまれる、ごく一般的な輸送手段と化している。

船から下りた乗客達の多くが、港から城門までの冗漫な坂道を嫌い、この快適な荷車に足を借りる。だが、そんな彼らを横目に、黒尽くめの青年クロエ・アルカサルただ一人は、ブーツの踵を鳴らしつつ自身の足で石畳を踏みしめながら、王都の城門へと向かっていた。運賃をけちるためではない。自分の足で事足りる距離にプルームの力を借りる趣味を、彼が持ち合わせていなかったというだけの話だ。坂を登りきり、人と車の往来で混雑を極める狭い城門を抜けると、途端、その眼前に、国内最大の規模を誇る王都の町並みが広がる。

「うわぁ……」

半年振りにカスパリエの街に立ったクロエは、自身が生まれ育った街ながら、改めて、その繁栄ぶりに舌を巻いた。ざっと見渡すだけに、その華やかさ、賑わいは国内のいずれの街とも比べるべくもない。他の町ではまずお目にかからない三階、四階建ての石造りの建物のみならず、それらの町並みの向こうでは、さらに巨大で荘厳な塔や神殿の石柱が、視界を埋め尽くさんばかりに空を突いている。

だが、その中でもとりわけ人々の目を釘付けにする建物といえば、やはり丘陵の頂上に聳える白亜の王城だろう。王都中央の丘をぐるりと囲む高い城壁と、空を突き上げる大小さまざまな尖塔が、青空の下にその純白の威容を誇っている。いずれも大理石と花崗岩でしつらえられた、頑強で上等な造りの建物だ。

圧巻なのは町並みだけではない。目の前を行き交う人の数も、建ち並ぶ露天の数もその種類も、他のあらゆる街の比ではない。

「やっぱり王都はすごいな……」

生まれ育った街に対して何を今更、と思いつつ、クロエはそう呟かずにはおれなかった。

そんな彼の傍を掠めて行き交うのは、港に揚がった魚や、近隣の農園で採れたオレンジ、それに穀物を満載した巨大な自走車達だ。

また増えたな、とクロエは思った。王都へ帰るたび、自走車の数が増えつつあるようにクロエには思えてなかった。もっとも、いつも寂れた辺境の街ばかりを巡っているために、感覚が田舎の基準に慣れつつあるせいだ、と言えなくもなかったが。

——いや、それにしても多すぎる。どう見ても不必要な自走車が……。

慣れない人混みを掻き分け、王宮方面へとクロエが向かっていた、その時だ。

「クロエ！」

不意に背後から呼び止められ、クロエはたと振り返った。

声は、路傍の露天から聞こえたものだった。声の出所と思しき、色とりどりのドライフルーツを並べたその露天の庇を覗き込むと、

案の定、そこにはクロエにとって見覚えのある若い男の姿があった。
「あれ？ ロベルト君？」

ロベルトと呼ばれたその巨漢は、久々に出くわした旧友の姿に、日に焼けた顔を少年のようによころばせて笑った。

「久しぶりだな、クロエ。何年ぶりだ？　こうして王都で会うのは」
「ええと、三年ぶりぐらいだと思います。そもそも君は、随分前にアルバの街へ越したはずでは？」

するとロベルトは、赤銅色の短髪をごりごりと掻きながら、困ったように言った。

「いや、戻ったんだよ。半年ぐらい前に、こっちにな」

「あんなにカスパリエの人混みはウンザリだと言っていたのに？」
言いながらクロエは、店頭のドライフルーツを適当に摘み上げた。ぬらりと脂っこいツヤを放つ茶色いその実は、貴重な糖分源として砂漠の旅には欠かす事のできないナツメヤシの実だ。

茶化するようなクロエの言葉に、しかし旧友はつられて笑うでもなく、かえって無然となって言った。

「いや。あの街はもう駄目だ。とてもじゃないが、まともな人間の住める場所じゃない」

「え？」

意外な言葉に、クロエは思わず干しナツメヤシを弄ぶ手を止めた。アルバと言えば、北方国境付近でも最大の規模を誇る植民都市だ。王都程ではないにしろ、上下水道や道路などの都市インフラも充分に整い、居住環境としては申し分ない。そんな快適なはずの街を、この旧友は人の住めない場所だと評する。

「何が起こったんです？　まさか、北方民族が国境を侵して襲ってきた、とか？」

怪訝な表情で訊ねるクロエに、旧友は「いや」と小さくかぶりを振った。

「違うんだよ。あのレオンってバカ王がさ、いきなり街のメインベントから増幅装置を取っ払っちゃったのさ」

「え？　———増幅装置を？」

「ああ。おかげで、街で使えるブルームの量も減っちゃって。住民にとっちゃ、とんだ災難だよ。部屋で暖を取るどころか、夜に明かりを灯すのもままならなくなっちゃって———で、あんまり不便なんで、こっちに戻って来たってワケ」

「それは……確かに災難ですね」

青い瞳を丸く見開きながら、クロエは呆けたように呟いた。

「ったく、いっそ弟のイスマエル殿下が、新しい王に就いて下されば良かったんだ。あのおの方が、よっぽど俺達下々の気持ちを分かって下さる」

その時、不意に背後の往来が騒々しさを増した———と思うや否やクロエは、やおら押し寄せた人の波に、たちまちのうちに飲み込まれた。

「何だ？　パレードでも始まるのか？」

露天越しのロベルトが興味半分迷惑半分で声を上げる。が、一方のクロエには、露天を挟んだ旧友と同じ余裕を見せる事は適わなかった。あばらが折れそうな程の強烈な圧迫感に耐えつつ、どうにかクロエは顔を上げた。と、そこには、がら空きとなった大通りの真ん中を、腹立たしいほど悠然とした足取りで歩く、一頭の巨象の姿があった。

象の背中には、これまた大きな鞍が設けられ、その鞍の上には、召使に持たせた日傘の陰から町並みを見下ろす、一人の若い男の姿があった。

遠目にもそれと分かる、目鼻のすっきりした爽やかな顔立ちに、王家の血を示す艶やかな紅色の短髪。

金糸の縫い込まれた見事なローブは、見るも鮮やかな紫色に染められている。一般人がみだりに衣服へ使用する事を禁じられたその色は、自ずから、着用者のやんごとない身分を明らかにしていた。

「ハッ、噂をすりゃ、バカ王レオン様のお通りだ」

「ロベルト君、こんな公衆の面前で、そんな事を口にするのはまず

いですよ」

「なに、構やしないさ。どうせここいらにいる全員、本心じゃそう思ってたんだから」

確かにロベルトの言う通り、沿道に並び立つ人々は皆、眉を潜め、陰口を叩き合いながら、象の背中に揺られる王の姿を見上げていた。が、そんな彼らの非難めいた眼差しに気付いてか気付かずか、鞍上の若い王は、あくまで泰然と沿道の人々を見下ろしている。

兵士達の露払いが解け、ようやく大通りに元の往来が戻った頃、ロベルトは露天越しに、クロエに訊ねた。

「ところでクロエ、相変わらずお前は誰に遣える事もしねーで、一人で僻地をぶらついてるのか」

「ま……まあ、はい」

一方のクロエは、先程の人垣で乱れた上着を調えつつ、こくりと頷く。

「へえ。せっかく変換士になったってのに、もったいねえな」

「そう、ですか？」

「ああ、とつとと要職にありついてよ、キレイな女でも見つけて結婚しろよ。その気になりや楽勝だろ？ 何たって変換士なんだから、引き手数多だろうがよ」

「い、いや、案外、そうでもないんですけど……」

困惑気味な笑みと共に、クロエは首を傾げた。

変換士——それは、国内でも最難関の学科試験と、体質テストをクリアした者だけが拝する事を許される、極めて希少な肩書きである。

この奇妙な名前の肩書きは、彼らの持つ能力を由来としている。

通常であれば、専用の変換装置を使用しなければ不可能なはずのブルームの変換を、彼らは一切の装置も使わず、思うままのエネルギーへと変換し利用する事ができる。

数百人に一人という割合でしか存在しない彼ら変換士は、その希少性ゆえ、得られる報酬の相場も当然、高い。——にも関わらずク

ロエは、変換士の肩書きを受けてよりこちら、誰に仕える事もせず、各地を一人でぶらついて回るだけの生活が続いている。仲間内から変人扱いを受けるのも、ある意味、仕方のない話だった。

その後、ナツメヤシを一盛り買い込んだクロエは、早々に旧友に別れを告げると、再び、変換士学会の本部が控える王宮へと足を向けた。

王宮の城門をくぐり、豪華な噴水が虹を描く美しい庭園を横目に抜けると、やがて、花崗岩の巨大な円柱がずらりと並ぶ荘厳な建物に突き当たる。

円柱の間を抜けると、そこには、足音一つも百の雑踏に響くほどのがらりとしたホールが広がる。一面に大理石のタイルを敷き詰めたホールの中ほどでは、全身を黒いローブで覆った一人の老人が、椅子に腰を下ろし、何をするでもなくじっと虚を見据えている。

クロエがホールに足を踏み入れるなり、老人は新たな来訪者の足音を耳聴く聞き分け、そして顔を上げた。

「久しぶりですね。クロエ・アルカサル」

男の真っ白な眼球は、クロエの姿を視覚の上では捉えていない。彼はただ、来訪者の足音のみで、その主を判別したのである。

「はい。新しい調査報告書が出来上がりましたので、提出に参りました」

「そうですか、それはご苦労です」

老人はなおも、虚を見つめたまま頷いた。

老人の脇を抜け、踵を鳴らしつつ奥へ進みかけたクロエを、再び老人は呼び止めた。

「近頃は、歩き方まで父上に似てきましたね」

「……父に、ですか？」

立ち止まり、訊き返すクロエに、老人は見えぬ瞳で彼方を見やりながらそっと呟いた。

「一瞬、クロノが来たものと聞き紛いました」

「……」

クロエは何も答えず、ただ黙して一礼を返すと、再び建物奥へと歩みを進めた。

暗い玄関ホールを抜けるなり、クロエは眩しさに思わず目をしかめた。

ホールのすぐ裏には、回廊にぐるりと囲まれた広大な中庭が広がっている。そのむき出しの砂地に反射した真っ白な陽光が、日の届かない玄関ホールの暗さに慣れ始めていた来訪者の瞳に、鋭い一突きを食らわせたのだった。

ようやく眩しさに目が慣れ始めた頃、クロエは庭の中ほどに出来た人だかりと、その人だかりの中心に立つ、一人の若い男の姿に目を止めた。もしかと思ったクロエは、すかさず回廊の円柱の陰に姿を隠すと、今一度、その人物の姿を注意深く観察した。

黒いマントにジャケットとパンツ。さらにその腰には、黒い鞆に収められた長剣と短刀が提げられている。いずれも、変換士の身分を示す装備だ。

が、一方でその髪色は、もう一つの彼の身分を表していた。

春先の日光の下で艶やかな輝きを放っていたのは、彼が王族の一人である事を示す、燃えるような紅色の髪の毛だった。その、絹のように繊細な前髪から覗くのは、麗らかな顔立ちと、妖艶ですらある切れ長の眼差し、そして、ラピスラズリの宝玉を髭髯とさせる、深みを帯びた青い瞳である。

先王の第二王子にして、現王レオンの異母弟、イスマエルに違いなかった。

やがて彼らの前に、薄汚い貫頭着に身を包んだ数人の男達が、兵士達の手によって引き立てられてきた。

男達はいずれも、その足首を鎖によって数珠繋ぎにされている。どうやら彼らは、牢獄から連れ出された罪人であるらしかった。

「さて同志諸君。本日は君達に、つい最近私が編み出した、新しいプルームの利用方法を、披露したいと思う。位置エネルギーと運動

エネルギーを複合させた、新たな技術だ」

イスマエルがその涼やかな声で朗々と述べ立てると、周囲にたむろした黒服の男達から、たちまち歓喜の声と拍手が沸き起こった。野太い歓声が、中庭に回廊にひびくこだまする。

しばし、ひとりでに歓声が止むのを待ったイスマエルは、再び中庭が静寂に包まれるや、傍に立つ罪人達に、そっと語りかけた。

「これより君達に、このイスマエル・カスパリアの名をもって特赦を与えよう。おめでとう。たった今から君達は、晴れて自由の身だ」イスマエルの命令により鎖を解かれるや、男達は、背後の兵士達に小突かれ、慌てて王子の眼前に片膝をついた。

「ただし——条件がある」

「？」

恭しく頭を垂れていた男達は、その言葉に、やおら怪訝の色を帯びつつ顔を上げた。

不安げな表情を浮かべる罪人達を見下ろしながら、イスマエルはなおも微笑みと共に続けた。

「無事に、この中庭を逃げ出す事が出来れば、の話だが」

王子の言葉に、男達は再び不安げな顔を付き合わせると、ややあって、その恐るべき真意に気付いてか、弾かれたように回廊へと駆け出した。

「さて」

男達の背中を見送りつつ、腰のベルトからそっと短剣を引き抜いたイスマエルは、早速、その短剣に何やら言葉を吹き込み始めた。その一方で男達は、立ちはだかる黒服達を押し退けつつ、なおも回廊目掛けてひた走る。

——瞬間、独り言を終えたイスマエルの青い瞳に、鋭利な殺意が光った。

と同時に、短剣を手にした腕が、鋭く虚空を一閃する。

「——！！」

観客達には、瞬きの暇すら与えられはしなかった。

男達の首はもれなく、まるでそういう仕掛けの玩具であるかのよう
に、胴体からポンと弾け飛び、そして、硬い砂地にゴンゴンと鈍
い音を立てて降り注いだ。

一方、彼らの首を刎ね飛ばした短剣は、まるで見えない糸に引き
戻されでもしたかのように、主の手元へストンと収まる。

五つの首のない胴体と、胴体のない五つの首が転がるだけとなっ
た砂地の庭を、しばし、水を打ったような沈黙が包んだ。が、やや
あって、観客の一人が思い出したように拍手を始めると、他の男達
も、石化の呪いから解放されたかのごとく、次々と拍手を始めた。

中庭が再び歓声に包まれるのに、さして時間はかからなかった。

五人の罪人の死に対し、悼む者は誰一人としてそこにはいなかった。
——ただ一人、クロエを除いては。

ところがこの時、割れんばかりの拍手と賞賛の声に包まれた演者
イスマエルの目に止まったのは、卑しい笑みを浮かべて彼に擦り寄
る御輿担ぎの群れなどではなかった。

「君」

「えっ」

唐突に声をかけられ、クロエははっと顔を上げた。その視線が、
殺戮を終えてもなお微笑みを崩さないイスマエルの優美な眼差しと
鉢合う。

「名前は何と言うんだい？ 君」

「ク、クロエ、アルカサルです……」

強張った喉から搾り出された答えに、途端にイスマエルは、その端
正な顔を嬉しそうにほころばせた。

「なんと！ 君がああ脱プルーム論で有名なアルカサル君か！」

まるで旧知の友人に出くわしたかのような歓迎ぶりに、クロエは
戸惑うを通り越し、完全に面食らった。一方のイスマエルは、クロ
エの混乱などまるで知りもせず、平然と死体の海を踏み越えながら
クロエに歩み寄る。

片膝を付こうとするクロエを制しつつ、イスマエルはなおも澁刺

とした口調で続けた。

「君の論文は、既にいくつか拝見させてもらっているよ。いや、君の研究テーマはなかなか興味深い。今やプルーム枯渴説を唱えているのは、この広い学界でも、もはや君一人しか残ってはいないからね」

「はい」

「そうだ。良ければこの後、私と共に軽い食事でもどうだね？ 君とは以前から、一度意見を交わしてみたいと思っていたのだ」

「い、いえ、殿下と一緒に食事など……めっそもございませんと、畏まるクロエに、イスマエルはいたずらっぽい笑みを浮かべると、頭半分は低いクロエの顔を覗き込み、からかうように言った。

「変わっているね、君は。世の中には、目を瞞るほどの金貨を突き出しながら、私と一席を共にしてくれと願い出る人間すらいるというのに」

「申し訳、」

「……というのは冗談だ。いや、決して冗談ではないのだが……ただ君とは純粹に、同じ学問を究める者同士、学友として言葉を交わしてみたかったのだよ」

「……学友として、ですか」

ちら、とクロエは、イスマエルの背後に広がる血の海に目をやった。クロエには、他人の命を何の呵責もなく奪っておきながら、その見物人を平気で食事に誘うような人間を友人に持つ趣味はない。―――だが。

「よし、決まりだアルカサル君。早速、王宮の方に席を用意しよう」断りの文句を探す間に、イスマエルの腕に肩を捕えられたクロエは、早々と、言い逃れる機会を失ってしまった。

クロエがイスマエルとの会食を渋ったのは、単に、人を斬り殺した直後の血なまぐさい人間と共に、食事を摂る事が躊躇われたためではなかった。また、自分のような平民ふぜいが、王族と食事の席を

共にする事に畏れ多さを感じたから、という理由でもなかった。

「相変わらず、君は脱プルーム論に基づいた研究を進めているようだね」

そう言っ、テーブルを挟んでクロエの向かいに座るイスマエルは、その形の良い唇を、ぶどう酒でそつと湿した。

「は……はい。申し訳ありません」

「謝る必要などないだろう。君自身は、自分の理論が正しいと信じた上で、その正しさを証明するために、証拠を探す努力を続けているのだから」

「……はい」

「で、肝心の研究の方は、進展しているかね？」

「……いえ、それほどは」

「そうか」

煮え切らないクロエの答えを、イスマエルはさして気に止める風もなく聞き流した。

学会本部からさらに奥、王宮の見事な中庭を眼前に望むテラスで、二人は共に同じ食卓を囲んでいた。だが、軽快なお喋りと共に次々と食事を口に運ぶイスマエルとは対照的に、クロエの方は、いつこうにそれらへ手を伸ばす様子を見せない。

頑なに石像のまねごとを決め込むクロエを見かねてか、ついにイスマエルはテーブル越しに声をかけた。

「見たところ、ちつとも食が進んでいないようだが、ひょっとして、このような料理は好みではなかったかい？」

クロエの目の前には、普段の旅暮らしであれば絶対にありつく事もなければ、まして、目にする機会もない豪華な料理が所狭しと並んでいた。魚の香草焼きに、ヤギの乳から作られたプディング、バターの匂いも香ばしい平パンに、極めつけは銀の大皿に盛られたふんだんなフルーツが、食卓を色鮮やかに彩っている。イスマエル曰く、これは少し軽めの昼食との事で、晚餐の卓にはさらに豪華な食事が供されるのだという。

「い、いえ、とんでもありません。その、むしろ、あまりに豪華すぎて……」

旅の道中は専ら、焼きしめた平パンとドライフルーツ、チーズなどの保存食で食い繋ぐクロエにしてみれば、温かいというだけでそれは既に充分なご馳走だった。まして宮廷付きの料理人が、王族とその友人のために腕によりをかけた料理ともなれば、クロエにとってそれはもはや、ご馳走を通り越し、未知の食べ物に近かった。

だが、彼が目の中の料理になかなか手を伸ばす事が出来なかった理由は、これも単に、料理があまりにも豪勢だったから、という事だけでもなかった。

なおも頑なに身を縮めるクロエの様子に、ふと、その理由を察したイスマエルは、先程まで自分が啜っていたスープの皿を、クロエの目の前に突き出して言った。

「飲みさしで悪いが、こちらをあがりたまえ、クロエ君」

「え？」

「警戒しているのだろうか？ 毒を盛られるのではないかと」

思いがけない言葉に、クロエはその空色の瞳を丸く見開いた。一方のイスマエルは、なおも穏やかな笑みを湛えつつ、そんなクロエをじっと見据えている。

「恐らく、君はこう考えているはずだ。脱プルーム論を唱える人間が、近年になって急速に減少したのは、彼らの存在を良しとしない私が、何らかの力を学会に働かせたためだ、と……」

「い、いえ……、そんなつもりは」

「いや、あるいはもっと直接的な方法、例えば君が想像したような、」

「そんな、本当に、私は何も」

すかさずクロエは、イスマエルの言葉の続きを遮った。が、その狼狽が、かえってイスマエルの洞察の正しさを証明する結果となっている事に、不幸にもクロエは気付いてはいなかった。

「安心したまえ、クロエ君」

「？」

「君が変換士である限り、私は決して、君をペン以外の手段で殺すような事はしない」

「え……」

「なんてね。冗談だよ冗談。君は私の良き友人だ。殺すだなんてそんな」

カラカラと軽快な笑い声を響かせるイスマエルに、しかしクロエは、ただただ苦笑で返すより他はなかった。

不穏な会話を切り上げるべく、クロエは、今度は自ら話題を切り出した。

「ところで殿下。先程の術は、一体どのようにして……その」

クロエの質問が的を射たのか、イスマエルはやおら、そのラピス色の瞳を少年のように無邪気に輝かせた。

「ああ、あれは刀に充填したプルームを、ある一定の割合で位置エネルギーと運動エネルギーに変換させて飛ばす術さ。原理としては———そうだな、例えば」

得意げに語りつつ、イスマエルは先程の短剣をすらりと鞘から引き抜いた。いつしか血糊は拭き取られ、漆黒の刀身が、陽光を反射するでもなく、ただ持ち主の手の中で静かに佇んでいる。

艶のない漆黒の刀身を誇るこの剣、通称モノリス刀は、金属ではなく、ある特別な鉱石から削り出されて作られている。

カスパリア南西部の鉱山でのみ採掘される鉱石、通称モノリスは、プルームの蓄積能に極めて優れ、また同時に、命令に応じて術者の望むエネルギーにプルームを変換し発散する、大変便利な性質を備えている。

通常、このモノリスは、剣の素材と言うよりランプの光源や、暖炉や調理場の熱、それに自走車の動力源等といった生活の中で目にされる機会の方が多い。むしろ刀身に使用されるケースの方が圧倒的に少ないと言ってもいいぐらいだ。

モノリス刀は、刀と呼ばれる割にその切れ味は決して良いとは言え

ない。むしろ一般の人間にとっては、台所の菜切り包丁の方がよっぽど使い勝手が良いぐらいである。一応、変換士以外でのモノリス刀の携帯は禁じられてはいるものの、たとえば、そのような規則がなくとも、望んでこの刀を帯びたいと思う者は、一般人においてはまず皆無だろう。この刀を、本当の意味で使いこなせるのは、プルームを様々なエネルギーへと自在に変換する事のできる変換士以外には、有り得ないからだ。

そんな、変換士の象徴たるモノリス刀に、イスマエルは命を吹き込むかのようにそっと囁く。

「要請する。残存プルームを運動エネルギーと位置エネルギーに変換……以上、要請を終了する」

言い終えるなりイスマエルは、まるで池に小石でも投げ入れるかのようなスナップで、軽く、短剣を放った。――が。

イスマエルの手を離れるや短剣は、放物線すら描く事なく一直線に中庭を突っ切ると、庭に植えられた椰子の木々を次々と貫いた。やがて短剣は、三、四本ほど椰子を突き抜けた後、その背後に立つ大理石の石柱に深々と突き刺さるに至り、ようやくその直進を止めた。「まあ、こんな風にナイフを直進させる程度の芸当ならば、君にも充分出来るだろう?」

「は、はい。まあ」

ナイフを直進させるためには、プルームを、運動エネルギーの他にも、高度を一定に保つための位置エネルギーへ変換する事が不可欠となる。同時に二つ以上の種類のエネルギーにプルームを変換させるのは、実は、並大抵の変換士には困難な、非常に高度な技術であった。

クロエの返答に満足げに頷くと、イスマエルは銀皿からいちじくの実を取り上げ、皮も剥かずにかぶりついた。瑞々しい咀嚼音を奏でつつ、なおイスマエルは揚々と力説する。

「この、二つのエネルギーの割合を随時変化させる事で、先程のように、思うがままの軌道でモノリス刀を飛ばす事もできる。――」

まあ、実はその他にもいくつかコツはあるのだがね……まあ大体そんな所だよ。理解は出来たかい？」

極めて難易度の高い技術を、さらりと口にするイスマエルに、クロエはただ舌を巻いた。

「さすがは、稀代の天才変換士と呼ばれる、プルーム使いの第一人者であらせられますね」

クロエの賛辞を、イスマエルは軽く笑い飛ばした。

「天才？ 確かに良く言われるが、私は自分を天才だと思った事は一度もないよ。これまで私が学会に発表した新術の数も、せいぜい四〇〇が良いところだしね」

「よ……四〇〇、ですか」

まるで謙遜にならない謙遜に、クロエは自身の立場も身分も忘れ、ただ単純に一人の変換士として驚嘆の溜息をついた。

一般的な変換士では、せいぜい一生のうちに一〇〇個の新術を編み出すのが関の山と言われている。つまりイスマエルは、未だ二〇代の若者でありながら、既に通常の変換士の四倍もの新術を生み出している事になる。イスマエル・カスパリアは、王子であると同時に、天才的な、あまりに天才的な変換士でもあった。

「別段驚く数字でもないだろう。若い君ならば、充分に追いつける数字だ。プルーム枯渴説などという古臭い学説の証明は、この際、コルネリウス学長のような老骨達にでも担って頂くとしてだね。君のような若者は、時代を切り開く新技術の開発に労力を注ぐべきだ。そうすれば、君にも充分可能な数字だよ、クロエ君」

やはりそう来たか、と内心で思いつつも、しかし、稀代の天才の言葉には、クロエもただただ頷くより他はなかった。

昼食を終えたクロエは、未だ日も傾かないうちに、早々に王宮の中庭を後にした。

白亜の大理石の廊下は、いずれも人の姿が映るまでに丁寧に磨き上げられ、下手に走ると、ともすれば転びそうにさえなる。もっとも、

廊下を行き交う人々は、官吏から貴族に至るまで、皆、悠然と大理石の上を歩いている。たまに召使が、急な用事を頼まれたか小走りに駆けて行く以外は、せわしない王都の中で、まるで王宮のみが時間の流れから切り落とされたかのように、あらゆるものがゆったりと拍動していた。

緑溢れる中庭を、蝶の群れがヒラヒラと舞う。そんな蝶たちの可憐な羽根が遊ぶのは、ローズマリーの香り漂う芳しい微風だ。

「綺麗だな……」

感心したように、クロエが溜息をついた、その時だった。

ぱたぱたぱた……どがつ！

突如、前方から襲った激しい衝撃に、クロエはたまらず尻餅をついた。——と同時に。

ばらばらばらばら……。

土砂降りが木板の庇を打つかのような耳障りな音が、中庭の静寂を破る。

「な、何だ……？」

どうやら、中庭に目を奪われ、前方への注意が散漫になったその時に、向かいから駆けて来た人物と真正面にぶつかったものらしい。だとすれば非は自分にある。すぐに謝らねば、と、ここまで頭を巡らしたところでクロエは顔を上げた。

そこでクロエの目に入ったのは、床に散乱するおびただしい量のパピルスの巻物だった。中には、落とした衝撃で蜜蝋が剥げてか、だらしなく中身を開け放っているものさえある。

特に覗き込むでもなく、クロエは、目の前でだらしなく開け放たれたとある一卷に目を落とした。

——嘆願書……？

それは、増幅装置の設置を要請する、とある辺境の街からの嘆願書だった。街の領主と思しき人間が記したのだろう、文面の最後には、街の代表を示す大きな印鑑まで捺されている。

「見るな」

突如その巻物は、クロエの眼前から強引に引き払われた。

「——え？」

つられるように顔を上げたクロエは、自分と同様、床にへたりこんだままのその人物に、思わず目を奪われた。

——綺麗、だ。

それは、柔らかな絹のドレスに身を包んだ、一人の少女だった。

白く透けるような肌に、細い首筋、鋭利な目鼻立ちは、美女というよりむしろ、綺麗な造形の少年を思わせる。切れ長の眼差しの中で、磨き上げられたラピスラズリをそのまま埋め込んだかのような蒼い瞳が、いやに大人びた思慮深い光を放っている。

だが、何よりクロエの目を釘付けにしたのは、その美麗な顔でも、深い蒼色の瞳でもなく、肩口で切り揃えられた見事な紅色の艶やかな髪だった。その髪色の持つ意味に、もちろん気付かないカスパリア人はいない。

「殿下！」

——殿下？

回廊を歩いていた召使が、否、召使のみならず、それまで優雅に廊下を歩いていた貴族や官吏までもが、咄嗟に少女の元へと駆け寄り、散らばった巻物を拾い始める。だが。

「構うな！ これは、私の仕事だ！」

それは、少女の小振りな唇が発したものとは思われないほどの、厳然とした声だった。

その声が廊下に響き渡るや、貴族も召使も一様にその手を止めると、少女に背を向けぬよう気を払いつつ、すぐごと後退った。

再び静寂を取り戻した中庭の隅で、今度は少女が、散らばったそれらの巻物に手を伸ばし始める。と、ようやくクロエは、思い出したように身を起こすと、少女の前に片膝をつき、恭しく頭を垂れた。が、残念ながら、その名前を思い出す事まではかなわず、クロエは、単なる敬称のみで少女を呼んだ。

「も、申し訳ありません。……殿下」

「構わん。私が悪かったのだ。――ちと抱えすぎたようだ。おかげで目の前が見えなんだ」

「え？　これ全部、殿下お一人で……？」

今一度、クロエは床に散らばった巻物を見渡した。その数、数十は下らない。大人の男の腕をもってしても、一人で運ぶにはかなりの難義を強いられる量である。

だが、少女は驚きを露わにするクロエには構わず、なおも淡々と巻物を拾い続ける。そんな彼女につられるように、クロエもまた巻物に手を伸ばす。

「よせ。先程も言っただろう。これは私の仕事だ」

「い、いえ、」

案の定、クロエの手を制する少女に、クロエはなおも巻物を集めながら切り出した。

「私にも責任が……その、中庭の美しさに気を取られておりまして……殿下の方に、全く気を払っていなかったもので」
「……」

怒るでもなく、かと言って文句を言い返すでもなく、少女はクロエの言い分に黙って耳を傾けた。

結局その後、全ての巻物を拾い終えるまで、少女が再びクロエを制する事はいざなかった。

ところが、いざ巻物を運び始めようとした時だ。

「そなたが持つ巻物を、こちらに寄越せ」

既にその細腕を大量の巻物で一杯にしながら、少女は、未だクロエが抱えたままの巻物の束を、ついと顎で示して言った。

「あの、よろしければ私も運ぶのを手伝いましょうか？」

「構わん。これは皆、私が抱えねばならんものだ」

「ですが、さすがにこの量を一人で抱えるのは……」

クロエが持つ巻物まで加えてしまえば最後、またもや少女は、ろくに前も向けないほどの荷物を抱える事になってしまう。事実、先程も彼女は、そのためにクロエとぶつかってしまったのではなかった

か。もつとも、前方に注意を払っていなかったクロエにも十分過ぎるほどの非はあるのだが。

しかし、少女はあくまでも譲る気配を見せなかった。

「確かに、ぶつかっただけではそなたにも非があった。だが、ここから先は私の仕事だ。そなたの手を借りる訳にはいかん」

「仕事、ですか？」

奇妙だな、とクロエは思った。先程、召使達は彼女を殿下と呼んでいた。殿下と呼ばれる程の人物の仕事が、荷物運び、などという事があるはずはない。

「そう。私の仕事——責務だ。国を支えるという、私の……」
「？」

なおも釈然としない様子を見せるクロエに、いよいよ苛立ちを覚えてか、やおら少女は烈しく怒鳴った。

「とつとと渡せ！ 私は忙しいのだ！」

結局、少女の剣幕に気圧されるかたちとなったクロエは、やむなく、手にしていた巻物を少女の腕へと戻した。

方頬で荷物を押さえるべく横を向いた少女は、またしても前方への視界を自ら失した。

それでも少女は、なお毅然とした足取りで歩き出すと、誰の手を借りる事もなく、廊下の向こうへと歩み去っていった。

クロエに許されたのは、そんな少女の小さな背中を黙って見守る事、ただ、それだけだった。

二章

学会本部へ戻り、本来の目的である報告書の提出を行ったクロエは、太陽が西の空へと傾き始めた頃、ようやくいきつけの宿へと足を運び始めた。彼の生家は、そこで待つ家族と共にすでに失われている。そのためクロエは、王都へ立ち寄る際は専ら、父の旧友が営む宿を、定宿として使う事にしていた。

道すがら、広場や大通りの露店を冷やかしつつ歩いたクロエは、気の早い一番星が茜色の空に輝き始めた頃、ようやく馴染みの宿へと辿り着いた。

夜の帳に染まりつつある漆喰の壁には、レッジョ亭なる文字が彫り込まれた古い木造りの看板が掲げられている。その看板の下、窓も衝立も開け放たれた一階部は、未だ宵の口だというのに、早くも活況と喧騒を帯び始めていた。

看板をくぐり、櫺のドアを抜ける。すると早速、傷だらけのカウンターと、強烈な香草の匂いがクロエを出迎えた。

「おう、いらっしゃー——おや!？」

カウンターの向こうで、料理に勤しんでいた初老の小男が、顔を上げるなり驚いたように軽く目を見開いた。店の主人、レッジョ爺だ。「クロエじゃないか! どうしたんだ、帰るなら帰ると言ってくれと、いつも言っているだろうに!」

早速レッジョ爺は、カウンターの向こうから大手を広げて飛び出すと、ただでさえドライフルーツのような皺だらけの顔に、さらにたくさんの皺を刻みながら、クロエの懷に抱きついた。

「いやいやいや、しばらく見ない間に、大きくなって」

「いえ、身長は、もう何年も変わっていないんですけど……ところで、部屋の方は空いていますか?」

盛大な賑わいを見せる店内をぐるりと見渡しつつ、クロエは訊ねた。想像よりも店内は込み合っており、ひょっとすると部屋の方も

すでに埋まっているのではと懸念したのだ。もし満室だとすれば、今すぐ他所の宿を回り、空室を当たらねばならない。

「いや。空いているよ。ベルダの寝室が」

「えっ」

レッジョ爺の言葉に、クロエは思わず上擦った声を上げた。

「どうした、初めてでもないだろう」

「い、いえ、確かに一度、彼女の寝室を使わせてもらった事はありませんが……その、いろいろと、気まずいというか」

みるみる青褪めるクロエを、しかし、レッジョ爺はそれを歳相応の照れと見なしたか、ニカリと茶色い隙っ歯を晒しながら言った。

「何じゃ、オートマタ相手に何を気兼ねしとるんじゃ。そもそも、お前さんもいい加減ええ歳こいた男なんじゃろ？ もっとドーンと構えんかい、ドーンと！」

「い、いえ、そういう事ではなく……」
と、そこへ。

「く……クロエさま」

聞き覚えのある華やかな女性の声に、クロエははっと振り返った。と同時に、予想だになかった光景に、思わず目を瞠る。

そこに立っていたのは、黒いワンピースにフリル付きの白いエプロンを纏った、一人の若い女性だった。眼鏡の奥に光る緋色の瞳と、腰まで伸びる若草色のウェービーな髪が、赤髪蒼目のカスパリア人が多くを占める店内で、ひととき異彩を放っている。レッジョ亭の看板娘にして、かつてクロエの父が技術の粋を結集して造り上げた、一点もののプルーム駆動型オートマタ・ベルダだ。

が、クロエが目を瞠ったのは、動く人形である彼女の、その奇異な存在感ではなく、彼女の肩に、まるでそういう衣装であるかのように掛けられた、人の体長ぐらいはあるかという巨大なカジキマクロであった。

「あ、相変わらず、調子は良さそうですね、ベルダさん」

「う、ううっ……ぐろえさま……」

「は、はい」

こく、ときこちなく頷くクロエの一方で、ベルダは文字通り人形のように端正なその顔を、ぶわっとほころばせた。そして、抱えていたカジキマグロをドサツと床に打ち捨てると、クロエの懷へ一目散に飛び込んだ。

「ぐろえさまああっ！ ひっ、ひどいですわ！ 私を置きざりにしたまま、一人で旅に出られてしまうなんて！ 私がどれだけクロエさまの事をお慕い申し上げているか、ちっとも分かっていらっしやらないくせに！」

そんな彼女の背後では、打ち捨てられたカジキマグロが、素焼きタイル敷きの床の上で、びったんびったんと元気良く跳ね回っている。「すみませんベルダさん、でも、僕はその、観光じゃなくてあくまで調査のために旅を続けているのであって……あと、すみません、若干生臭いので、少し離れて頂けますか」

が、ベルダはなおもクロエの懷に肩を埋め、離れるどころか顔を上げる様子を見せない。そこへレッジョ爺が、面白半分にとんだ茶々を入れる。

「おいベルダ。今夜は満室でな。悪いがお前の部屋にクロエを泊めさせてやってくれ」

その声に、やおらベルダは満面の笑みをがばと上げた。

「という事は、今夜はクロエさまとベッドを共に……？」

「い、いえベルダさん、僕は椅子で……それが駄目なら床にマントを敷いて寝ますから、どうぞ、お構いなく」

「クロエさま♪」

「は、はい、なんでせう、ベルダさん」

「とうとう私達も、夫婦として身も心も結ばれる日を迎えるのですね」

「いや、そもそも夫婦じゃありませんから、」

「またまた。相変わらず照れ屋さんなんですネ。クロエさまって」

「いえ、照れている訳ではなく、その、周囲の目が痛くて……」

そうして、若い一人と一体が、酒場の入口で雑な寸劇を繰り広げていた、その時だった。

チキ……チキチキ……パツン。

不意に、酒場を照らしていた照明がせわしなく明滅し、そして、ふつりと切れた。

「え……あれ？」

突如漆黒に包まれた店内を、慌ててクロエは見渡した。が、他の客等は、取り立てて慌てる様子も見せず、相変わらずの陽気な調子で酒を酌み交わし合っている。

怪訝に思ったクロエは、さらに遠くへと目を凝らした。見るとレツジヨ亭だけではなく、通りに面する他所の店も同様に、軒並みその明かりを落としていた。

街全体がとつぷりと暗闇に沈む中で、クロエは少なからぬ衝撃を覚えていた。

このような事態に遭遇するのは、クロエにとっては決して初めての事ではなかった。むしろ、彼が渡り歩く辺境の街や村では、頻繁に出くわすケースでさえあった。街のメインベントのブルーム湧出量が不足する事によって起こる、一時的な供給停止である。

「クロエさま、怖いですわ」

甘えた声で擦り寄るベルダには構わず、クロエはなおも周囲を見回しながら呻いた。

「まさか……王都でも供給停止が？」

「え、ええ。最近増えていますのよ。本当に困ったものですわ」

「やっぱり、減っているんですね。王都でも……」

「そんな事よりもクロエさま、今なら周りの目も気にせず思う存分愛を、」

「いっそベルダさんも供給式に変えますか？」

「嫌です！」

ベルダは、抱きすくめていたクロエの身体を、ことさらにぎゅっと抱きしめた。

ばき、と、クロエの胴体のどこかで、何かが折れる不穏な音が響く。

「こうして暗闇に乗じてクロエさまと睦み合えなくなるのは辛いですっ！ 充填式のままがいいですっ！」

「やっぱり……供給式に変えましょう……ね？」

ほどなくして供給停止が明けたのか、いつせいにランタンの灯りが灯り始める。

「おおい、ベルダ。いい加減、マグロを調理場に運んでくれんかの。そんな所でいつまでも跳ね回らせておったら、邪魔でしょうがないわい」

「はあい。ではクロエさま。続きはまた後ほど」

「はい……って、続きも何も、僕は別に……」

口ごもるクロエを尻目に、ベルダは暴れるカジキマグロの脳天にズゴンと拳を叩き込むと、今やすっかり大人しくなったその巨体を抱え、カウンターの向こうへと運んでいった。

「ほう、なかなか脂の乗った良い魚じゃな。グリルにすると美味そうじゃの」

「では、クロエさまのお好きなローズマリーの香草焼きなどいかがでしょう。ね、クロエさま、いかがです？」

「……どうぞご勝手に」

昼食時とは別の意味で憔悴させられたクロエは、へろへろと力ない足取りで、カウンターの末席にぼすんと腰掛けた。と、そこでクロエは、頭上のランタンがしきりに明滅を繰り返している事に気が付いた。周囲にはすっかり灯りが戻っている。プルームの供給停止はすでに解除されている、はずなのだが。

「随分とちらついていますね」

すると、カウンター越しのレツジョ爺は、ふと、魚をさばいていた顔を上げ、相変わらずの陽気な声でいけしゃあしゃあと言った。

「そうそう。お前が来たら頼もうと思っていたんじゃよ。そいつを直してくれんかのう。もう随分前からその調子なんじゃ」

「どうして、ベント技師の方を呼ばなかったのですか？」

「だってのう。うちにはタダで直してくれる専門家がいるからのう」

「それって……僕の事ですか」

クロエの問いに爺は答えず、ただニカリと隙っ歯を見せたのみだった。

「別にいいじゃろう？ どのみち魚が焼き上がるまで、少し時間がかかるんじゃないから」

爺の言葉に、呆れたように溜息をつく、クロエはおもむろに席を立った。

「……わかりました」

早速、椅子を足場にカウンターへよじ登ったクロエは、なおも明滅を繰り返すランタンのガラス蓋を開くと、その中でちらちらと光る小指ほどの小さな棒をそと取り出した。モノリス刀と素材を一にする、照明用の小型モノリスだ。

「やっぱり傷が入っていますね。これでは出力が不安定になるのも仕方ありません。——それにしても、おかしいですね。ダイヤモンド並に丈夫なはずのモノリスが、落とした程度でこんな傷が付くはずはないのですが」

「申し訳ありません、クロエさま」

応じたのは、ベルダだった。

「その……一月ほど前、店に大きな蛾が迷い込んで参りまして。何とか追い払おうとしたのですが、なかなかランタンから離れて下さらないので、とうとう我慢ならずに蹴り飛ばしてしまったんです」

「え？ 蹴り飛ばしたんですか？」

「はい。ランタンごと……」

すると今度はレツジョ爺が、何かを思い出したようにポンと手を叩く。

「ああ、思い出した。あの時や大変だったなあ。向かいの店まで飛んで行ってしもうて、あちらの店の親父に散々怒鳴られたもんじゃよ」

言うなりレッジョ爺は、悪びれもせずに禿頭を掻きながらアハハと笑った。ちなみに向かいの店までは、少なく見積もっても大人の足で二〇歩以上はある。

「なるほど……」

クロエは腰の革ポーチをまさぐると、中から、大きさも形もランタンの芯と同じ、小さな石の棒を取り出した。だが、こちらはランタンの芯と違い、明滅どころか光ってさえもない、ただの黒い棒だ。そんな、黒いだけの小さな棒を握り締めたクロエは、早速、呪文のような言葉を、棒に向かって囁き始めた。

「要請する。ベント開放、プルーム量二〇ガルを要請、いずれも光エネルギーに変換……以上、要請を終了する」

と、クロエが詠唱を終えるや否や、これまで何の変哲もない、ただの黒い棒に過ぎなかったそれが、やおら、他のランタンと同じく、眩い輝きを放ち始めた。

新たに輝きを帯びたその棒を、先程のランタンに仕込みながらクロエは言った。

「たまたま、同タイプのモノリスを持ち合わせていたので、交換しておきます。あと、もう二度と、モノリスを蹴らないで下さい」

「おお、さすがは変換士じゃ。助かるのう」

調子の良いレッジョ爺の言葉に、やれやれとばかりに軽く首を横に振ると、クロエは早々にカウンターから床へと飛び降りた――が。ぼてっ……。

「あいたっ」

着地するや、クロエは床に足を滑らせ、派手な音を立てて前のめりに突っ伏してしまった。素焼きタイルの上で、干乾びたカエルのような無様な姿を晒すクロエを、周囲の男達が指差しながらゲラゲラと笑う。その笑い声には、面倒事を押し付けた当の本人であるレッジョ爺のものも紛れていた。

「相変わらず鈍臭いのう、お前は」

「い……いいんです、変換士は、変換ができればそれでいいんです」

むく、と身を起こしながら、クロエは悔し紛れに言い返した。したたかに打ちつけた鼻からは、すでに大量の鼻血がだくだくと流れ落ちている。

「まあクロエさま、鼻から血が」

すかさずベルダが、カウンターを飛び越えてクロエに駆けつけた。

こちらは、もちろん踏み誤る事なく綺麗に着地する。

「ええ、わかってます。すみませんベルダさん、ハンカチを貸してもらえますか？ 後で必ず、洗って返しますので」

「いいえクロエさま。洗わずとも結構でございますわ」

「え？」

「クロエさまの身体から流れるものであれば、たとえば鼻血だろうと鼻水だろうと、汗だろうと涙だろうと私にとってはこの上なく愛しゆうございます」

「ベルダさん……」

感激に声を震わせるクロエに、ベルダは頬を赤らめながら続けた。

「で、でも、やっぱり一番興奮するのは、クロエさまのせ、」

「やめて下さい。それ以上は、いろんな方を困らせる事になるのでやめて下さい」

すかさず正気に戻るや、クロエはぴしゃりとベルダの言葉を制した。

夜が更けゆくにつれ、酒場はさらなる活況を呈していった。

いつしか街路の石畳は、乾燥がちなこの時期には珍しく、したたかな雨によって洗われ始めていた。時間を追うごとに雨脚は強まり、通りの向かいに灯る酒場の明かりが、次第にひどく霞んでゆく。店の喧騒に加え、庇を叩く雨粒の音が耳を聳する中、クロエはカウンターの末席で、昼に遠慮した分を取り戻すかのように、目の前の食事を黙々と口に運んでいた。

先程のカジキマグロを Grill したものに、ニンニクの香りに移したオリーブオイルをかけて頂く。極めてシンプルな料理だが、クロエ

には、昼間の宮廷料理よりもむしろ美味に感じられた。少々大味ではあるが、ふつくらとしたマグロの食感と香草の香りがやみつきになる。何より、誰に遠慮するでもなく、また畏まる必要もなく食事を出来るのが有難い。

ちまちまとマグロの切り身をつつくクロエに、一仕事を終えたベルダがカウンター越しに声をかけた。

「いかがです？ クロエさま」

「あ、美味しいですよ。とても」

「そうですか、それは何よりです」

オリーブの塩漬けを盛った小皿を差し出しながら、ベルダは再び訊ねた。

「ところで今回は、どのような御用で王都に戻られたんです？」

「いつもと変わりませんよ。各地のプルームの流量と、増幅装置の稼働状況についてまとめた報告書を、学会に提出しに来たんです」

「いつもながら、本当に素晴らしいですわ、クロエさま。国のため人のため、人知れず日の当たらない研究に邁進するお姿には、本当に感心致します」

「いえ……そういうつもりは、ないんですが」

ベルダの賛辞を、クロエは歯切れの悪い言葉と共に否定した。

「何かのためにか、誰かのためにか……そういう大それた目的は、特に——まあ、結果として、そうなればいいな、と思う事はありませんが」

運ばれたばかりのオリーブの粒を一つ、口に放り込むと、クロエは虚を見つめながら、なおも呟いた。

「ない……いや、わからないんだ……どうして僕は……」

「クロエさま？」

ベルダの言葉に、クロエははっと我に返るや、慌てて話題を切り替えた。

「と、ところで、相変わらず王都は賑やかですね」

随分と宵も深まった頃合だというのに、店内は未だに煌々たる灯り

によって満たされている。ランタンに仕込まれたブルーム変換装置・モノリスが、街のメインベントから供給されたブルームを光エネルギーに変換し、店内を明るく照らしているのだ。

店の隅では、暖炉にしつらえられたモノリスが、ブルームを熱エネルギーに変換し、冷え込み始めた夜の空気に暖を与えている。暖炉に薪をくべるという習慣は、このカスパリアにおいてはすでに年寄りの昔語りの常套句と化している。

「いえ、本当に賑やかですよ。辺境の……特に、国境付近の街や村は、本当に静か———というか、閑散としています。僕も、旅に出るまでは想像もしていなかったのですが」

「では、どうしてクロエさまは、旅を続けていらっしゃるのですか？」

「え？」

「カスパリエが住み良いのでしたら、ずっと、カスパリエにお住みになればよろしいのに」

「かも……しれませんがね」

誰に聞かせるでもなくそう呟くと、クロエは、ぶどう酒のグラスをくいと呷った。

———その時だ。

バタンツ！

唐突な物音に、クロエは思わず、せっかく口に含んだぶどう酒をぶつと噴き出した。

「す、すみません」

「あらやだクロエさま、新しいプレイですか？」

メガネにかかったぶどう酒を、エプロンの裾で拭きながらベルダが言う。その顔もまた、クロエが噴いたぶどう酒でべっしよりと濡れている。

「ち、違いますよ……それより、一体何の音です？」

怪訝な面持ちでクロエが振り返ると、そこには、随分とひどいなりをした人影が立っていた。随分長いこと雨の中を駆けて来たのだろ

う、頭上まで引き被ったフード付きのローブは、雨水を充分に吸ってか、裾の下から雫が垂れるほどにぐっしょりと濡れている。

文字通り全身を覆い隠したその姿からは、年齢はもちろん性別さえも判然としない。ただ、大人の男と見なすには、あまりにも上背と肩幅が足りなかった。

最初こそ、ドアの音に驚いた客らは、一瞬振り返って人影に注意を払ったものの、ほどなくして新しい客の来店と判断したか、再び歓談の輪へと戻っていった。しかし、店に元の喧騒が戻った後もなお、人影はテーブルに着くでもなく、はたまたカウンターに座る様子も見せず、ただ、ドアの前で立ち尽くすばかりで、動く様子を見せなかった。

やがて見かねたレツジョ爺が、人懐っこい笑みと共に人影へと歩み寄った。

「いらっしやい。生憎、宿の方はもう埋まってるんだがねえ」

「……てくれ」

刹那、ローブの人影は、見えない段差でも踏み外したかのように、その場に崩れ落ちた。

咄嗟にクロエは人影に駆け寄り、抱き上げてフードを剥ぎ取った。――と。

「え？」

そこに覗いた人物の顔に、クロエは思わず息を？んだ。

白い肌、涼やかな目鼻立ち、そして何より、決して見紛う事のない、見事なルビー色の髪の毛……。

「殿下……？」

それは紛れもなく、昼間、王宮の廊下で遭遇したあの少女に違いなかった。

薄く、それでいて艶やかな唇が、呼吸のたびにしつとりと輝き、一方で、閉ざされた薄い瞼の縁では、長くまつすぐな睫毛が儚げに震えている。

ややあって、店のまぶしさに耐えかねてか、少女はその長い睫毛

をびくつかせると、やがて、生まれたての雛鳥が卵の殻を破るかの
ように、そっと瞼を開いた。

「あ……」

ラピス色の大きな瞳が、生まれて始めて母親を見た子猫のように、
じっとクロエを見つめ返す。

「あの……殿下……？」

「た……すけて、くれ」

「え？」

少女が口にした意外な言葉に、クロエは思わず訊き返した。

「どういう、事ですか？」

「この国を……この国の民を……たすけて」

が、少女は、残された力で辛うじてそれだけ言い残すと、再び瞼を
閉ざし、クロエの懷にガクリと身を沈めた。

三章

肌を刺す明け方の冷氣に叩き起こされるように、クロエは目を覚ました。

昨夜まで街に大量の雨を注いでいた雨雲は、今やことごとく地平の彼方へと消え去り、窓越しの空は、澱みのないすっきりとした青色に染められている。

寒さに硬直した身体を震わせつつソファから起き上がったクロエは、開け放され、冷氣の通り道と化したままの窓へ歩み寄ると、早速、これを閉ざした。

外の冷氣を締め出したクロエは、今度は部屋に暖を入れるべく、壁際の暖炉前にしゃがみ込んだ。煤で汚れた暖炉には薪の一つも置かれてはいない。代わりに暖炉の真中に据えられているのは、レモン大ほどの太く短い、黒い円筒ただ一つである。

変換士の常として、ついモノリスに触れ、直接命令を言い渡そうとしたクロエは、はたとその手を止めた。暖炉脇にしつらえられたレバーが目についたからだ。

本来であれば変換士のみが可能とするプルームの変換だが、それを一般人は、専らこのような変換装置に頼って行っている。そして、実は変換士にとっても、頼れる時はこの装置に頼った方が楽出来る、という点是一般人と変わらなかつたりもする。まして、寝覚めの悪いクロエにとって、起き抜けの変換ほど面倒くさい作業はなかった。

レバーに手をかけ、ぐいと引き上げる。すると、やがて暖炉のモノリスから、柔らかな光と共にじんわりと温かな熱が広がり始めた。

「はふう……あつたかい……」

冷たい指先を、暖炉の前でしきりに揉み合わせながら、クロエはふうと息をついた。

——と。

「う……ん」

不意に背後から上がった呻き声に、クロエはびっくりと身じろぎし、はっとして振り返った。そこで初めてクロエは、部屋のベッドに昨夜の少女を寝かせていた事を思い出しのだった。

足音を忍ばせながら、そつとベッド脇に歩み寄る。ふかふかの枕に埋まる少女の顔は、血の気を失った蒼白な顔色さえ無視すれば、その表情はどこまでも穏やかなものだった。

今でこそ、清潔な寝巻きに着替えさせてはいるものの、店に現れた当初の彼女の格好たるや、まさにひどいの一言に尽きた。

ローブの下に少女が纏っていたのは、木綿の下着と絹のネグリジェのみ。誰がどう見ても、外出のために身につけたとは考えられない服装だった、にも関わらず彼女の服は、そこかしこが砂や煤、草の汁などで汚れ、まるで一昼夜休まず野山を駆け回って来たかのような、そんな様相を呈していた。

——一体、彼女の身に何が起こったというのだろう。

少女の寝顔を見下ろしながら、クロエは、彼女の身に起こったであろう出来事に思いを馳せた。あんな土砂降りの夜に、よもやピクニックもあるまいに。

薄い羽根布団が、少女の呼吸に合わせてゆるやかに上下する。安らかな表情で寝息を立てる少女の寝顔に見入っていると、彼女が昨晚、鬼気迫る様相で深夜の酒場に駆け込んで来た少女と同一人物である事など、つい失念してしまいそうになる。

うつすらと閉じられた瞼、ゆで卵のようになめらかな肌、そして、艶やかな桃色の唇。

少女と自分の間に横たわる身分の差も忘れ、クロエは、その奇跡的なまでの見事な造形にひたすら見入った。

——触れたい。

なんととはなしにクロエは、その骨張った指先を、少女の白い頬にそつと近づけた——。

と、その時。

トン、トン。

「ぎゃおおっ！」

唐突なノック音に、クロエは鼠に噛まれた猫よろしく飛び上がった。

「どうなさいました？　クロエさま！」

ノックに続き、ドア越しにベルダの不安げな声が響く。

「べべ、ベルダさん！？」

「クロエさま、今の悲鳴は一体どうされたんですか？　――まさか、起き抜けのナニをその小娘に弄り倒されていらっしゃるとか！？」

「ち、違います！　ってか、何なんですかその下衆な発想は！」

「おのれ、許すまじ小娘っ！　いくら朝一のクロエさまがスゴいからと言って、」

「スゴくないです！　ぜんっぜんスゴくないですから！　あの、ところでベルダさん、こんな早朝に一体何の用なんですか？」

「ええ、朝食をお持ちしましたので、もし召し上がるのでしたらと」「そ、そういう事なら、早く言って下さい……」

早くも一日分の精神力を使い果たしたクロエは、なおも早鐘を打つ心臓を宥めすかしながら、ふらつく足取りでドアを開け放った。入って来たのは、朝食を乗せたトレーを抱えたベルダだった。

「今日は、お早かったですね」

テーブルにトレーを置きながら、ベルダは満面の笑みをクロエに向けた。屋根裏の小部屋が、温めた牛乳や焼き立てパンの優しい匂いに満たされる。

「ありがとうございます」

早速クロエは、トレーから平焼きのパンを取り上げると、ちぎる事もせずそのままかぶりついた。バターと小麦の香ばしさが、目覚めたばかりの頭に幸せを届ける。

「ところでクロエさま」

「はい」

先程の満面の笑みとは一変、じと、と鋭い眼差しでクロエを睨み据えながら、ベルダは唸った。

「あの方は、ひよっとしてクロエさまのお知り合いの方ですか？」

「い、いえ、まさか、」

「アヤシイ……ですわ」

ぎらり、と、ベルダの眼鏡が鋭い光を放つ。

「ひよっとしてクロエさま、あちこちの地脈流を調査して回っているなどと仰りながら、本当は、いろんな街の女を取っ換え引っ換えつまみ食いしては泣かせて回っているんじゃないかもしれませんこと？」

「ぼ、僕が、ですか？」

「挙句、泣かされた女の一人が、責任を求めてクロエさまの元へ駆け込んだ、とか」

「ち、違いますよベルダさん！　そもそも僕なんかが、女性を取っ換え引っ換えなんて出来る訳がないですよ」

「クロエさま。もし男の子が産まれましたら、是非この私に育児を任せて頂けませんか？　私好みの男性に育て上げ、将来はクロエ二世さまとうへへへ……」

「きもちわるっ！　ベルダさん、さすがにその発想は本気で気持ち悪いです。——違いますよ、恐らくは王族の方です。何らかの事情で、王宮を抜け出したものと、」

その時、再びベッドの方から、うん、と苦しげな呻き声が響いた。

「何だ……さわがしいのう……」

すかさずクロエはベッド脇に駆け寄り、大理石の白さもかくやの少女の顔を覗き込んだ。

ややあって少女は、その長い睫毛をふるふると震わせながら、薄い瞼をそっと開いた。

「何だ……貴様」

開口一番、少女はそう訊ねた。

それは、寝起きのためか、昨日の毅然とした口調とはうって変わった、ひどくぼんやりとした口ぶりだった。

「え、ええと、変換士、クロエ・アルカサルです」

クロエの返答に、少女の寝惚けまなこが俄かに見開く。

「クロエ……アルカサル……」

何かを思い出すように、言葉を反芻するその少女に、クロエは訊ねた。

「あの、恐れながら、あなたは、もしか、」

「ミラ・カスパリア」

「……え」

それは、クロエにとっては決して予想外の返答という訳ではなかった。とはいえ、改めて耳にすると、やはり驚くより他はなかった。国名を拝したその姓は、紛れもなく、彼女が王家の人間である事を示すものに他ならなかった。

驚きに顔を強張らせるクロエを横目に、少女は誰の手を借りるでもなくムクリと身を起こすと、履物も借りずにベッドを降り、裸足のままスタスタとテーブルに歩み寄った。そして、誰に断るでもなくパンを手に取り、齧りつく。

が、齧るや否や少女は、早々にパンを口から離し、ポイとテーブルに投げ捨てた。

「不味い。何だこれは。馬の餌でも食わす気か」

「はいい？」

パンを運んだ当人のベルダが、眼鏡の奥に満面の笑みを浮かべて返事をよこす。だが、そのか細い指が、次第に分厚い銅製のトレーにメキメキとめり込んでゆくのを、クロエただ一人は、横目でしっかりと捉えていた。

「オレンジを食べたい。おい、その召使い。今すぐオレンジを持って参れ」

「か……かしこまりましたああ」

またもや満面の笑みで応じると、早々にベルダは踵を返し、部屋を後にした。テーブルに、もはや原型を留めない程にねじれひしゃげた、銅のトレーだったものを残して。

ベルダが退室するや、早速クロエは少女に訊ねた。

「やはり、あなたは王族の……」

ところが、そんなクロエの問いに、少女は答えるどころかまるで耳を傾ける事もせず、ただ、先程のパンを物珍しそうに弄くっては眺めすがめつしていた。

「もしや、これはパンなのか？」

「え、ええ、そうですか」

「ほう。パンにも色々な種類があるのだな。こんな土臭いパンを口にしたのは初めてだ」

なおも手持ち無沙汰にパンを弄くる少女には、自分より頭一つ背の高い男を前に、怖じる様子などは一切見当たらなかった。むしろクロエの方こそ少女を前に畏まり、存在感という一点に絞って言えば、かえって少女よりも小さく萎んでいる。

「ところで、昨夜は何故、あのようなお姿で？」

少女はまたしてもだんまりを決め込んだ。今度は、自然に聞き流したのではない、明らかに意図的な沈黙だった。

「ミラ……様？」

その時、やおら窓の外から、街の眠りを乱暴に破る少年の声が飛び込んで来た。

「王宮でクーデターが起こったぞお！」

さらに、窓向こうの少年は続けた。

「レオン陛下が捕えられたあ！」

早朝の街路に響く少年の声に、少女はただ、ぐっと唇を噛み締めながら耳を傾けていた。が、その細い肩は、今にも破裂せんばかりにふるふると震えている。

「ひょっとして、その事と関係が……？」

クロエの問いに、ややあって少女は、こく、と頷いた。

クロエはそこで初めて、自身の問いの迂闊さに思い至った。現王レオンには、母親を共にするミラという名の一人の妹がいる。それは、王都の住人であれば当然聞き知っておくべき、自明の常識だった。

「ああ。それで、私の所にも……。私一人は、どうにか逃げおおせたが、兄上は……」

沈痛な面持ちを浮かべつつ、震える声でミラは呻いた。
と、その時だ。

ドドッ、ドドッ……ギシ、ギシギシ……。

やおらドア越しに、大人数がいつせいに階段を踏みしめる、せわしない木擦れの音が響き始めた。

さらに、そこへ暢気なベルダの声が加わる。

「はい、殿下は上のお部屋にいらっしゃいます」

怪訝に思い、クロエはミラの方を振り返った。すると――

「奴らだ……私を追って、こんな所まで」

そこには、ただでさえ白い頬を、いよいよ死人のように青褪めさせたミラの姿があった。

「奴ら、と申しますと？」

「イスマエルの放った追手だ」

クロエの問いに、震える声でミラは答えた。

「え？ ……どういう、」

「クーデターを起こしたのは、イスマエルだ」

彼女の言葉は、クロエにとってはまさに青天の霹靂だった。つい昨日、クロエはそのイスマエルと共に同じ食卓を囲んだばかりだったのだから。

そのイスマエルには、あと数時間後に兵を従えて王座を覆しに行く、などという覇気を帯びた様子などは、微塵も感じられはしなかった――にも、関わらず。

「イスマエル……殿下が？」
コンコン。

「クロエさま」

ドア越しに、ベルダの声が響く。もちろん、その用向きにクロエは察しがついている。

が、敢えてクロエは、そ知らぬふりでドア越しに訊ねた。

「どうしました、ベルダさん」

「はい、殿下をお迎えに上がったという方が」

再びクロエは、ミラの方を振り見た。ラピス色の大きな瞳が、何かを言いたげに、じっとクロエを見上げる。――と。

「クロノ」

「え？」

やおらミラが囁いた名前に、クロエは耳を疑った。

――どうして、父の名を？

が、そのような疑問は、続けてミラが口にした言葉によって一気に消し飛んだ。

「……助けて、くれ」

その言葉に弾かれるように、クロエは窓を開け放つと、すかさず外を見下ろした。

その窓の下には、象が通えばたちまち両端の壁に身を詰まらせてしまうであろう、ひどく狭い路地裏が通っていた。クロエが顔を出したちょうどその時、そんな路地裏の片隅には、オレンジで荷台を一杯にした小さな荷車が停められていた。

「殿下……かくなる上は、」

今一度、クロエは背後のミラを振り返った――その時。

カチャ。

いよいよ、ドアノブの回る乾いた音が、明け方の静かな空気に響いた。

「と、飛びますよ！」

言うが早いか、クロエはミラの腕を取ると、彼女と共に窓の棧を踏み越え、眼下に停められたオレンジの荷台目掛けてまっしぐらに飛び込んだ。

次第に遠ざかる窓の奥から、追手と思しき男達の怒声が響く。

「ミラ殿下だ！」「逃げられた！」「追えっ！」

やがて二つの影は、まるで吸い込まれるようにオレンジの荷台へずぼりと突っ込んだ。

と。

がごん！　ごろごろごろ……！

その衝撃で荷台の枠が抜け、と同時に、文字通り堰を切ったように、大量のオレンジが裏路地へと溢れ出た。

オレンジの雪崩れに巻き込まれたクロエ達は、成す術もなく石畳へと滑り落ちる。

めまいを堪えつつクロエが顔を上げると、彼らが飛び出した窓から、白の法衣で身を包んだ男達が、上体を乗り出しつつ彼らを見下ろす姿が見えた。

「おい、てめえらそこで何やってんだあ！」

やおら間近で響いた怒号に、クロエはがばと身を起こした。すると、今まさに向かいの商店から、荷台の持ち主と思しき大男が、猛然と飛び出して来るところだった。

すぐさまクロエはオレンジの山から立ち上がると、ミラの腕を取り、大通り目掛けて石畳を蹴り出した。

「走ってください！」

だが————ごてっ！

早速、クロエは足元に転がる大量のオレンジに足を取られ、石畳の上へ後ろ様にすっ転んでしまった。

「あ……あうう……」

後頭部を派手に打ちつけ、脳震盪を起こして目を回すクロエを、しかし、荷台の主は気遣うでもなく、その胸倉をむんずと掴み、乱暴に引っ張り上げて怒鳴りつけた。

「てめえ、何してくれやがった！」

「す、すみません、でも、今はそれどころでは……」

今度は、宿屋の裏口から飛び出してきた追手達が、クロエ達の元へと殺到して来た。その姿を見るや、咄嗟にミラはその場から駆け出す。

「すすす、すみません、このお代はいつか必ず……」

「いつかじゃねえ、今払え！　つーかてめえ変換士だろ？　金持っ

てんだろ!？」

「ぐぐ、ぐるじ……」

いよいよ男が、クロエの喉元をぎりりと締め上げた、——その時だ。

「クロエさまに、何て事するんですかあああああっ!」

不意に、白と黒の影が舞い降り——

ゴガアンツ!

男の禿げ頭に、強烈なカカト落としを食らわせた。

「クロエさまを傷つけようとする奴は、たとえ王様だろうと神様だろうと許しませんわ!」

オレンジの海にごろりと倒れる男の巨軀を見下ろしながら、ベルダは傲然と言い放った。

「た、助かりました、ベルダさん」

が、クロエが一息ついたのも束の間。

「クロノおっ!」

路地裏に悲痛な悲鳴が反響し、クロエははっと振り返った。すると、路地の向こうには、今まさに追手達に追いつかれんとするミラの姿があった。

すると。

めぎめぎめぎ……ごろごろごろ……

やおら、クロエの背後で木材の激しく軋む音が響いた。と同時に、巨大な影がゆっくりとクロエを飲み込んでゆく。恐る恐る背後を振り見たクロエは、ベルダが両腕で抱え上げる“それ”に、もはや驚くを通り越し、唾然とした。

「ちょ……ベルダさん?」

「ふんごをををををっ!　さいだい、しゅつりよくううっ!」

それは、つい先程クロエ達が無謀なダイブによって破壊した、オレンジの荷台に他ならなかった。その荷台を、ベルダは積み込まれたオレンジごと両腕に高々と掲げると、はるか前方を走る追手達目掛け、ぶん、と放り投げた。

「くらえええええっ！」

女性とは思えない、獣のような怒号が路地裏に響き渡る——や否や。

どがああああんっ！

地が割けるかと思われるほどの炸裂音と共に、荷台は追手とミラとの間を遮るように落下した。狭い路地に、木材の破片と大量のオレンジがぶちまけられ、すさまじい振動に、石畳のみならず周囲の空気がびりりと震える。

が、それでもなお、追手達全員の足を止めるには至らなかった。六、七人ほどの追手のうち、その半分程度が、オレンジの驟雨をくぐり抜け、なおもミラの背中を追い続ける。

「ちっ、逃したか——行きますわよ！ クロエさま！」

言うなりベルダは、今度はクロエの身体をその小脇に抱えると、オレンジの海に足を蹴り出し、周囲の景色が歪むほどのスピードで駆け出した。

「ちょ……待ってくだ、ベルダさん！」

うろたえるクロエに構わず、ベルダはなおも路地裏を駆けた。そして、横倒しになった荷台に行く手を阻まれた追手達の頭上を、のみならず荷台さえも見事な跳躍によって飛び越え、危なげもない着地と共に、再び石畳を駆け始めた。

路地裏から大通りに飛び出すなり、ベルダはすかさず、人影も未だまばらな明け方の町を見渡した。そして、ある一点に目を留め、叫んだ。

「いましたわ！」

「え？ どこに、」

クロエの質問に答える事もせず、ベルダは再び石畳を蹴り出すと、先程よりもなおいっそう速力を上げて駆け出した。

「ベベベ、ベルダさん、もう少しゆっくり……」

その脇で、すでに顔を蒼白にしたクロエが涙目で訴える。

「何を仰いますの！？ そんな悠長な事を仰って、あのクソ生意気

なドロボウ猫……じゃない、殿下を見失っては元も子もありませんわ！」

「た、確かに、彼女を助けるのが先決ですけど、にしても、その、」
「助ける？ 何を仰いますの！？ あのガキを王宮に引き渡せば、国から一〇〇〇万ジェニの報酬を頂けるんですよ！ 一〇〇〇万ジェニを頂いたら、南洋の島に農場を買って、クロエさまと一緒にのんびりレモンでも育てながら過ごすんですの！ そして老後は、細々とレモンリキュールを造りながら暮らすんですの！」

「な、何か、具体的かつ現実的過ぎて怖いんですけどお！」
その間も、なおもベルダは往来の合間を駆け続ける。大の男を小脇に抱えているとは思えないほどの機動力で、朝市の準備を始める人々の合間を抜け、並走する自走車を抜き去りながら突っ走る。

ついにベルダは街の城門前にて、ようやくミラの、そして、彼女を追う白尽くめの追手達の背中を捉えた。

が、既に城門の手前には、鎧を纏い、剣を手にした屈強な警備兵達がずらりと待ち構えていた。その傍らには、白い法衣を纏った男達が立っている。どうやら、追手の一部が城門に先回りし、王女を待ち構えるべく先手を打っていたものらしかった。

男達の壁を前に、ミラはすかさず足を止めた。その小さな背中へ、ようやく彼女に追いついた追手達の手が殺到する———と思われたその時。

「させるかああああですわああっ！」

すかさずベルダは石畳を蹴り、再び大きく跳躍すると、空中で鮮やかに身を翻し、その両足を、追手達の背中へ叩き込んだ。

どごとごとつ、と鈍い音を立て、追手達はさながらドミノのように、いっせいに石畳へと突っ伏した。———その一方。
すたっ。

男達の死屍累々が築かれた横に、今まさに一仕事を終えたばかりのベルダが、風のない日に枝から舞い落ちる木の葉のように、軽やかに降り立った。

啞然とする通行人達の様子には構わず、パンパンとスカートの土埃を払いながら、ベルダは平然と言った。

「ふー……危うく報酬がパーになるところでしたわ」

一方、彼女の脇では、彫像のように表情を強張らせたクロエが、いよいよ顔を真っ青にし、死霊のようにぐったりとうなだれている。

「どうなさいました？　クロエさま」

「……は……はきそう……」

が、その時。

「く、来るなああっ！」

やおら路地に響いた悲痛な叫び声に、クロエは否が応にも正気へと引き戻された。がばと顔を上げ、声の主を探す。すると、その視線の先には、城壁を背にしつつ警備兵達に取り囲まれて立ち往生する、紅髪のミラの姿があった。

「ベルダさん！」

「わかってますわあ！」

叫ぶが早いか、再びベルダは石畳を蹴り、スカートをはためかせながら警備兵達の輪の中へ舞い降りた。突如眼前に舞い降りた奇妙な人影に、警備兵達が、どよ、と色めき立つ。

その中で一人、ミラだけが、安堵と喜びをないまぜにした嬌声を上げる。

「クロノ！？」

が、そんな彼女の表情が輝いたのはほんの一瞬に過ぎなかった。目の前に現れたクロエの姿に、ミラの表情はみるみる曇ってゆく。

「お待たせしました、殿下」

きりっ、と精悍な眼差しを振り向けるクロエに、しかしミラは、今や酷寒の冷気を帯びた視線を返した。

「かっこ、わるいのう……貴様」

「え？」

彼女のジト目でクロエは初めて、自分がベルダの小脇に抱えられたままという恥ずかしい状態にある事に気付いた。

「うあつ、い、いや、これは、」

ところが、クロエがその弁明を全うする事はかなわなかった。突如ベルダは、何の断りもなくクロエの身体を石畳へ取り落としたのだ。「いたた……ベルダさん、離すなら離すと、せめて一言、」

が、顔を上げたクロエの目に飛び込んだできたのは、今のクロエにとって、あまりにも望ましくない光景だった。

「申しわけ、ごさいませんクロエさま、すこし、はりきりすぎた、みたい……ですわ」

そこには、中途半端なポーズのまま、手足を硬直させたベルダの姿があった。

「う、うそ……」

愕然とするクロエを振り返る事もせず、なおもベルダは辿々しく言葉を紡ぐ。

「そろそろ、プルームの、ざんりよ、う、が……が、g……」

ピタ……。

いよいよ完全な人形と化してしまったベルダを横目に、そっと身を起こしたクロエは、ミラを背中に隠し、改めて目の前に並ぶ警備兵の男達と対峙した。

「何故、こやつは急に固まってしまったのだ？」

「いえ、違います。彼女は、プルームを動力源として動くオートマタなんです」

なおもクロエは、眼前の男達を睨み据えながら答えた。王族の問いに対し背を向けながら答えるなど、本来であれば不敬罪にも問われかねない無礼な行為である。しかし今はクロエにも、そしてミラにも、そんな形式上の礼儀に気を払う余裕などは微塵もなかった。

「オートマタ……人形なのか!？」

「はい。どうやら、チャージしていたプルームの残量が切れてしまったようです……」

「ならば、今すぐチャージを、」

「出来るならば、とっくに取り掛かっています、しかし……」

クロエはぐると周囲を見渡した。ベルダのモノリスにプルームを充填するには、一度、彼女の胸部にある蓋を開き、中から充填用のモノリスを取り出さねばならない。が、屈強な兵士達に取り囲まれ、一寸の予断も許さないこの状況で、のんびりとそんな作業にかまける余裕は、当然ない。

よしんば騎士の情けとしてそのような余裕を与えられたとしても、ランタンや暖炉のようなプルームの供給口もないこんな石畳の上では、そもそもチャージ自体が不可能でさえある。

「こ、こうなったら……」

そつと男達を振り見たクロエは、不安げな足取りで男達の前に進み出ると、これまた覚束ない手つきで、腰に携えた長剣を抜いた。腕の長さほどはあろうかという長い細身の刀身は、夜の闇を凝らせたかのような漆黒を帯びている。もちろん、これもモノリス刀だ。

浮付いた呼吸もそのままに、クロエはその刀身を、ふらふらと中段に構えた。

そんなクロエの構えを見た警備兵の列から、たちまち失笑が湧き上がる。

クロエの構えは足も腰もひどく浮つき、おまけに剣の重みに腕力が負けているのか、あるいは単に怯えているのか、終始、その剣先は不安げに震えていた。見る者が目にすれば、それが素人の構えである事は一目瞭然だった。

「な、なんだ、笑われておるが……？」

怪訝そうに訊ねるミラに、しかしクロエが返事を寄越す事はなかった。血の気が失せ、まっさおになったその唇は、ただひたすら、独り言を唱える事に費やされていたからだ。

「ど、どうした、クロノ？」

やがて警備兵達の輪の中から、ひととき屈強な体格を持った一人の男が進み出た。岩山のようなその威容に、頭ひとつ小さなクロエは思わず怯み、軽く後退る。

「ふざけているのか、貴様」

開口一番、男は獣のような声で呻いた。逞しい筋骨と鋭い目つき、そして、角ばった坊主頭の所々に走る刀傷が、男の迫力をいやましに増強している。

「変換士ふぜいが。そんな物を俺達に向けて、一体どういうつもりだ」

「よ、よろしければ、ここを通らせて、頂きたいと……」

なおも唸る男に、強張る喉を振り絞り、クロエは答えた。一方、男はその浅黒い顔に、苛立ちと呆れ、そして一抹の憐れみさえも露わにして返す。

「ふざけるな。日がな一日穴倉に籠り、ただ王宮から与えられる禄を食むしか能のない寄生虫ふぜいが、今度は、俺達警備兵の手柄を掠め取りたいと言うのか」

すると、それまで相手の気迫に押され、ただ恐怖に視線を泳がせていたクロエは、やおら、その眼差しに険を湛え、静かに言った。

「そ……それは、偏見です」

「偏見も何も、事実だろうが」

嘲るような男の口ぶりに、さらにクロエは食って掛かる。

「た、確かに……変換士と呼ばれる方のほとんどが、学会の建物にこもり、独りよがりな研究ばかりを続けておられるのは事実です……で、でも、中には本気で国を憂い、真実のために戦い続ける変換士もいる！」

「寄生虫ごときが、国を憂える、だ？」

言いながら男は、背中の鞘から大剣を引き抜くと、そのままぴたりと大上段に構えた。

数歩の間隙を残し、剣を構えた二人の男が対峙する。が、その力量差は、剣を切り結ぶ前から既に露わとなっていた。

半身を取りつつ深く腰を落とした男が、その間合いに張り巡らせた気には、文字通り鼠一匹さえ這い入る隙もありはなかった。素人判断で下手に斬りかかれれば最後、途端に男の一撃を誘い、その大剣の餌食と化してしまうだろう事は、いかな剣に心得のない者の目に

も一目瞭然だった。

さらなる対峙の後――。

最初に踏み出したのは、男の方だった。

踏み込みと同時に、男は大上段に構えた大剣を一気呵成に振り下ろした。身体のしなりに剣の自重も加え、刀もろとも叩き潰す勢いで、敵の頭上に重い一擲を食らわせる。

「ひっ……！」

「クロノ！」

勝負は、その場の誰もが予想した通り、一瞬で決した。

――ただし、誰もが予想だにしなかった結末と共に。

カアアアアン……ガランガランガラン……。

石畳をしたたかに叩く金属音が、まるで試合終了の合図であるかのように、静かな朝の空に響き渡った。周囲に構える兵士達はもちろん、騒ぎを聞きつけ家々から飛び出してきた野次馬達さえも、誰もがその目を疑い、そして声を失った。

「なにが……」

今や刀身のほぼ全てを失い、柄のみとなった愛刀を見下ろしながら、男は呆然と呻いた。

その片割れである刀身は、すでに男の背後で静かに横たわり、高みを増し始めた朝日の光を浴びて、石畳の上で白々と輝いている。

本能的に後退り、クロエから間合いを取った男は、今一度、刀身の切り口をつぶさに検めた。が、男がそこに見出したのは、力負けした場合に生じるはずの、鋭利な切断面などではなかった。それは、湯気と共に赤銅色の光を放つ、どろりと爛れた醜い切り口だった。

「なんだ……これは」

一方のクロエの手には、相変わらず、例の黒い剣が無傷のまま握られている。が、改めてその刀身へと目を凝らした男は、その黒い表面から、ゆらゆらと陽炎のようなものが立ち昇っている事に気付いた。

「貴様、その剣に何を仕込んだ！」

男の怒号に、クロエは、振り下ろした剣を構え直しながら答えた。

「熱を、加えました……大体、二〇〇〇度ぐらい」

「溶かしたというのか、その熱で」

ぎり、と齒軋りする男に、クロエはなおも敢然と言った。

「こ、これが、あなたが馬鹿にした、変換士の力です！」

「ほう……」

男は、今や完全に用を成さなくなった剣の柄を腹立たしげに石畳へ叩き付けると、腰から予備の長剣を引き抜き、今度は、下段に深く構えた。

刹那、男は再び鋭く踏み込み、その剣を袈裟に振り上げる。

咄嗟にクロエは後ろ様へ飛び退くと、背後のミラを振り見つつ怒鳴った――

「伏せて！」

――が早いか、クロエはその剣を、男達の足元に残る水溜りへと放った。放るなりクロエは石畳に伏せ、その手で素早く耳を塞ぐ。

水溜りにクロエの剣が着水するや否や。

ドオンッ！！

突如、男達の足元から、激しい爆音と共にすさまじい爆風が巻き起こった。

たまたま運悪く水溜りの付近に居合わせた警備兵達が、透明な象にでも撥ね飛ばされたかのように激しく吹っ飛んだ。運良く爆風の難を逃れた兵達も、爆音や湯気によって視聴覚を奪われ、目標どころか味方と野次馬の区別すらかなわなくなったか、ひどい混乱をきたし始めた。

もうもうと白い煙が立ち込める中、クロエの言うとおりに石畳に伏せていたミラは、そっと顔を上げ、周囲を見渡した。

「な……何が……？」

今や彼女の周囲は、折り重なるようにして倒れる鎧姿の男達と、そんな兵達の身体に足を取られながら、おぼつかない足取りで彷徨す

る兵や人の影で溢れていた。

「逃げましょう、殿下！」

「あ、ああ……？」

ミラが頷くのも待たず、クロエはミラの細腕を取ると、人混み目掛けて一目散に駆け出した。途中、投げ捨てた剣を回収し、棒立ちのベルダを抱え上げ、混乱と湯気に乗じて一気に人垣を突き抜ける。

「な、何が起こったのだ？」

「剣の熱で、水蒸気爆発を起こしたんです」

「は？ 聞こえぬぞ」

「ええと、水溜りに熱した剣を投げ込んで、水蒸気爆発を、」

「はあ？ 聞こえぬっ！ もっとはっきりと申せ！」

苛立ちを帯びたミラの声に、ふとクロエは気が付いた。伏せろと言った覚えはある。だが、耳を塞げ、とまでは確かに忠告していない。

「殿下の寝顔、ものすつごく可愛かったです！」

「だから聞こえぬと言っておろうが！」

霧を抜けるや、クロエ達の眼前に一台の荷車がぬっと姿を現した。恐らく、街の市場に魚を卸した帰りなのだろう。空の荷台には、暖かさを増し始めた朝の空気の中で、生臭い異臭を放つ空の木箱が山と積まれている。

荷車の前にしつらえられた操縦席は、その荷台が、紛れもなく自走車である事を示している。が、操縦者と思しき人影は見当たらない。その様子を見るやクロエは、咄嗟にベルダの身体を魚臭い荷台に放り込んだ。続けて、ミラの身体も同様に抱き上げる。

「なっ、何をする！」

「殿下も乗って下さい！」

「は？」

ミラの身体を荷台に押し上げると、クロエは早速、海水でぬめった操縦席に飛び込んだ。そして、目の前の操縦板から突き出たレバーを思い切り押し上げる。

「お、お前ら、そこで何やってんだよオ！」

「あっ！」

背後で、荷車の持ち主と思しき男が声を上げる。が、もはやクロエは振り返りもせず、さらにレバーを押し上げると、運動エネルギーの出力を目一杯に切り上げた。

「走れえええ！」

クロエの嘆願に呼応してか、ほどなくして荷車は、ごろごろと軽快な音と共に石畳を駆け始めた。

「このまま全速力で城門を突っ切ります！」

「おう！ 走れ走れ！」

ようやく聴覚を取り戻したかミラは、クロエの掛け声に威勢よく応じる。

荷車は、並み居る警備兵らの列を突っ切ると、そのままの勢いで城門を飛び出した。

「ところで貴様、さっきは一体何と申しておったのだ？」

「え？」

「え、ではない！ さっきは何と申していたのだ、と聞いておる！」

「きよ、今日もいい天気になりそうですね！ 殿下！」

すぐさま警備兵達は彼らを追った。だが、自走車に乗り込んだ彼らが城門を出た頃には既に、クロエ達が乗ったおんぼろ荷車は、ぶどう畑が広がる丘陵のそのはるか向こうへ、もうもうと土煙を上げながら駆け去っていた。

四章

昼も半ばを過ぎる頃には、すでに周囲の景色は、王都近郊のぶどう畑を抜け、茫漠とした小麦畑の平原へと取って変わっていた。

王都を脱した二人と一体は、レオン兄妹の母親一族が領主として治める、カサンドラなる街を目指していた。人の足ならば三日はかかる行程だが、分捕った荷車を使えば、半日も走れば充分辿り着く距離である。

どこまでも広がる黄金色の絨毯の中を、古い荷車に乗ってガタゴトと流しながら、操縦席のクロエは、ふと、背後のミラに訊ねた。

「そういえば殿下は先程、私の事をクロノ、とお呼びしていましたね」

魚臭い荷台で、木箱に埋もれながら小麦畑の海に見入っていたミラは、腹が減っているのか眠いのか、「ああ」と、いかにも気のない返事を寄越した。その傍らでは、未だプルームの補給を受けられずにいるベルダが、相変わらず中途半端な表情と格好で、荷車が揺れるのに合わせて、木箱と共に右に左へと転がっている。

「そんな事よりクロノ、この臭いはどうにかならんか」

「そ、そう仰られましても……荷台を洗っている間に追いつかれては……ん？」

クロエが煮え切らない答えを寄越す間に、ミラが荷台の柵を越えて操縦席へと乗り込んで来た。さらにミラは、クロエが座る粗末な木椅子へ、クロエの腰を押しやるように強引に腰を下ろす。と共に、小さいながらも形の良い尻が、クロエの腰にぽふんと当たる。

唐突かつ大胆な接触に、クロエは、意図せず身体に良くない動悸を覚えた。顔の火照りを悟られまいと、慌ててミラから顔を逸らし、俯く。

ところがミラは、そんなクロエの努力など知らぬとばかりに、ラピス色の瞳を見開きながらクロエの顔を覗き込んだ。

「そなた、歳はいくつだ？」

動揺を気取られないよう、クロエはつとめて静かに返す。

「十八、です」

「十八、だと!？」

クロエの答えに、ミラは猫のような目を見開くと、声を裏返して喚いた。

「嘘だ! そなた、あの脱プルーム論で有名な、クロノ・アルカサルであろう?」

「ち、違います。それは父の名前です。僕の名前はクロエ。クロエ・アルカサルです」

「息子だと? ——ああ……なるほど」

一人合点するミラの一方で、クロエもまた疑問の答えに納得していた。つまり彼女は、これまでずっと、クロエを彼の父親と混同していたのである。

「道理で、おかしいとは思っていたのだ。二〇年近くも前に活躍した変換士が、これほど若い訳があるのかと……よもや息子だったとはな。しかも、私と同じ歳だったとは」

「え?」

ミラの最後の言葉に、クロエもまた驚きに目を瞠った。

「という事は、殿下も十八……なのですか?」

今一度、クロエはミラの姿を見つめ直した。ミニマムな身長といい、卵のように丸みを帯びた顔といい、何より、女と呼ぶにはあまりにも凹凸に乏しい筒のような体つきといい、どう眺めすかしても、その姿は一〇代前半の未成熟な少女にしか見えない。

「貴様、今、私の言葉を疑ったな?」

「え、そそそ、そんな、めっそうもございま、」

だが、ミラはクロエの言葉尻を待たず、早々にその首へ腕を回すと、氣道をキメながらギリギリと締め上げ始めた。もちろん、締め上げられるクロエの後頭部を出迎えるはずの二つの膨らみは、そこにはない。

「いげげげげ、ぐるじ、いぎが、でぎまぜんです、あい」

「構わん、死ね！ 私を子ども扱いする者は、皆死ね！」

いよいよクロエの目の前で、冥土への扉が開きかけた、その時だった。

ドドドドドド……

「ミラさまあああああ！」

その大音声に、クロエは思わず前を見やった。すると、はるか街道の前方に、しきりに馬に鞭を入れつつ、クロエ達の荷車へと駆けて来る一人の男の姿があった。自走車をはじめ、プルームを動力とする移動手段が充実した昨今、それでもなお好んで馬に乗るのは、プルームを買う金もない貧乏百姓か、そうでなければ騎士と相場は決まっている。

「げ……ギル」

やにわにミラが、顔をしかめ、忌々しげに呻いた。

「お知り合いですか？」

「ああ。母方の家に、古くから仕える騎士一族の者だ」

そう説明を入れるミラの表情は、しかし、知り合いに対する親しさと言うよりむしろ、庭の草花にとりつく芋虫を見るかのような嫌悪感を帯びていた。

とはいえ、目的地方面から、しかもミラの名を叫びながら駆けつけてくる人間が、敵対勢力からの刺客であるとは考えにくい。ともすれば保護を求められるかもしれないと思い、声をかけましょうかと提案したクロエに、しかしミラは、

「いや、このまま進め」

と、あっさりと否を唱えた。

「しかし、お知り合いの方であれば、何らかの保護を頼めるかもしれません」

「分かっている。だが、奴とだけは、関わるのはご免被る」

どうやら本気でご免被りたいらしく、ミラは、クロエの肩から強引に黒マントを引き剥がすと、生臭い荷台に戻り、マントを纏っている。

よいよ本格的に身を隠してしまった。

「あれ……あの、殿下？」

困惑げに訊ねるクロエに、マントの隙間からちょこんと顔を出してミラは答えた。

「何も喋るな。そして、さっさと奴を追い払え」

言うなりミラは、がばとマントを引き被り、再びその白い顔を隠した。

ミラの不可解な行動をクロエが怪訝に思う間にも、みるみる騎士はクロエとの距離を詰めて来た。そして、距離が詰まるにつれ、騎士の姿形が次第に明らかになっていった。

首元から足の先まで、みっちりとした頑強な鎧甲冑で固めた姿は、このまま戦場の最前線にでも突っ込んで行くかのような物々しさを呈していた。が、身分を示す旗印や、頭を護る兜をつけていない点から、どうやら正式な兵士としての任を仰せつかっている訳でもないらしい。

いよいよ男は、クロエのすぐ目の前へと迫った、このまま何事もなく、黙ってすれ違ってくれるものとクロエが期待した矢先、青年は、荷台の前へ至った所でやおら手綱を引き、その馬脚を引き止めた。不満げにいななく馬の頭を巡らせながら、すかさず青年は、荷台の操縦席に腰を下ろすクロエを鋭く呼び止める。

「おい、お前。王都から来たのか」

断じるような青年の質問に、クロエは「ええ、まあ」と頷いた。この街道は、王都からカサンドラへ向けて一直線に敷設され、よつばど地元民といった風情を醸してでもない限り、誤魔化す事は無意味と考えたからだ。そもそも、こんな海から遠く離れた内陸の穀倉地帯を、魚の臭いを撒き散らしつつ走る荷車が、地元のものであるはずはない。

「って事は当然、今朝の出来事も知ってるんだろうな？」

「え、今朝の、ですか？」

そ知らぬふりで訊き返すクロエに、青年はなおも馬首を諫めなが

ら続けた。

「ああ。今朝、王都からミラ様がどこぞの変換士に連れ去られたと——って、お前、その服装は変換士か？　って事はお前が、ミラ様を連れ去ったっていう変換士だな！？」

「え？　え？」

あまりにも飛躍の過ぎる論法に付いて行けず、クロエが反論を練りあぐねている間に、青年はどうとう脊髓反射的な思考回路でクロエを黒と断じた。

「てめええっ！　よくも俺の愛するミラ様をおおっ！」

怒鳴るなり、青年は馬上からそのまま荷台の操縦席へ飛び込むと、クロエの肩を鷲掴みにして激しく振り始めた。椰子の木と同様、振れば望ましい答えが落ちて来るとでも言わんばかりに、なおもブンブンと振る。

「俺が……俺が今まで、どれだけミラ様の事を敬愛申し上げてきたか……幼い頃よりずっとお慕い申し上げてきたか……貴様ら冷徹カラス野郎にわかるか、ええ！？」

「ひょっとして、あなた……」

悲痛ですらある男の怒声に、クロエは、ミラに対する青年の複雑な心模様を察した。

王女と騎士。決して結ばれ得ない身分違いの恋。だが、それを知りつつなおも恋い焦がれずにはいられない、上代の時代から語り継がれる永遠の悲恋劇——

「ちきしょおおっ！　羨ましいいいっ！　見たのか？　ミラ様の寝顔とか着替えとか、入浴中とか入浴後とか、見たのか！？　正直に言え！　ていうか細かく報告しろお！」

「……は？」

ぼーぜんとするクロエをよそに、青年はなおも血眼で喚いた。

「どうだったよ、ええ？　可愛かったかよ？　そりゃそーだよ、とーぜんだよ！　すんげー可愛いんだもんよミラ様はよ！　つか知ってるか？　普段はああして澄ましていらっしやるけどな、本当はす

げえ寂しがり屋で泣き虫で、夜になると召使の目を盗んで、部屋で一人、枕を濡らしてたりすんだよ。『寂しいよお、ギル』ってな。まあ、全部俺の想像なんだけだよ！　うあっ、言ってる傍から禿げ萌える……」

そして青年は、鎧を纏っているとは思えない程に、ぎちぎちと身をよじった。

「つーか変換士！　とっとと報告しろつってんだろ！？　って、ひよっとしてアレか？　お前、入浴前派か？　……そうか、そういう事かテメエ！　下着を脱ぎ捨てた瞬間の、脇とか首筋からむわりと漂う甘酸っぱい汗の臭いがたまらねえってクチだろ！？　え！？　どうなんだ、正直に吐き出せ、このド鬼畜変態野郎！」

「変態は貴様だ」

ゴッッ。

瞬間、クロエの肩越しに、男の顔面へ容赦のないミラの鉄拳が叩き込まれた。

夕刻、小麦畑の丘の向こうへ日が傾きかけた頃、クロエ達はようやく、茜色の空を背に威容を示すカサンドラの、花崗岩造りの堅牢な城壁へと至った。

「殿下御自ら我々の元へお成り頂けるとは、この上ない光栄にございます」

壮年の領主、セリオ・カサンドラは、屋敷の玄関に降り立った姪の前で片膝をつくと、恭しい挨拶と共に彼女を出迎えた。一方、姪であるミラは、伯父であるカサンドラ伯爵の前に、姪としてではなく、あくまで王女としての威厳を示しつつ応じた。

主やその召使らと共に、大理石でしつらえられた堅牢かつ豪華な屋敷が、王女と、その背後に付き従う黒尽くめの青年、そして、その青年が両腕に抱えるオートマタを出迎える。

さらにその背後には、黒尽くめの青年に対し、敵愾心を剥き出しにした視線を投げつける鎧姿の青年、ギル・バティスタが従う。

屋敷に着くやミラは、早々に屋敷奥の応接室へと誘われていった。これから、伯爵や街の有力者達と共に、王都に対する以後の対応策について話し合いの席を設けるのだという。

その小さな背中を扉の向こうに見送るや、クロエは早速、ベルダのモノリスにブルームをチャージするべく、ぐるりと建物を見渡した。そこでクロエは、今もなお自分をぎろりと睨み据える、獣のような視線と鉢合った。

「あれ？ 殿下と一緒に……？」

「ばあか。俺はまだ正式な騎士じゃねえから、ああいう場所には入れねえんだよ」

聞けば、ギルもまたクロエやミラと同じ十八歳であるらしかった。この国では、騎士は二〇歳ではじめて正式な騎士としての位を拝する事になっている。つまり残り二年の間、彼は騎士見習いという地位に甘んじ続けねばならない。そして見習いは、領主と王族との正式な会談の席に列する事は許されない。

「はあ。俺も早く正式な騎士になりてえなあ。そうすりゃ、ミラ様が行く所ならどこにでも付いて行けるのになあ。天国だろうと風呂だろうとベッドだろうと」

重い溜息と共にギルは、屈強なはずの身体をしおしおと萎めた。

「ベッドにも、お供するんですか？」

口にしたクロエ自身、恥ずかしさで頭がよじれそうになる言葉に、さすがのギルも顔を真っ赤にして噛み付いた。

「ただだ、誰が、一緒にベッドに入りたいなんて贅沢な事を言うかあつ！ お、俺は騎士だぞっ！？ 俺みたいな身分の人間にとっちゃ、ベッドの傍で一晩中ミラ様の寝顔を眺められるってだけで、もう充分過ぎるぐらい贅沢なんだよおっ！ ……そ、そりゃ、一緒にベッドに入れるって言うんなら、引き換えに明日死ぬと言われたら死ぬけどよ。ああ死ぬとも。ミラ様の寝顔とぬくもりを直で感じられるならもう、今すぐにも死ぬるよっ！ つっ！か、死ぬだろ普通！ 耳元で『ねえギル、寒いわ。もっときゅっとして』なんて言

われてもみろよ！ 悶死確定だろコレ！ 昇天モノだろコレ！」

言いながらギルは、鎧で固めたその身体を、今一度ぎゅちぎゅちと振った。

かように気色の悪い趣味ばかりを露呈するギルの姿形は、単体の男として見れば、決して魅力に欠ける方とは言えない。鎧越しにもそれと分かる、鍛え上げられた頑強な体格に、くっきりとした目鼻立ちの精悍な顔つき、とりわけ、鋭く切れ上がった双眸から放たれる鋭い眼差しが、早くも戦士としての彼の素質を露わにしている。

羽飾りのように逆立った赤銅色の短髪が、ただでさえクロエより頭半分は高い身長に、さらなる迫力を加えている。が、伯爵に部屋から閉め出され、がつくりと肩を落とす今の彼は、それらの恵まれたポテンシャルを、いずれも見事なまでにブチ壊しにしていた。

「ところで、さっきから気になってしょーがなかったんだけどよー

——何なの、そいつ」

ギルが示すのは、もちろんクロエが抱えるベルダだ。

「ちよっと、貸してみろよ」

「え……は、はい」

クロエの腕からベルダを受け取るや、ギルは意外だとばかりに「あ」と声を上げた。

「意外に重くねえんだな。ちよっとした椅子……ぐらいか？」

「そうですね。そこまで重くは、ないです」

「ふーん……で、結局何なんだよ、こいつ。後生大事に抱えてよ。

変態か？ お前。こういう人形を愛でる趣味でもあのか？」

変態に変態と呼ばれ、いささか心外な気分を覚えつつもクロエは丁寧に応えた。

「彼女はオートマタです。プルームを動力源にして動く人形です」

「え？ こいつ動くの？」

「はい。動くベルダさんは、変わり者で早とちりで強欲で、怒ると手がつけられなくなるぐらい凶暴化しますが、とっても優しい素敵な女性ですよ」

「それ、優しいって言わなくね？」

すぐさまクロエは、ギルの案内で回廊脇の空き部屋へ邪魔すると、暖炉脇の大理石の床へそっとベルダを下ろした。

その傍らではギルが、用済みとなった鎧を早々に脱ぎ始める。

「やっぱフル装備はきついな……って、ん？」

振り返るなりギルは、騎士とは思えないほどに狼狽を露わにして叫んだ。

「んな所で、何をおっ始めてんだよ、お前っ！」

「何って、彼女の身体からモノリスを取り出そうとしているんですけど」

などと、こともなげに答えるクロエは、今まさに横たわるベルダの上体に覆い被さり、黒いワンピースのボタンを外しつつあるところだった。その傍らには、すでに剥ぎ取られたエプロンがきちっと畳まれて置かれている。

「つーかぱっと見、完全に変質者だぜお前。寝てる女の服を、勝手に脱がせたりしてよ」

「でも、そういう構造なんですから、仕方ないですよ」

なおもクロエは、淡々とした手つきでボタンを外し、黒い布地から白い胸部を露わにする。その様子を、ギルはひたすら横目で気まぐすそうに見やる。

「なんか……人形だって分かってんのに、良くわかんねーけどドキドキするな」

「そうなんですか？ 僕はもう慣れてますから、そういう気持ちは、いまいちよく分らないんですけど」

「いや、そこは慣れるなよ。もっと自覚しろよ。自分のビジュアルのヤバさをよ」

そんなギルの苦言に構わず、クロエはベルダの腹部に設けられた蓋を開くと、様々な機器が組み込まれたその内部から、短剣ほどの長さの黒い棒をかぱっと取り出した。

「やっぱ、人形なんだ、そいつ……」

次にクロエは、暖炉に据え置かれたモノリスを取り上げると、空となった台座へ、先程ベルダから取り出したモノリスをゴトリと差し込んだ。

「要請する。ベント開放。プルーム量五〇〇〇〇ガルを充填……以上、要請を終了する」

「何やってんだ？ それ」

「プルームの充填です。暖炉に導かれたプルーム供給ラインに彼女のモノリスを繋げて、メインベントからの供給を図っているんです」

「暖炉でチャージなんて出来んのかよ」

「出来ますよ。供給ラインさえ引かれていれば、どこでもチャージは出来ます。台所のコンロや、それに照明用のソケットでも、径が合えば可能です。もつとも、普通の方は、自走車用のプルームステーションでチャージなさるようですけど」

「だったらお前もステーション使えよ。その方が楽だろ」

「面倒くさいじゃないですか。すぐ目の前にチャージ出来る場所があるのに」

「あ、ああ……。変換士なら、まあそうだよな」

「もつとも……暖炉の方は、概して時間毎の供給量がステーションよりも少ないので、多少、余計に時間はかかりますけどね」

「へえ、どんぐらいかかるんだ？」

するとクロエは、懷から懷中時計を取り出し、青く光る文字盤を見下ろしながら呟いた。

「まあ、多く見積もって、四半刻程度でしょうか」

その後、窓外の庭を眺めるなどして何となく時間を潰していたクロエは、やがて、再び時計に目を落とすや暖炉に戻り、改めてプルームの充填具合を確かめた。

クロエの顔が、怪訝な色を浮かべつつ傾いだのは、そんな時だ。

「今度は何だよ」

手元の時計とモノリスをしきりに見比べながら、クロエは呟いた。

「おかしいですね……いくら時間がかかるにしても、少し、かかり

すぎです」

すると、今度はギルが、困ったように頭を掻きながら答えた。

「ああ、そいつはあれだ……仕方がないっつーか」

「え？」

「最近、街のメインベントの調子が悪くてよ。減ってんだよ、プルームの供給量が」

そこは、一見すると、まるで天然の洞窟と見紛うかのような地下道だった。はるか昔、この地に初めて定住を始めた人々は、日中の強烈な日差しを嫌い、石灰岩の岩盤に穴を穿って居を構えた。カサンドラの街を抱く石灰岩の丘には、その所々に、先人達の穿った長大な地下通路が今もなおそのままの形で遺されている。

昼なお暗い地下通路を、クロエはランタンの灯りと、ギルの案内を頼りに進む。

「この先に、メインベントがあるんですか」

「ああ。はぐれるなよ。一度はぐれたら、余所者は一人じゃ絶対出られねえから。まあ、俺はそれでも構わないんだけどよ……ん？」

「こそ、それだけは勘弁、」

「しっ！」

突如、ギルは鋭い声でクロエの続きの言葉を制した。と共に、ランタンの光が届かない暗闇の向こうへ、注意深く耳をそばだてる。つられるようにクロエも耳を澄ます。確かに、暗闇の向こうから、釘の先で金属板を引っ掻いたような耳障りな声が聞こえる。

「まずいな……連中に勘付かれた」

「どうしたんですか？」

「いや、大した事はねーんだ、ただ最近、この洞窟にデカイ吸血コウモリの群れが棲み付いちまってよ。そいつらが、まあ人が来るたびに大挙して襲ってくるっていうか」

「めっちゃくちゃ大した事あるじゃないですか！ 逃げましょうよ、早く」

「でも、メインベントの調子を見たいつつたのは、お前の方だろ？」
「そ、それは見たいですけど……」

「だったら行こうぜ。平気だって。せいぜい大ききつつてもこれぐらいだから」

そう言つてギルは、人の肩幅ほどに両手を広げて見せた。

「でかつ！ でかいですよギルさん！」

「そうか？」

その間も、声は次第に、二人の所へ近付いてくる。

「や、やっぱり僕、帰りますっ！ つか帰らせて下さい、ほんとに帰らせてええ！」

「ったく、しょうがねえなあ……」

大の男のものとは思えないクロエの慌てぶりに、ギルは呆れたように溜息をつくと、「ちよつと持ってる」と、手にしていたランタンをクロエに預け、その腰からすらりと長剣を引き抜いた。

「ま……まさか、こんな暗闇でコウモリを？」

「ちつと黙ってる」

背中越しに寄越された声は、既に、殺気を帯びた戦士のそれと化していた。シャツ越しに伝わる気迫と熱量に、圧倒されるようにクロエは口をつぐむ。

いよいよ、すさまじい羽音と共に、頭蓋を貫く音の刃が二人の元へと迫る。それは紛れもなく、コウモリ達の上げるときの声に違いなかった。

が、闇を睨んで佇むギルの背中では、なおも微動だにしない。クロエもまた、いざという時に備え、ランタンを置いてモノリス刀の柄に手を掛けた。しかし、内蔵していたプルームを、今朝方の戦闘でほとんど使い果たした彼のモノリス刀は、今や菜切り包丁よりも切れ味の悪い、ただの巨大なペーパーナイフと化していた。ましてクロエの力量では、そんな棒切れ一つで飛び回るコウモリを仕留める事など、出来ようはずもない。

「余計な事すんな」

「え？」

——まさか、音だけで、僕が剣の柄を握った事を……？

クロエが息を？んだ、その刹那。

ぼとぼとぼとぼと……

やおら、大量の水袋をぶちまけたような鈍い音が、狭い地下道を一杯に満たした。

「え？」

いつしか、クロエの耳を聳っていた羽音や鳴き声は、ぴた、と鳴りを潜めていた。恐る恐るランタンを取り上げ、闇の奥を照らしたクロエは、眼前に広がるすさまじい光景と、光景に伴う異臭に思わず言葉を失った。

「十三匹か。今日は割と少なかったな」

ふう、と息をつくや、ギルは手持ちの布切れで刀身の血糊を拭き取ると、何事もなかったかのように、かちん、と剣を鞘に収めた。そんなギルの足元には、いずれも一刀の元に切り伏せられた巨大コウモリの死体が、ごろごろと転がっている。

——こんな大量のコウモリを、一瞬で……？

「さてと——おい、行くぜ変換士！ なにボーツとつつ立ってんだよボケェ！」

苛立たしげなギルの口調に、ようやくと我に返ったクロエは、死体の海からはっと顔を上げた。

「は、はい、すみません！」

やがて二人は、地下道の最深部、メインベントを擁する部屋へと至った。もっとも、部屋とは言えその様相は、岩盤内にぽっかりと空いた巨大な洞窟と言った方が相応しい。

その、ドーム状の“洞窟”は、ゆらめく青白い光によってくまなく満たされていた。

「やっぱ不気味だよなあ。ここ。何度来ても慣れねえわ」

海底から水面を見上げているかのような光に彩られた天井を、ギル

はしかし、忌々しげに眺めながら呟いた。そんなギルの言葉に、クロエはくすつと笑みを漏らす。

「な、何だよテメェ！ 笑っただろ、今！？」

「だって、あんな大量の Koumori を一刀に切り伏せるギルさんが、こんな綺麗な光を不気味だなんて」

「う、うるせえよ、苦手なもんは苦手なんだから仕方ねーだろ？」

部屋の中には、男の足でも十数歩の径はあろうかという丸く大きな地底湖が広がっていた。この地底湖こそ、カサンドラで消費されるプルームを、一手に賄うメインベントに他ならない。

天井へ向けて青い光を放つその湖面は、ここが風一つない洞窟の底だという事をつい忘れてしまう程に激しくうねり、蠢いている。その様はまるで、おびただしい数の透明な蛇が、水面の下でいちどきにのたうち回っているかのようなでもある。青く光るその液体は、湖底のベンドを通じて地上に汲み出されたプルームが、一時的に実体化したものだ。

「なあ。ガキの頃からずっと気になってただけだよ」

湖面を見下ろしていたギルが、ふと、隣に立つクロエに訊ねた。

「この湖って泳げるのか？ 親父からは、絶対に入るなって注意されてんだけど」

プルーム使いの専門家である変換士にしてみれば突拍子もない質問に、しかし、クロエはあくまで真面目に答えた。

「泳げますよ。ただし、形質は崩壊しますが」

「形質が崩壊？ 何だそりゃ？」

「膨大な、しかも未変換のエネルギーに生身の身体で触れるのは完全な自殺行為です。肉体は肉体としての性質を失い、もれなく、灰のような粉に分解させられます」

「灰？ それって燃えちまうって事かよ？」

「だいぶ違いますが……一般の方なら、そういう理解でも差し支えないかもしれません」

淡白な、だからこそ冗談とは思えないクロエの説明に、ギルはやに

わに表情を凍りつかせた。ごくりと唾を飲み、今一度、神々しい光を放つプルームの湖面へと目を戻す。

「そういえば、ギルさんは時々、ここに足を運んでいるような事を言っていましたね」

今度は、クロエがギルに訊ねる。

「やっぱり、昔に比べると、プルームの量は減ってきていますか？」

「あ、ああ……。俺がガキの頃は、今にも床に溢れ出そうなほどギリギリまでプルームが迫ってたんだけどな。……今はご覧の通りさ」

ギルが示す通り、床と湖面との間には、すでに子供の背丈ほどの間隙が出来てしまっていた。つまり、ここ一〇年前後で、その分のプルームが減少したという事になる。

「ひょっとして、カサンドラではここ数年、農作物の不作などが続いているんじゃないですか？」

「確かに……何で分かるんだよ、そんな事」

半ば化け物でも見るような目で見下ろすギルに、クロエはなおも淡々と答えた。

「プルーム量の減少は、その土地の地味にも影響します。減ると、それだけ土地は痩せます。あまりにも減り過ぎると、いずれ土地は砂漠と化します」

「マジ、かよ……」

呻くようにそう口にするや、それきりギルは、硬直した表情と共にその口を閉ざした。

クロエもまた、その隣に神妙な面持ちを並べたまま、足元でのたうつプルームの海を、しばしの間じっと見つめ続けた。

五章

その夜、ミラの来訪という突然の慶事を得たカサンドラ邸の大広間には、急ぎ豪華な晚餐が用意された。城内で飼育された豚や七面鳥の丸焼きがテーブルの中央を飾り、その周囲を、オレンジやぶどうなどの色鮮やかなフルーツが華やかに彩る。卓には、傍らに控えた召使達の手により、温かなスープと焼き立ての平パンが間断なくサーブされ、グラスには、樽から注いだばかりの特上のぶどう酒が注がれる。

香草の匂いと列席者達の暖のある喧騒が、堅牢な石造りの大広間を緩やかに満たす。そんな中、王女として卓の中心に座を構えるドレス姿のミラは、卓に居並ぶ年長者達の中でお、その威厳ある佇まいを誇りつつ、優雅なフォーク捌きで食事を口に運んでいる。

そんなミラの姿を末席から遠く眺めながら、クロエは、今更ながら自分と彼女の間に横たわる距離をまざまざと思い知らされていた。

昨夜から今日にかけての冒険譚が、まるで遠い昔の出来事のようにクロエには思われた。

それはまるで、夢か幻にでも目くらましを食らったかのような心地だった。並み居る貴族達と肩を並べながらも、霞むどころかかえって周囲を圧倒する程の、威厳と風格を備えた王族の姫君と、たかが一変換士に過ぎない自分とが、半日はいえ、互いに手を伸ばせば届く距離にいられたという事自体が、もはや奇跡的と呼んでも差し支えない出来事だったのだ。

目の前に供された平パンは、街のパン屋のそれとは比較にならないほど芳醇なバターの香りを醸している。これほど美味しいパンを毎日のように食べ付けていれば、確かに、市井のパンを馬の餌と勘違いする感覚も身に付こうものだ。

「どうなさいましたの？ クロエさま。さっきからずっとぼんやりなさって」

隣に座るベルダが、心配顔でクロエの顔を覗き込む。

「あ、いえ……何でも」

そんなベルダの席には、今やすっかり冷え切ったパンとスープが手付かずのまままで置かれている。オートマタであるベルダに、そもそも人間の食事は不要なのだ。

ところが、事情を知らない列席者達は、そんな彼女の態度をホストに対する無礼と捉えてか、ベルダとその知人であるクロエに対し、しきりに白い眼差しを投げつけていた。

ベルダは、動いてさえいれば、その佇まいは普通の人間とほとんど変わるところはない。人形としてあまりにも高いベルダの完成度が、今この瞬間のクロエにとってはかえって仇と化していた。

とはいえクロエには、途中で席を投げ出す事もまた無礼であるように思われた。そこでクロエは、彼女がオートマタである事を周囲に知らしめるような会話を、それとなく持ち出すという手に出た。要は、彼女が人形である事を、皆に理解してもらえばいいのだ。

「と、ところで、新しく充填されたプルームの調子は、どうですかベルダさん」

するとベルダは、表情機能の限界を振り切らんばかりに満面の笑みをほころばせた。

「はい。クロエさまに熱い棒を突っ込んで頂いたおかげで、とおっても快調ですわ」

全身に喜びを溢れさせるベルダの一方で、クロエは途端にその表情を硬直させる。

「う……うん。それは、何よりです」

「やっぱり、あんな乾燥イチジクみたいなジジイのでは駄目ですね。愛の濃さが違いますもの。クロエさまに入れて頂いた棒は、それはもう熱くって力強くて、」

「あの、僕があなたのプルームをチャージする度に、そういう言葉を口にするのは、いい加減やめて頂けますか？」

いよいよ冷気を増す周囲の視線には気付く事もなく、ベルダは困

ったような笑みを浮かべつつ小首を傾げた。

「何故ですか？ 単に私は、クロエさまの濃厚な愛に対して感謝の気持ちをお伝え申し上げているだけですよに」

「いえ、それ自体は嬉しいんですけど、言い方がどうも、誤解を招きやすいと言いますか……あと、せめて棒じゃなくてモノリスと言って下さい。色々と紛らわしいです」

顔を真っ青にしてうろたえるクロエに、テーブルの向かい席からギルが口を挟む。

「変換士、やっぱりテメエ、そういう趣味があつたんだな？」

汚物でも見るようなギルの眼差しを横目に、クロエはなおもベルダに訴えた。

「ね？ ベルダさん、世の中にはこういう勘違いを起こす人もいるので、無闇にそういう事を口にするのは、止めて下さいね？」

晚餐が終了するや、クロエは早々に大広間を飛び出すと、割り当てられた客人用の寝室へ早々に逃げ込み、バルコニーで一人、のんびりと物思いに耽り始めた。

眼前には、岩山の斜面に沿って石壁の家々がずらりと軒を連ねている。既に随分と夜も更け、銀盤のような満月が頭上高くに輝く頃合に差し掛かっているものの、斜面の所々からは、酒場かあるいは歓楽街か、今もなお白々とした灯りが溢れ出ている。

手すりから身を乗り出すと、先程まで晚餐が催されていた大広間と、そこからテラス越しに広がる見事な庭園をも足元に望む事が出来る。大広間やテラスでは、未だ宴の続きを名残惜しむ貴族達が、三々五々集まってはぶどう酒などを酌み交わしている。

貴族達の歓談に混じり、楽人達の奏でる豎琴や笛の音が、夜風に乘って漂い来る。どこか物悲しい旋律に身を任せながら、クロエはただ、一幅の絵のような眼下の光景をのんびりと楽しんでいた。

庭先から、むせるようなジャスミンの香りが漂う。

全てが、彼のために供されたかのような、素晴らしく美しい夜だっ

た。

ただ——何故だろう。何か、何かが決定的に足りない。

「これから、どうしようかな……」

得体の知れない空虚感を埋めるべく、クロエは卑近な現実へと目を向けた。

——あのような騒動を起こした以上、王都に近付く事はしばらく避けた方がいいだろう。ベルダの事はどうする。きっと彼女も追われる身と化しているに違いない。働き手としての彼女を頼るレッジヨさんには悪いが、少なくとも一ヶ月は、王都でのほとぼりが冷めるまで僕が預かるとしよう。明日にでもレッジヨさんに手紙を書き、事情を説明しなければ。——殿下とは、ここでお別れだ。彼女の強固な後ろ盾であるカサンドラ伯爵の元で過ごす限り、彼女の身の安全は保障され続けるはずだ。

「お別れ、か……」

「何を眺めているのだ」

不意に、背後から聞こえた思いがけない人物の声に、クロエは喉元から心臓が飛び出す心地がした。弾かれたように振り返り、恭しく片膝をつく。ついた後で、いよいよ彼女との距離に愕然とする。

「良い、立て」

「し、しかし……」

「良いから立て。そもそも今更、貴様にそのように畏まられても、気色が悪いだけだ」

「は、はい……」

顔を上げたクロエの前に立っていたのは、晩餐会にて威厳と風格を漂わせていた王女とは似ても似つかない、子供じみた不機嫌顔を浮かべたミラだった。苛立っているのか、あるいは単に疲れているのか、唇を尖らせ、その白い頬を巢籠もり前のリスのようにぶうとむくれさせている。

「どうした、貴様。阿呆の面を晒しおって」

「あ、いえ……てつきり殿下は、大広間で伯爵様方とご歓談に興じ

ておられるのかと」

「何だ？ 拗ねておるのか。私が相手をしてやらなんだから」

「ぼ、いえ、私が？ め、めっそうもございません」

「なんだ……拗ねておらんのか」

「？」

王女の赦しを得て立ち上がったクロエは、今一度、月明かりの中に立つミラの姿をつぶさに眺めた。柔らかな絹のドレスが、銀の月光を浴びて濡れたような艶を放つ。薄く織られたそのドレス越しに、まるで影絵のように浮かび上がるのは、俊敏な獣のように細くしなやかな彼女の身体だった。

その顔には、恐らくは王族としての威厳を示すためだろう、幼い造りの顔にいやに大人びた化粧を施している。が、少女でも女でもないその曖昧さが、かえってクロエの心を激しく惑わせた。

「綺麗だ……」

「綺麗？ 何がだ？」

意図せず内心を吐露してしまったクロエは、慌ててその口をつぐんだ。

一方のミラは、そのラピス色の瞳に、何かを待ち侘びるような眼差しを浮かべる。

——もちろん、殿下の事に決まってる。いや、殿下以外に、答えなどありえない……。

しかし、とクロエは思った。彼女は王女だ。そして僕は、ただの変換士に過ぎない。

「ええ、本当に、今夜の月は綺麗です」

「月？」

はた、とミラは、頭上高くに輝く白銀の天体を見上げた。

「あ、ああ……そうだな。綺麗だ」

どこか気の抜けたような表情で呟くミラの横顔を眺めながら、クロエはその心に、小さな風穴が開くのを感じた。しばしの沈黙の後、再び、ミラは口を開いた。

「こうして、クロノの息子であるお前と遭えたのも、とすると、何かの巡り合わせなのかもしれんな」

「……え？」

今やミラの眼差しは、威厳と強さを湛えた王女のそれへと戻っていた。

「そういえば、どうして殿下は、父の事を……」

クロエの問いに、ミラは遠い眼差しを浮かべつつ答えた。

「我が兄上は、王に即位する以前より、クロノの学説に多大な影響を受けていてな。即位した暁には、是非、彼の説を前提とした政策を取りたいと、考えておられた」

「まさか、アルバの増幅装置を取り払ったのも、そのため……？」

「ああ」

呻くような声で、ミラは答えた。

「兄上は、この国の将来を真剣に考えた上で、自らの政策を実行に移されたのだ———なのに……」

「？」

いつしかミラの細い肩は、小刻みに震え始めていた。

「なのに結局、このような事に……」

溢れる感情を押し殺すように、下唇を噛み締めながら、ミラは呟いた。

その悔しげな横顔を見つめながら、しかしクロエは、彼女の沈痛な心情こそ理解は出来るものの、その言い分にはどうしても違和感を覚えずにはおれなかった。

「しかし殿下。事前に何らの代替エネルギーも用意せず、いきなり増幅装置を撤廃した事は、やはり性急に過ぎたのでは、と、私は思います」

「何だと？」

やおらミラは、きつ、とクロエを睨み据えた。が、クロエは、そんなミラの視線に軽く怖じつつも、なおもはっきりとした口調で続ける。

「ある日突然、プルームの供給を減らされてしまえば、多くの人はその生活に混乱を来たしてしまいます。彼らはパンを焼く熱も、自走車を走らす動力も、それに、夜の闇を凌ぐ明かりさえも全て、プルームを変換する事で手にしているのです」

クロエがその脳裏に思い起こしていたのは、昨日、王都で旧友と交わした会話だった。旧友はまさに、そのために街を見捨てたのではなかったか。

「確かに、大局を見れば正しい判断だという事は分かります。ただ、人々にとって重要なのは、正しさよりもむしろ、」

「そんな悠長な事を申しては、何も始まらない！」
クロエの言葉尻を、ミラはぱつぱりと斬って落とした。

「枯渴の兆候を示す国土の疲弊は、各地で見え始めておる！――
――アルバでもそうだった。あの近辺ではここ数年、異常なまでの小麦の不作が続いておった。プルームを過剰に汲み上げた他の地域でも、軒並み同じ現象が生じておる……それなのに国民は、そのような事実には目もくれず、ひたすらプルーム、プルームと……挙句は増幅装置までも用いて汲み上げる始末だ。……いずれ誰かが、彼らの目を覚まさせねばならなかった。その汚れ役を買って出たのが、兄上だ！」

「では、陛下は全てを承知なさった上で……」

「ああ」

ミラは頷いた。その拳は、今にも血を噴き出さんばかりに硬く握り締められている。

「許し難いのはイスマエルだ。奴は、プルーム枯渴説の存在も、増幅装置の危険性も全て認識した上で、なおも増幅装置の設置を広めようとしている」

その事実も、すでにクロエの良く知る所でもあった。イスマエルは、稀代の変換士としてのみならず、プルーム利用推進派の急先鋒としても学会内で知られている。そして、探究心と野心に満ちたイスマエルが、王族としての立場と、研究者としての立場を完全に割り切

っていたか、と言えば、それは嘘になる。

これまでもイスマエルは、自身の威光を笠に、クロエの唱えるプルーム枯渴説を、そして、枯渴説に基づいた研究——増幅装置の暴走とその被害に関する調査報告を、陰に陽に、様々な手段を講じて封殺し続けてきた。

その甲斐あってか、今や枯渴説についての研究を行う変換士は、学会内では学長のコルネリウスを含め、すっかり希少種と化している。が、本当の問題は、むしろ学会内ではなく、むしろ、その狭小な学窓の外で生じていた。

今なおほとんどの国民が、クルスをはじめ多くの街が粉微塵に焼き尽くされたのは、流れ星が落ちたせいである——などという幼稚な風説を、自明の理であるかのごとく信じ込んでいる。真実を啓蒙するという機能が、学会から完全に失われている証拠だった。

彼らは知らない。増幅装置の暴走によって引き起こされるプルームの過剰噴出こそ、消滅の真の原因なのだという事を。

「奴が王位に就こうものなら、間違いなくこの国は滅びる。たとえ国民に石つぶてを投げられようとも、真実に基づいた己の信念を貫く——その気概を持たぬ者に、今のカスパリアを、本当の意味で導く事など出来ん」

そこでミラは、決然とした眼差しを、きつとクロエに振り向けた。

「私と共に、この国を救ってくれ。クロエ」

その曇りのない毅然とした眼差しに、クロエは見入った。

クロエは本来、運命などというまじないめいた話を良しとしない類の人間である。が、そんなクロエも、さすがに今回ばかりは、何らかの見えない力の作用を感じずにはおれなかった。もし、この力に何か名前を付けろと言われたならば、クロエは迷う事なく、運命と名づけるだろう。

脱プルーム論を唱える自分と、その論に基づいて国を救おうとする王女殿下。

——手を取り合わない訳には、いかない。

「はい」

こく、と、クロエは頷いた。

「ところで、殿下」

「何だ、クロエ」

「ずっと、不安に思っていたのですが」

「不安？」

「宜しいのですか？ 召使も付き従えずに、たった一人で男の部屋に入るなど……」

するとミラは、やおら王女としての相貌を崩し、いたずらっぽい笑みを浮かべて言った。

「ほう、貴様。この私に狼藉でも働くつもりか」

からかうようなミラの言葉に、クロエは目玉から火花が出る心地を覚えた。

「ち、違いますっ！ 妙齡の王族の女性が、一市井の男の部屋に一人でお出でになるのは、色々と、問題があるのではと思っただけです！」

「まあ良いではないか。ここは王宮ではないのだ、それに——」

「……それに？」

「この屋敷には、頼まずとも私の身辺警固を買って出る奴がいるのでな」

そこでミラは、腐ったオレンジでも見るような眼差しを浮かべながら、その細い顎で、くい、とクロエの背後を示した。

「え？」

もしかやと思い、クロエは恐る恐る背後を振り返った。——と。

「変換士いいいい」

そこには、上階のテラスに足を掛け、宙ぶらりとなったままクロエを睨み据えるギルの姿があった。ただでさえパンパンに充血した顔に、いやましにしかめ面を浮かべた様は、まさしく鬼神そのものといった体である。

「俺のミラ様と、なに二人っきりでイイ感じの雰囲気醸してんだテ

「メエえええっ！」

「うああああっ！」

咄嗟にクロエは床を蹴り出し、ドア目掛けて駆け出した。
ところが。

「この泥棒猫おっ！」

今度はそのドアを蹴破り、目の前に立ちはだかるようにベルダが部屋に飛び込んで来た。

「ベルダさん!？」

ところがベルダは、部屋に入るなり、まるで雑木を薙ぎ払うかの様に眼前のクロエを脇に弾き飛ばすと、そのまま矢の速度でテラスへと疾走した。

「私のクロエさまをたぶらかそうだなんて、一〇〇億年早いですよ、この泥棒猫おっ！」

が、この罵声に噛み付いたのは、ミラではなくギルだった。

「俺のミラ様を泥棒猫呼ばわりたあどういう見だ、この人形女!」
獣の怒気も剥き出しに吠えるギルに、しかしベルダは、怯む事なく掴みかかりながら、なおも喚いた。

「私のクロエさまに手出しする女は、王女だろうと聖女だろうとみんな泥棒猫ですわっ！」

一方のギルも、負けじとベルダの胸倉を締め上げつつ怒鳴る。

「んだとお! どっちがドロボウだゴルァ! テメーのツレこそ立派な泥棒だろうがよ! 俺のミラ様に手え出しやがって! もし、俺のミラ様にテメーのツレがナニでもしてみろ、そいつのモノぶった斬って、豚の餌にくれてやるっ！」

「ちょっとあなた! いくらオートマタでも私、一応女なんですのよ! 女性の前で、そのような下ネタは止めて頂けるかしら!？」
あと、クロエさまのモノを豚の餌にするなんて、もったいない事はおよし下さいまし! 豚に与えるぐらいなら、この私に下さいまし!」

「はあ!？ んなモン貰ってどーすんだよ、このメガネ痴女っ!」

「それは乙女の秘密というものですわ！ 愛でてさすって触ってこすって、夜な夜なハアハアしたいだなんてそんな破廉恥な事、口に出来る訳ございませんもの！」

最低過ぎる罵声の応酬を繰り返すギルとベルダの一方で、クロエとミラは、バルコニーの手すりにもたれながら、ただただ、美しい月夜の景色を愛で続けた。

「月が綺麗だのう、クロエ」

「え、ええ……そうですね、殿下」

翌朝。カサンドラの街は、乾燥がちなこの地域には珍しく、ひどい朝靄に包まれていた。

庶民には贅沢品である羽毛布団の感触を惜しみつつ、ベッドから起き上がったクロエは早速、木綿の肌着にいつもの黒いジャケットとパンツを重ね、そそくさと部屋を出た。

屋敷内に漂う物物しい雰囲気、クロエが気づくのにしたる時間はかからなかった。

中庭を囲む回廊には、早朝にも関わらず身だしなみを整えた男達が行き交い、その合間を、不安げな面持ちの召使達がせわしく駆け回っている。

「何だろう？」

ふと、不安を覚えたクロエは、すぐさま階段を駆け下り、階下の大広間へと向かった。

「くそっ！ イスマエルめえ！」

忌々しげな伯爵の怒声が、回廊の静寂を突き破ったのは、まさにそんな時だ。

「そのような要求に、私が応じられるはずなど……！」

遠雷のような伯爵の怒声に応じたのは、意外な人物の声だった。

「落ち着け、セリオ。何も、プルームの海で泳げと言われている訳ではないのだ」

それは、他でもないミラの声だった。その声がいたく沈んでいるのは、どうやら寝起きのためというのでもないらしい。

身を隠しつつ、クロエはそっと大広間の様子を確かめた。がらんと広い長卓には、伯爵をはじめ昨夜の晩餐で見かけた貴族達がずらりと列席している。その中には、空色のロングドレスに身を包んだミラも並んでいた。顔ぶれこそ昨夜と似通っている。しかし、彼らが付き合わせるその表情は、酒と歓談に緩んだ昨夜のそれとはうって変わり、まるで戦評定のような物々しさと重苦しさを漂わせていた。「道理で、追撃の手が緩かった訳だ。……奴め、私がカサンドラへ入る事を想定した上で、わざと泳がせたな」

口惜しげに、ミラは吐き捨てた。その声は、一〇代半ばの少女のものとは思えないほどに重く、沈痛な響きを帯びていた。

しばし大広間に、床全体が薄氷にでも化したかのような緊張感を帯びた沈黙が漂った。

並み居る大人の男達が一言も発せずにいる中。沈黙を破ったのは一〇代の少女だった。

「決めたぞ、セリオ。今すぐ奴らの元に投降する」

決然たるミラの言葉に、男達の誰もが腰を浮かせ、色めき立った。

「何を仰います、ミラ様！ この私に、大人しく連中の条件を飲めと仰るつもりですか！？」

しかしミラは、伯爵の激昂には応じず、早々に席を立つと、もはや背後を顧みる事もせず、つかつかと大広間を後にした。

回廊に飛び出したミラの背中を、すかさずクロエは追った。そして、その細い肩を、相手が王族という点を抜きにしてもなお無遠慮に掴むと、力任せに思い切り振り向かせた。

「冗談じゃありません！ イスマエル様の元に投降するなど、」

が、昂ぶる感情と共に怒声を上げたクロエは、そこに、思いもよらないものを目にした。

「……え？」

——泣いて、いる？

「クロエ……」

枯れ枝が折れるような声で、ミラは呟いた。その瞳を、涙の中で夢げに震わせながら。

「え……？」

「この国を……頼んだ」

簡潔な言葉を残すと、再びミラは踵を返し、つかつかと回廊の向こうへと歩み去っていった。途中、居合わせた召使達に身支度を手伝うよう命じながら。

日が高くなるにつれ、街を覆っていた朝靄は次第にその濃度を落としていった。

と共に、大広間のバルコニーからも、カサンドラの城壁の向こう、小麦畑が広がる平原の中ほどに佇む巨大な空中戦艦の姿を、はつきりと目にする事ができるようになっていた。

小規模な村であれば、その船底だけで軽く圧しうる程の巨大な鉄の船が、収獲を待つばかりとなっていた黄金色の小麦畑を、さも当然とばかりに蹂躪している。

そんな不躰な鉄の塊を遠目に眺めながら、クロエは、それらの窓のいずれかから、こちらを見つめ返しているだろうミラの姿を、その沈痛な表情を想像した。

泣いているのだろうか、今も――。

振り向かせたその時には、すでにミラは、そのラピス色の瞳に膨大な量の涙を溜め込んでいた。部屋を後にするその瞬間まで、王女としての表情を保っていた彼女は、きっと部屋を飛び出し、一人になった途端、押さえ込んでいたものを溢れさせてしまったのだろう。怖くないはずはないのだ。未だ一〇代の少女が、今や敵の本陣と化した王都に連れ戻される事を、怖いと思わないはずはない。しかし、そんな本心を晒してしまえば最後、伯爵をはじめ多くのカサンドラ兵士が、彼女を守るべく決起するに違いなかった。

王都にて臨時の指揮権を戴いたイスマエルは、昨夜、あの空中軍

艦に一〇〇〇人も重装歩兵を積載させると、ミラが身を寄せるカサンドラの街へと送り込み、未だ夜も明けやらぬうちに、近郊の小麦畑へ陸上停泊用の支柱を下ろさせた。

もちろん、城壁や城砦の見張りはこの事に気付いたが、自国の軍艦が、物資やエネルギーの補給のために街の近郊へ臨時に停泊する事はさして珍しくもない。そのため、今回もいつもと同様、モノリスにブルームでも充填しに降りたのだろう、とばかりに彼らは考え、さしたる警戒心も抱く事なく軍艦の停泊を許した。

よもや、その攻撃対象が、他でもない自分達の街であるとも知らずに。

攻撃を止める条件として、彼らがカサンドラ側に突きつけた要求はただ一つだった。

王女ミラの身柄を無条件で引き渡せ。

そしてミラは、カサンドラを出た。無用な血が流れる事を防ぐために。

「何やってんだよ、テメエえっ！」

「え？」

振り返ったその瞬間、クロエはその横っ面に鋭い衝撃を覚えた。

床に倒れ込んだところでようやく、クロエは頬をしたたかに殴られた事に気が付いた。骨に響く痛みと共に、不快な熱が、心臓の鼓動に合わせてジンジンと頬を疼かせる。

意識もろくに定まらないまま、クロエは顔を上げた。すると、そこには空色の瞳に怒気を滾らせ、憤然とクロエを見下ろすギルの姿があった。

「な……何ですか、いきなり……」

ぼんやりと、しかし非難めいた口調で訊ねるクロエに、ギルはさすが馬乗りになると、その胸倉を掴み上げながら、なおも雷鳴のよな声で怒鳴った。

「何ですか、だど！？ とぼけんな！ 何で姫様を引き止めなかったんだよ、ええ！？」

「ひ、引き止めましたよ！ ……ですが、ミラ様のご意志を、尊重しない訳には、」

「ふざけんなあつ！」

ゴッ！

再びギルは、クロエの頬に強烈な拳を叩き付けた。

「こんなのが……こんなのがミラ様のご意志なワケねーだろボケエ！」

いよいよ遠のく意識を、どうにか繋ぎ止めながらクロエはギルを睨み据えた。

「で、ではギルさん、あなたは彼女に……自分のために街の人々の命を危険に晒させる、という残酷な状況を強いるべきだったと言いたいんですか？」

「はあ？ どういう意味だよ？」

「きつと、彼女は我慢がならなかったんです……自分一人のために、国民の命を犠牲にしてしまう事を——どんなに身の危険に晒されようとも、自分よりもまず国の事を慮ってしまう彼女の事だから、きつと……」

「じゃあ、そのミラ様の事は誰が護るって言うんだよおっ！？」

「——え？」

ギルの怒号にクロエは、拳よりもなお強烈な一擲を、その脳天に食らった心地がした。

「国を守って、国民を守って、でも、最後にミラ様がそこにいなければ、何んつにもイミがねーんだよボケエ！」

「……ミラ様を……護る……？」

今やすっかり霧の晴れた城壁の向こうでは、離陸準備を整えた空中戦艦が、支柱を収め、いよいよ浮上を開始しつつあった。巨大な鉄の塊が、ブルームを変換した位置エネルギーにより、ゆっくりと高度を増してゆく。

私と共に、この国を救ってくれ。私と共に——。

——そうだとも、約束したじゃないか。彼女と一緒に、この国を

救うのだと。

「ギルさん」

「何だよ」

「空中艇を一艘、工面できますか」

「そんなもん、何に使うんだよ」

「これから……殿下を、迎えに上がります」

六章

戦艦は比較的ゆっくりとしたスピードで、暮れゆく西の空へと向かっていった。もっとも、ゆっくりとは言え、人の足で三日の行程をたった半日足らずで進む程の速度ではあるが。

だが、数刻後れを取ってカサンドラを飛び出したクロエ達の空中艇が、戦艦の巨大な影を雲間の彼方に捉えるのに、夜を待つ必要はなかった。

「見つけました！ ギルさん、もっと運動エネルギーの出力を上げて下さい！」

金色の雲の切れ間に巨大戦艦の船影を見つけるや、クロエは、前方の操縦席にて操縦桿を握る皮鎧姿のギルに声を張った。

「えらそーに俺に命令すんな！ つか、これ以上出ねえよボケェ！」

一方ギルは、手元のレバーを一杯に引き上げながら、背後を振り返り、こちらも目一杯声を張り上げる。街も丘も、山でさえもはるか眼下に望む高度で、しかも、馬や自走車すら軽く凌駕するスピードで飛ぶ空中艇では、いくら声を張っても、相手に「うるさい！」と怒鳴り返される事だけはなかった。

羽根を広げる鷺の姿を象ったその空中艇は、その胴体部分に前後に一つずつ、計二つの座席がしつらえられている。ギルはその前方の操縦席に、そしてクロエはその後部座席に座る。椅子に掛けるベルダの膝に、ぎゅっと抱えられながら。

「この短小鶏頭っ！ いいかげんクロエさまへの暴言はやめてくださいますこと！？」

今度はベルダが、クロエの小脇からぐいと顔を覗かせながら前方に喚く。

「るせー！ このメガネ痴女っ！ つか、お前のセリフが一番タチ悪いんだよ！ あと俺は短小じゃねえっ！」

「二人とも、こんな所で仲間割れは本当にやめて下さい！ 共に闘

う仲間でしょう？」

「そもそも俺は、こんなアバズレについて来いって頼んだ覚えはねえよ！」

「んですってえ！？」 クロエさまをこんな面倒事に巻き込んでおいで、よくもそんな事が申せますわね！ 私の心と身体は、いつだってクロエさまのもの！ 引き剥がそうったって、そうは問屋が卸しませんことよっ！」

言いつつベルダはぎうぎうとクロエを締め上げる。そんなベルダの腕を、肋骨が軋むのを堪えつつクロエはしきりにタップする。

「それともあなた、クロエさまに妬いていらっしやるの？ 本当は私の事が好きなんですか？ ツンデレなんですか？」

「だああれが、テメーの事なんか好きになるかあ！ このメガネ痴女っっ！」

「やめてください、二人とも、ほんと、やめてとめて痛い……」

そうこうするうち、いよいよ彼らの目の前に、戦艦の巨大な影が迫り始めた。

彼の父親、騎士隊長バティスタ氏が、かつて空中遊覧を目的に購入したというこの空中艇には、モノリス弾を撃つための砲台といった、空中戦闘用の装備は一切備えられていない。

片や向こうは、そもそもが他国の都市を丸ごと制圧する目的で建造された戦艦だ。その側面および上部からは、おびただしい数の砲身が、鈍く黒光りする顔を覗かせている。

そんな巨大戦艦を、お気楽な遊覧用空中艇一艘で落とせる、などという楽観思考などは、さすがの彼らも持ち合わせてはいない。

彼らの接近に気付いてか、砲身が彼らの動向を捉え始める。あまつさえ、砲撃を始める砲台もある。最初こそ、威嚇射撃程度の照準だったモノリス弾が、いよいよ彼らの船を掠め始めるに至り、クロエは再び声を上げた。

「甲板の上に寄せて下さい、ギルさん！」

「言われなくてもわあってるよ！ 弾幕のせいで近づけねーんだボ

「ケエ！」

特に、彼らの接近を拒んでいたのは甲板傍の砲台だった。決して大きなものではないとはいえ、微に細に、クロエ達の船が近づけないよう実に細やかな弾幕を張る。

「ちきしょう、あいつらさえ何とかすれば」

「ったく、仕方がないですわね。これだからクロエさま以外の殿方は……」

むく、と席から身を起したのはベルダだった。代わりにクロエを椅子に押し付け、船体の縁に足を掛けるや、バンと船を蹴り出し、黒いワンピースと白エプロンのフリルをはためかせながらふわりと宙に舞う。そして、中空でひらりと身を翻すや――

しゅたたたたた！

一直線に連なるモノリス弾の弾道を、その発端である砲身へ向けて一直線に駆け出した。

撃ち込まれるモノリス弾をことごとく蹴りつけながら。

そして。

「おんどりゃああああ！」

めごおおっ！

見惚れるほどの踵落しが、堅牢な砲身を、ものの一瞬で叩き潰した。

「……マジかよ、あいつ」

「ギルさん、今です！」

弾幕が晴れたと見るや、クロエは、壊れたくるみ割り人形のような顔で甲板を見下ろすギルに向けて再び声を張った。

「だから、テメーみてえな黒モヤシが、俺に命令すんなってんだろ！ この俺に命令を下して良いのは、この世でミラ様ただ一人だけだっ！」

悪態をつきつつも、ギルは操縦桿を傾け、飛行艇を甲板上部に寄せた。一方、バランスに気を払いつつ椅子の座面に立ったクロエは、ようやく人の背丈ほどの距離まで近付いた所を見計らい、一息で船に飛び移った。――が。

ごがんっ！　ごろごろごろ……

着地の足を踏み外し、坂道に置かれたオレンジのように甲板上を転がり落ちた。

「と、とまらないいいいいっ！」

「クロエさまああっ！」

咄嗟にベルダは甲板を駆け出し、なおも転がり続けるクロエへ追いつがった、そして、今まさに甲板のデッキから飛び出さんとするクロエの黒マントを、はっしと掴んだ。

あわや雲の下へ落下かと思われた所を、すんでの所で救われたクロエが、しかし、安心するのはまだ早かった。首に引っ掛かったマントが、命綱と同時に氣道を締め上げる凶器と化していたからだ。

「べべ、ベルダさん、首が、し、しまってます……」

「いやあああっ、クロエさま！　死なないで下さいいっ！」

「何やってんだよ、アバズレ！」

そこへ、空中艇を乗り捨て、戦艦へ乗り移って来たギルが、ベルダの横からクロエに手を伸ばす。

「おい変換士！　さっさと掴め！」

「は、はい」

すかさずクロエは、すがるようにギルの手に取り付いた。剣の鍛錬によるものだろう、その左手はびっしりとマメに覆われ、なめす前の牛革のように硬くごわついていた。

ようやくクロエの身体を甲板に引き上げたところで、ギルは苛立たしげに溜息をついた。

「まったく、何なんだよお前！　あれぐらい、ガキでも普通に着地できるぞボケ！」

「ちよっと鶏頭！　そのようにクロエさまを責めないで頂けます？」

弁護の口を挟んだのはベルダだった。こんな情けない姿を晒す自分にも、味方になってくれる人間がいる——と、クロエの気持ちちが励まされた次の瞬間。

「クロエさまは、変換以外は何をなさってもダメなんですの！　特

に運動神経は目も当てられないぐらいヒドイんですのよっ!」

クロエの心は、音を立てて瓦解した。

「てかお前も、何でそういう自慢にならねえ事を自信満々に言うんだよ!? 好きなんじゃないのかよ? コイツの事が!」

「ええ好きですよ! むしろ変換以外は何にもできないヘタレぶりがソソるんじゃないじゃないですか? あなた、もっと女心について勉強の必要があらうようですよ!」

がるるる。野獣同士の睨み合いが繰り広げられる狭間で、クロエはポツリと呟いた。

「なんか、すみません、生きてて……」

そこへ早速、彼らの侵入を察してか、鎧を纏った数人の兵士が甲板室から飛び出した。

甲板に乗り出すや彼らは、次々と抜刀し、威圧感と共にクロエ達の進路に立ちはだかる。

「は……ったく、嫌になるぜ、マジで」

居並んだ兵士達を見渡しながら、ギルはガシガシと短髪を掻いた。

「そうですね……こんな所で手間を取らされる訳には、」

「ちげーよ」

「え?」

「俺のミラ様への愛を、この程度の人数で阻めると思われてる事が、ムカつくんだよ!」

言うが早いかギルはすらりと剣を抜くと、雷光のように剣を閃かせつつ兵士達の列へと斬り込んだ。

「らあああああっ!」

野獣のようなギルの気迫に、兵士達はうろたえ、僅かに隊列を乱す。その一瞬の隙をつき、ギルの剣が一気に列を突き崩す。

「走れ、お前ら!」

そう叫ぶ頃には、すでにギルの剣は甲板室への路を拓き始めていた。ギルの剣は、相手を殺すためではなく、相手の動きを封じるためだけにひたすら振るわれた。彼の刃は、手馴れた狩人のように敵の肩

や足を狙い、それらの臚に、的確に鋭い刀傷を負わせてゆく。

隊列を突き抜けるや、二人と一体はすかさず甲板室へと駆け込んだ。が、階下からは、すでに多くの兵士達が列を成して迫りつつあった。そこでギルは、それまで猛然と振るっていた長剣をやおら鞘に収めると、今度は、予備として携えていた二本の剣を引き抜いた。いずれの刀身も、長剣の半分ほどの長さでしかない。一見すると頼りない装備に、クロエは不安げに眉を潜めた。

「大丈夫なんですか、そんな剣で」

「アホ！ こんな狭い所で、あんなバカ長い剣が振れるか」

そしてギルは、再び獣のような俊敏さで兵士達の列に斬り込むと、彼らが狭い通路で長剣の刃を持て余している間に、先程と同様、次々と彼らの要所を仕留めていった。

あまりにも圧倒的なギルの強さに、このまま順調に斬り進めるものとクロエが期待した矢先、氣勢を取り戻した甲板隊が、背後から一挙に押しかけてきた。

「しゃらくせえですわぁ！」

と、今度はベルダが背後からの敵に応戦する。先頭に立つ兵士が、侵入者達の頭上に剣を振り下ろしかけた刹那、ベルダはその懷に飛び込むと、剣ごと相手の身体を掬い上げ、階下から押し寄せる兵士達目掛けてブン投げた。

「伏せなさい！ 鶏頭！」

その声に、振り返る事もなくギルは伏せる。と、その頭上を掠めつつ、今し方ベルダの手によって投げられた兵士が、階下に控える仲間達の列へと突っ込む。

「もっと早く言ええ、このアバズレがあ！」

そこで初めて振り返り、怒り心頭で怒鳴り散らしたギルに、ベルダも負けじと喚く。

「男のくせにガタガタぬかすってんですわ！ ほら、次いきますわよ！」

かく言うベルダの腕には、すでに次の生贄が掲げられている。

「ベルダさん、あまり張り切らないで下さい、出力を上げすぎて、途中でブルームが切れると困ります」

「はあい。クロエさま♪」

にこ。至福の笑みを浮かべると、ベルダは掲げていた兵士を再び階下にブンと放った。

頭上から次々と注がれる兵士の雨あられに、階段下に待機する兵士達はたまらず身を退いていった。ぶつかり、あるいはぶつけられ、痛みにも悶絶しながら階段に転がる男達を、容赦なく踏み越えながら、二人と一体はさらに艦の奥へと駆け抜ける。

が、外観から想像するよりもはるかに広い船内からは、いくら倒しても切り伏せても、次々と兵士達が溢れ出てくる。

「くそおっ、ただけ沸いてくんだよバカ野郎！」

しばらく斬り進んだ頃、やおらギルは苛立たしげに喚いた。

さすがのギルも、息つく暇のない剣戟にいよいよスタミナを切らし始めたか、その広い肩を激しく上下させ、荒い息をついている。そんな彼の身を守る黒い皮鎧は、散々に敵の返り血を浴びてか、すでにその一面に赤いまだら模様を浮かべている。

「つか、その部屋ってのはどこにあるんだよ、変換士！」

背中越しに喚くギルに、今や彼と同じく剣を手にしたクロエは、やはり背中合わせのまま答えた。

「非常に重いものですから、大抵の船では、船体の安定を図るために船底の中心に据えられている事が多いです。――恐らく、この船でも」

一〇〇〇人も兵士が乗り合わせる戦艦に、たった二人と一体で何の策もなく切り込むのは、単に殺されに、もしくは破壊されに行くようなものである。だが、その二人と一体は、自らの命を絶つために戦艦へ乗り込んだのでは決してなかった、彼らには確たる目的があった。姫を奪還する、という、唯一無二の確固たる目的が。

目の前に目的が存在する以上、そして、その目的との間に越え難い

障壁が存在する以上、当然、達成のためにはこれが欠かせなくなる。これ、即ち策略だ。

そして今回、二人と一体が取った策略とは、つまりは以下のようなものだった。

まず彼らは同時に船に乗り込む。乗り込むために使用する空中艇はここで乗り捨てる。

そして、艦に進入した後は一目散にミラの所へ——と、言いたい所だが、この段階では、ミラが囚われている場所へ駆けつける事もまして、助け出す事もしない。間違はなく艦内で最も手厚い警備が敷かれているであろう場所へ、みすみす少人数で飛び込んで行くのは、敵の張った網に自ら捕らわれに行くようなものだからだ。

そこでクロエ達が目をつけたのは、そこが自力での脱出が不可能な空中戦艦である、という特異な状況だった。

「どけええええっ！」

ドアの前に控えていた三人もの兵士を、ものの数手で仕留めたギルは、最後の一人を切り伏せるなり早速、目の前の扉にあるドアノブに手をかけた。

だが、“動力室”なるプレートが掲げられた鉄扉は、ギルの腕力をもってしてもビクともしない。そんなギルの背後で様子を見守っていたクロエは、どうやら扉には鍵が掛けられているらしい、と見るや、傍に立つベルダへと振り返った。

「ベルダさん、お願いします」

「了解ですわ。クロエさま。——ほら鶏頭、邪魔ですわよ、さっさとおどきになって」

しっしっ、と、野良犬を追い立てるような手つきでギルを扉の前から追い払うと、ベルダは早速、その堅牢な鉄扉に鮮やかなドロップキックを食らわせた。

ごおおおん……！

腹に響く重低音を響かせながら、L字に折れた分厚い鉄扉が、部屋の内側へと沈む。

扉が開くや、彼らの眼前には、巨象の身体を収めてもなお余るほどの巨大な円筒形の柱が姿を現した。戦艦の動力源が充填された、巨大モノリスである。

その周囲では、十数人の白ローブ姿の男達が、計器や機器を扱う手を止め、唐突な方法で入口に現れた三人の人影に、不審と恐怖の目を向けていた。彼らは、この巨大モノリスを管理維持するために搭乗したモノリス技師であるらしかった。

クロエはすかさず部屋を見渡すと、彼らの指揮を預かっているであろう変換士の姿を探した。

が、いくら見回しても、変換士の身分を示す黒マントの姿は、どこにも見当たらない。

「てめーら！ さっさとここを出ねーと、ぶっ殺すぞ！」

ギルの怒声に怯んでか、あるいは血まみれの皮鎧と剣に恐れをなしてか、白ローブ達は我先にと争うように、どこどかと部屋を駆け出していった。

ついに部屋には、膨大な計器類と、巨大な黒いモノリスが残されるのみとなった。

神々しいまでの威容を示す巨大な柱を見上げながら、クロエは背後の二人に声をかけた。

「では、ここは僕に任せて、お二人は早速、救命艇のある格納庫へと向かって下さい」

「かしこまりました、クロエさま！」

「……おう」

いつも通り澁刺と応じるベルダの一方で、ギルは何とも齒切れの悪い返事を寄越す。

「変換士」

「はい」

「本当に……いいんだな？」

質問と言うより、確認と言うべきギルの口調に、クロエはなおも振り返る事なく答えた。

「行つて下さい。別れを惜しむ余裕など、今の僕らには、ありませんから」

「……ああ」

いつになく沈痛な面持ちで頷くと、ギルは早々に踵を返し、艦内の廊下を駆け始めた。

「では、クロエさま、また後ほど」

そう言い残し、ベルダもまたギルの後を追う。次第に遠ざかる二つの足音を背中に聞きながら、クロエは、「また、は無いよ、きつ」と、誰に聞かせるでもない独り言を呟いた。

ベルダには、ついぞ知らせる事はなかった。これが、クロエにとっては捨て身の作戦であつた事を。

これから行う作業は、その捨て身の作戦の中でも特に、要と呼ばれるべき重要な作業だった。手順それ自体は、クロエにとっては決して難しいものではない。その代わり、命の無事は、保障されない。しかし、この手順の実行なくしては、今回の作戦はそもそももスタートすらしない。

早速クロエは、目の前の黒い柱に歩み寄ると、その表面に手を添え、そつと瞼を閉じた。

深く息を吸い、それから、ゆつくりと、一言一言確かめるように言葉をつき出す。

「要請する、残存するブルームを全て、」

「クロエ！」

その声が聞こえた刹那、クロエの脳裏から、唱えるべき続きの言葉が一気に消し飛んだ。

「……え？」

それは、ここにいるはずのない——否、決してここにいてはならない人物の声に他ならなかった。ひとりでに生じる震えをどうにか押さえながら、そつと入り口を振り返る。

「な……」

と同時に、クロエは再び驚愕に呻いた。

そこには、今のクロエにとって、出くわすには最も望ましくない黒服の男が、いつぞやと同じ柔和な笑みを浮かべて立っていた。その傍らに、数人の屈強な兵士と、そして、クロエがつい先程まで命を賭して救おうとしていた少女を引き連れて。

「やあ。久しぶり——と言っても、たかだか二日ぶりの再会だけだね。……でも何故だろう、随分と懐かしい気がするよ。まあ、あれからお互い、いろいろあったからね」

「どうして……殿下が、ここに」

ともすれば膝を崩しそうなほどに愕然とするクロエを、軽く嘲笑うかのように、平然とイスマエルは答えた。

「どうして、って？ 別に驚く事でもないだろう。こんな時、変換士であれば誰であれ大体同じ事を考える——そうだろう。違うかい？」

クロエは、頷く事もかぶりを振る事も出来ず、ただ呆然と立ち尽くしていた。

これほど巨大な戦艦に、一人の変換士も同乗していないという事はあるえない。しかしながらその一人が、よりにもよってイスマエルだったとは、クロエには想像すらし得ない事実だった。

なおもイスマエルは得意気に続けた。

「君の考えは全てお見通しだよ。艦のメインモノリスに充填されたプルームを光エネルギーに変換して一気に消費する。プルームを失った艦は、位置エネルギーを維持する事が不可能になり、やがて落下を始める。慌てた乗員達が、脱出用小型艇のある格納庫へミラを連れ出したところを、格納庫に潜伏させた別の仲間が襲い、そのまま小型艇にミラを乗せて奪い去る——大方、そのような計画でも立てていたのだろう。違うかい？」

今や全ての手の内を綺麗さっぱり見透かされたクロエは、もはや否定する気も起こす事が出来ないままこくりと頷いた。

「ええ。仰る通りです」

「という事は、ここにミラがいる限り、君はその計画を、永久に実

行には移せない」

言いながらイスマエルは、そのしなやかな腕を、ヘビのようにするりとミラの腰に回した。一方のミラは、これまでギルにさえも見せた事のないほどの嫌悪の色を、その顔に色濃く滲ませる。

「クロエ君。僕らはもうじき結婚する。慶事を前に、血生臭い面倒事など、これ以上続けたくはない。ここは大人しく、我々の元に投降してはくれまいか」

「え……結婚？」

はっとしてミラを見やったクロエの視線を避けるように、ミラは顔を俯かせた。涙こそ気丈にも浮かべてはいないものの、硬く引き結んだ唇が、溜め込んだ感情を今にも爆発させんばかりにふるふると震えている。

と、やおらイスマエルは、その柔らかな目元に、鉄をも貫くような鋭い視線を浮かべた。

「私には、君が理解出来ない」

「え？」

思いがけず硬質なその声に、クロエは軽く面食らい、その瞳を瞋った。

啞然とするクロエには構わず、イスマエルはさらに苛立たしげに続ける。

「考えてもみたまえ。そもそも我々は変換士だろう？ プルूमを用的、いかに我々の生活を豊かにするか……その方法を模索するのが我々の仕事だ。にも関わらず君ときたら、プルूम枯渴説だの増幅装置暴走説だのと、我々変換士の存在意義を、根底から覆す研究ばかりにかまけて……本当に、私にはまるで理解できない」

クロエは答えず、ただ、イスマエルが投げつける言葉に、じっと耳を傾けた。

「今回だけは、同じ変換士の情けとして命ばかりは助けよう。その代わり、君の変換士としての身分は、その制服もろとも剥奪させてもらう」

「……そんな事をしても、私には何の意味も、」

「ああ、分かっているよ。身分など所詮は飾りだ。剥奪されたからと言って、変換自体が不可能となる訳じゃない——だがね、クロエ君」

するとイスマエルは、俄かにその美麗な目尻を鋭く釣り上げると、端正な顔を醜く歪めて唸った。

「私には我慢がならないんだよ！ 君のように、与えられた職務を全うしない、変換士に対して国民から寄せられる期待に、役割に、まるで応えようとしらない！ そういう怠慢な変換士の存在がね、私には我慢ならないんだ！」

獣のような咆哮に、しかしクロエは怯む事なく、むしろ毅然と返した。

「それは、いわゆる見解の相違というものです」

「は？」

「僕にしてみれば、増幅装置の危険性から目を背けてまで、安易なプルーム依存を国民に許す、あなたのやり方こそ理解できない」

「……何？」

「もし、殿下の仰る変換士のあり方というものが正しいのであれば、もう僕は、こんな制服など要りません」

言い放つやクロエは、身に纏っていた黒いジャケットを、もぞもぞと脱ぎ捨て、それを、イスマエルの手元へ——ミラの眼前へと放った。

と同時に瞼を閉じ、モノリスに触れつつ小声で一氣にまくし立てる。

「残存プルームを全て、光エネルギーに変換」

その瞬間。

「うああっ！」

クロエを囲んでいた兵士達から、野太い絶叫が上がった。

が、そんな彼らが一体どんな表情で、どんな格好でその声を上げているのか、それを知る術はクロエには与えられなかった。瞼を閉ざしてさえもなお、目の前が白く霞むような強烈な光が、クロエを、

のみならず、その場に居合わせた全ての人間を包んだからだ。

瞼越しに光が収まるのを確かめるや、クロエは堅く閉ざしていた瞼を開き、と同時に足を蹴り出した。そして、視力を奪われ、混乱する兵士達の列をすり抜けると、イスマエルの腕に囚われたままのミラに駆け寄り、その手を伸ばした。

「行こう！ ミラ！」

その声に、ミラもまたその白く細い手を伸ばす。

だが――。

クロエの手が、ミラの手を捕える事は、ついぞなかった。

咄嗟に身を翻したイスマエルは、ミラを背後に隠しつつ、もう一方の半身をクロエの懷に捻じ込むと、同時に、そのみぞおちに強烈な肘の一撃を食らわせた。

「な、何故……」

驚き、そして、内臓がごとく挽き潰されたような痛みで膝を崩しつつ、クロエは、強張る喉を振り絞った。そんなクロエを貼り付けたような笑みで見下ろしながら、イスマエルは答えた。

「言っただろう。君の考える事は、全てお見通しなんだよ、とね」

「……っ」

「それにしても無茶をする。私の花嫁が失明でもしたらどうしてくれるつもりだった」

瞬間クロエは、今度は喉元から頭上にかけて、脳味噌を天井に弾き飛ばされるような衝撃を覚えた。イスマエルの放った膝蹴りが、クロエの顎を鋭くかち上げたのだ。

「クロエええっ！」

ミラの絶叫が、薄れ行くクロエの意識を微かに呼び戻す。が、その効果も、目立った効を奏する事はついぞなかった。ほどなく、事切れたように全身の力を失ったクロエは、他愛なく、あまりにも他愛なく、どさ、と横様に倒れ込んだ。

無様な格好で床に横たわるクロエを睥睨しながら、イスマエルは静かに言い放った。

「安心したまえ、クロエ君。君が変換士である限り、君をペン以外の方法で殺すような真似はしない」

「……え？」

「君の唱える増幅装置暴走説が、全くの出任せであるという事を、間もなく証明して見せよう。他でもない、我らが王都においてな」
その言葉を耳にするや、いよいよクロエの意識は黒く、深い闇へと沈んでいった。

七章

クロエが次に目を覚ました時、彼は、客人に提供されるものにしてはあまりに硬く、そして冷たい寝床に横たえられていた

自身の指先さえおぼつかないほどの闇の中で、頭上で明々と輝く松明、ただそれだけが、冷たく強張った彼の心と身体に、柔らかな温もりと明かりを提供している。

——え？ 松明？ 炎？

怪訝に思い、クロエは顔を上げた。天井から吊り下げられた鉄製の灯籠では、今やブルーム型文明によって完全に駆逐されたはずの松明が、ぱちぱちと爆ぜていた。

「どうして……炎が？」

「そこが、変換士のために用意された、特別な独房だからだ」

不意に闇の奥から、澄んだ、しかしながらどこか張りのない、若い男の声が響いた。

クロエは早速、なけなしの体力を振り絞ると、強張った身体を一息に起こした。

改めて周囲を見回したクロエは、目の前に立て仕切られた堅牢な鉄格子を目にするなりすぐさま納得した。男の声が示す通り、そこは、岩盤をくり抜いてしつらえられた、小さな独房だったのだ。

「ようやく、目を覚ましたようだな」

再び、声が響いた。今度はクロエにも、その声の主が誰であるかすぐに分かった。鉄格子の向こう、通路を隔ててもう一枚の鉄格子で仕切られた先に、壁に背を預け、長い足を抱いてうずくまる一人の男の影があった。彼こそが、先程の声の主に違いなかった。

身に纏った肌着には汚れや染みが目立ち、また、髪や肌はひどく荒れ、いずれも、彼がここで過ごした時間の長さを物語っていた。だが、身なりこそ酷いの一言に尽きるものの、その立派な体格といい、端正な横顔といい、いずれもクロエにとっては、確かに見覚えのあ

るものだった。

「あなたは……」

もしやと思い、クロエは二枚の鉄格子を隔てて男に尋ねた。もしや、という感情は、疑問と言うよりむしろ、そうあってほしくない、という願望によって起こされたものである。

だが、男は、クロエの願望に反し、クロエが想像した通りの答えをよこした。

「レオン……」

「え」

「レオン・カスパリア」

男は相変わらず俯いたままぼつりと答えた。抑揚の無い声が、言外に、彼の抱く絶望と悲嘆を鉄格子越しのクロエに伝え、クロエの惨めな心を、さらに押し潰した。

「申し訳、ございません……」

何故なのかは分からない。だが、気が付くとひとりでに、クロエは男に対し、そう口にしていた。

「何故、謝るのだ」

「いえ、私は謝罪せねばなりません。あなた方ご兄妹を、このような悲惨な境遇に追い込んだのは、他でもない、私と、私の父だったのですから」

「そなたと……そなたの父？」

「はい。我々親子があのような論を提唱さえしなければ、陛下が、その御世を危うくする事もござらなかったでしょう」

「まさか——そなた、名は何と申す」

「わ、私はクロエ……アルカサル。父はクロノ・アルカサルです」

「クロノ、だと？」

そこで初めて、レオンは顔を上げ、クロエの方を振り見た。紅色の髪の上で白々と光るランタン——あちらは、普通のモノリス灯だ——の光を浴びたラピス色の瞳が、窪んだ眼窩の奥でやおら生気を帯びる。

「君が……そうか、クロノの……」

噛み締めるように、レオンはその名を口にした。まるで旧友の名を懐かしんでいるかのようなその口調に、クロエは、ただの御用学者に対するものだけではない、一種特別な感情の存在を感じ取った。よもやと思い、改まって訊ねる。

「陛下は、もしか、生前の父を御存知でおられたのですか」

「ああ。どころか、生前はよく王宮に呼び立て、直接、彼に教授を仰いだものだ」

「……父を？」

「ああ。クロノには、様々な事を教わった。この国に忍び寄る危機について。その危機を回避する方法について——だけではなく、よく語り合ったものだ。この国のあるべき姿について。……余にとって、クロノはただ一人の、本当に良い友人だった」

「そう、だったのですか……」

石壁の向こう、はるか遠い過去の光景に眼差しを向けるレオンの姿に、クロエはふと、胸に風穴を開けられるようなひどい疎外感を覚えた。

——彼の中にも、自分の知らない父がいる。

クロエの父、クロノ・アルカサルは、クロエが一〇歳の時に他界した。

幼いクロエにとって、父は、気が向いた時にふらりと旅から戻って来る、気まぐれなつむじ風のような存在だった。そのつむじ風が、家で自身の研究について語る機会は、全くと言って良いほど、なかった。

そのため、クロエ自身は決して、父の影響で変換士の仕事を選んだつもりも、また、父の遺志を継ぐためにブルーム枯渴説を唱え始めたつもりもなかった。しかし、いや、だからこそ、その道程に、つい父の偉大な足跡でも見つけようものなら、嬉しさよりもかえって戸惑いの方を先に覚えてしまうのだった。

「そなた、クロノからは何も聞いていないのか。余の事も、研究の

事も」

「はい、恐れながら。生前の父は、自身の研究や……どころか、交友に関する事は何一つ、私に話して聞かせた事はありませんでしたから——想像すら、かなわなかったのです。よもや陛下が、父のご友人であられた事など」

「それは、余にとっても意外な話だな」

「え？」

今度は、クロエが驚きの声を上げる番だった。

「余の方は、随分とそなたの——一人息子の話を聞かされた。見た事のない草花や虫を見つけては、必ずその名を訊ねて来る、好奇心の旺盛な子供だと、嬉しそうに語っていた」

「父が、私の話を？」

「ああ。ただし、その好奇心がいずれ仇になる事も、同時に危惧しておった。自身の場合と同様、その好奇心が、知らずともよい世界の事実を彼に知らせてしまう。だからこそ、変換士にだけは就かせたくはない、とも——どうやら結局、亡き父君の願いは、叶わなかったようだ」

クロエは今一度、自身の姿を顧みた。

いつしか彼の服は、きめの粗い麻の囚人服に取り替えられていた。粗雑に織られた布地には、そもそも保温効果など期待しようもなく、それが証拠に、その粗い布目からは、ただでさえ石畳に奪われ目減りしたクロエの体温が、今もお刻々と漏れ出ている。どうやら、変換士の地位を剥奪する、というイスマエルの言葉は、嘘ではなかった様子だった。

が、たとえ彼の服装がどうであれ、彼の繋がれている独房そのものが、彼の能力を雄弁に物語っていた。彼の頭上で暗闇に灯りを供しているのは、モノリスではない。いかな腕の劣る変換士でも、小さなモノリス一つさえ手に出来れば、十分にプルームを充填させた上で熱に変換し、その熱で鉄格子の柵を溶かす事は充分可能である。この独房は、そのような変換士による脱獄を恐れて作られた、特別

な牢に違いなかった。

「た、確かに……私は父の意に反して変換士となりました。ただし、これは父の背中を追ったためではなく、あくまで私自身の意思です。私もまた、知りたいと願いました。何故、歳を追うごとに穀物の収穫が減っているのか、何故、飢饉が頻発するようになったのか。何故、年々湧出するプルームの量が減っているのか。——父の影と遭遇したのは、全くの偶然です。変換士となり、私自身この分野の研究へ足を踏み入れた事も……」

「いや、偶然ではないよ、クロエ」

きっぱりと言い放たれたレオンの声に、クロエは再び顔を上げた。

「え？」

「きつと、そなたには通じていたのだ。言葉ではなく、もっと深い、無意識とも呼べる部分で、そなたは父の思いを、受け止めていたのだよ。……いや、受け止めていないはずは、ない。あれほど自身の子供を愛していた男を、余は他に知らぬ」

「……父が、私を？」

「クロノは常々、プルーム枯渴説を唱えるのは全て息子——そなたのためだと仰っていた」

「え？」

「そなたが成長した後も、結婚し家庭を設け、そして、いずれ歳を取った後も、この国にプルームが満ち、穀物が実り、豊かな生活が続くようにと……そのために、たとえ誰も耳を貸さずとも、研究を続け、声を発し続けるのだと仰っていた」

「僕の、ために……父が」

「ああ。——今のままプルームを汲み上げ続けていれば、いずれプルームは枯渴し地味は落ち、いずれ土地は枯れて穀物の実らない死の土地と化す。クロノは誰よりもそなたのために、豊かな世界を残そうと努めておられた。——だからこそ余は、彼の言葉に心動かされたのだ。私もまた子を持つ親だ。国民という名の子をな……子の親たる王が、子のために成すべき事を成すのは当然だ——だ

が、皮肉な事に、往々にして親の心が正しい形で子に届く事はほとんどない。その結果が、これだ」

皮肉めいた声と共に、レオンは腕をそっと上げた。彼の手首に繋がれた鎖が、じゃら、と、耳障りな金属音を奏でる。

「やはり、アルバの件で、このような事に」

ああ、と頷き、イスマエルは続けた。

「国民が求めるのは、耳に痛い警句ではない。今日明日の快適な生活だ。心躍るきらびやかな夜の町並みだ。食い飽きるほどの豊かな食事だ。己の足の代わりに、どこまでも己を連れまわしてくれる快適で便利な足だ。——イスマエルは見抜いていたのだ、それが民の本質であり本心であるという事を」

「……陛下」

「つくづく、余はバカ王だ。国民の期待や願望を、何一つ叶える事の出来ない、愚かな為政者だよ。——その点では、奴こそ王に相応しい。国民の願望を、要求を叶える事が、王の責務であるというのなら——」

「そんな事は、ありません！」

やおらクロエは、大声で吠えた。

「あなたは……陛下は、王として何よりも不可欠な素質、国民の真の幸せを願う心をお持ちです。本当の意味で民を愛する王こそ、真の王であるべきだ。僕は、そう思います」

「……クロエ」

「陛下、あなたの牢に灯されたランタンの芯を、僕に頂けますか」

「え？ あのモノリスを、か？」

レオンは頭上のランタンを仰ぎ見た。ガラス製の灯籠の中で光を放っているのは、小指程度の小さなモノリスだ。

しかし、レオンはクロエの言葉に対し、沈痛な声で呻いた。

「恥ずかしながら、余の手はこの通り、鎖に繋がれておる。とても、あのランタンまでは」

レオンの言うとおりに、彼の手首に嵌められた手錠はいずれも、床か

ら伸びる鎖に繋がれ、せいぜい子供の背丈程度にしか、引き伸ばすことは敵わなかった。とても、頭上のランタンに手を届かせるまでには至らない。

「そなたこそ、何とかできぬのか。変換士だろう」

「しかし……モノリスに直接触れる事が出来ない以上、命令は……」その時、ふとクロエの脳裏に浮かんだのは、先日、イスマエルが彼の前で見たあの鮮やかな、そして残虐な殺戮劇だった。

たった一本の短剣で、てんでの方向へと走る人間の首を刎ねるには、その手から短剣を離れた後も、何らかの命令を行う必要がある。軌道を変えるにも、速度を変えるにも、角度を変えるにも、逐一、細やかな命令の書き換えと追加が、必要になる。

——今まで、想像を巡らせた事もなかった。いや、最初から不可能だと割り切った上で、想像を巡らす行為すら放棄していた、と言った方が正しい——だが、イスマエルの技を見る限り、やはり、それは可能だとしか……。

クロエは今一度、レオンの頭上で明々と輝くランタンを見据えた。

鉄格子越しに手を伸ばし、そして、唱える。

「要請する。プルーム五〇〇〇ガルを充填の後、三〇〇ガルを運動エネルギーに変換……」

イスマエルに出来る事が、自分に出来ないはずはない。

確かに彼は天才だ。だからと言って、彼は神でもなければ魔物でもない。やはり、どう突き詰めても自分と同じ、人間なのだ。

そして僕もまた、彼と同じ、変換士なのだ。

ベルダさんの言うとおり、確かに僕は、変換以外は何も出来ない人間だ。——だからこそ、変換に関しては誰にも、負ける訳にはいかない。

「来い……」

「どうした、クロエ」

怪訝な声で訊ねるレオンに構う事なく、クロエは集中を続ける。

「要請する……モノリス、この手に、来い……」

自らの使命を果たすために、守るべきものを守るために——もう誰にも——

「来い！ 来い！ 来い！」

パリン——パシッ。

軽快な亀裂音が独房内に響いた、と思った時にはすでにクロエは、伸ばしたその手に、白々と光る小さな棒を手にしていた。ひとりでランタンを飛び出したモノリスが、まるで見えない糸にでも吸い寄せられたかのように、鉄格子の隙間から伸ばされたクロエの手に、綺麗に収まったのだった。

「で……出来、た……」

その右手に収まった棒をぼんやりと見下ろしながら、クロエは呆然と呟いた。

「そんなものを使って、一体何をするつもりだ」

レオンの声に、ようやく我に帰ったクロエは、きつと顔を上げながら言い切った。

「ここを出ます」

「そんな小さなモノリスで、か？」

「はい。そして、必ずやあなたを、お救いします」

言いつつクロエは、その粗末な服の裾を細い带状に破くと、洞窟奥の壁を滴る水に布を浸たし、手にしたモノリスの隅に幾重にも巻き付けた。そして、今一度、唱えた。

「要請する。ブルーム三〇〇〇ガルを熱エネルギーに変換——」

地上へと続く階段の前には、剣を携えた二人の兵士が、微動だにせず立ち尽くしていた。その様子を、手前の曲がり角からじっと伺いつつ、クロエは手にしたモノリスの照準を、彼らの一人へと定める。と同時に、もう片方の手で、今一度、鉄の棒をぐっと握り直す。それは、つい先程、クロエが牢から脱出するためにモノリスで焼き切った、鉄格子の一本“だったもの”だ。

「ブルーム一〇〇〇ガルを運動エネルギーに……」

唱えるなりクロエは、狙いをつけた兵士目掛け、モノリスを放った。
ガァアン！

鉄兜が銅鑼のような音を響かせると共に、その兵士は、がく、と膝をつき、倒れた。クロエが運動エネルギーを与えて放ったモノリスが、引き絞られた弓よりもなお強く、兵士の兜を打ったのだった。
「な、何だ！？ 何だ！？」

突如生じた異変に、もう一人の兵士が一瞬、動揺する。その虚をつき、クロエは潜んでいた物陰から一気に通路へ飛び出すと、怒号と共に、手にした鉄棒をもう一人の兵士の鉄兜へと、思い切り叩き込んだ。

再び、銅鑼を打ったような物音が地下通路にこだまし、ほどなくして、冷たい石造りの床にもう一つ、白目をむいた負傷者の身体が追加された。

「はあ……こわかったあ……」

ともすれば碎けそうになる腰を、何とか鉄棒一本で支えながら、クロエは息をついた。

が、安心するのはまだ早かった。物音を聞きつけ、いつ別の兵士が降りて来ないとも限らなかったからだ。兵士の一人から衣装を剥ぎ取ったクロエは、それらを身につけるなり、すぐさま地上への階段を駆け始めた。

ようやく地上へ至り、燦燦たる陽光に目が慣れるや、クロエは、そこに広がる景色が、妙に見慣れたものである事に気付いた。見覚えのある噴水、見慣れた石柱を並べた建物……。

そう、それは紛れもなく、変換士学会本部の建物に他ならなかった。
「まさか、こんな近くに……」

よもや、地下牢の入り口が、通い慣れた場所の近くにあったものとは思ってもよらなかったクロエは、驚き半分、物悲しさ半分といった心持で、その荘厳な石造りの建物を眺めた。

——もう、僕には関係のない場所のほず、なのにな。

皮肉なものだ。クロエは内心で呟いた。

ようやく、変換士になった理由や、研究を続ける理由に出会えたと思ったその時には、もはや変換士としての資格を失っているとは。――そう、僕は何につけても、気づくのが遅すぎる。

父の遺志にしろ、自分の意思にしろ――。

何らかの祭事でも控えているのか、その日、本部の廊下は、いやにせわしなく駆け回る黒服の男達や、彼らを補佐する白服のモノリス技師達で溢れ返っていた。傍の石畳を、変換士や、そんな変換士を満載した自走車が間断なく行き交う。それらの中には、クロエの見知った変換士仲間の姿さえもちろはらと紛れていた。が、幸か不幸か、衛兵の姿を纏ったクロエをクロエであると気付く者は、そこには誰一人としてなかった。

行こう。もう、ここに僕の居場所はない……と、クロエが踵を返しかけた、その時だ。

「久しぶりですね。クロエ・アルカサル」

「え？」

思いがけず名前を呼び止められ、クロエは石畳に進めかけた足をはたと止めた。

恐る恐る、振り返る。すると、ローズマリーの香る庭の最中に、まるで昼の只中に取り残された夜陰を思わせるような、黒いローブを纏った一人の老人が佇んでいた。いつもは入口にて来訪者を迎える任に立つその古い変換士は、その日に限っては、どういう訳か庭に降り、一人、日光浴に興じているらしかった。

何も映らない、白い眼球でじっとクロエを見据えながら、老人は再び、口を開いた。

「一瞬、クロノが来たものと聞き紛いました」

その言葉に、クロエは思わず胸が詰まった。たとえクロエがどのような格好を帯びていようと、足音のみで相手を聞き分ける彼には、さしたる違いはないのだった。

「もう、クロノはいません。そして、クロエも……」

「……どういう、事です？」

小首を傾げる老人に、クロエは、ともすれば詰まりそうな喉を振り絞りながら言った。目の前の緑溢れる庭が、次第にもやの中へと霞み、沈んで行く。

「変換士としての地位を、失いました。私は変換士として、あるまじき態度を取ったのです。変換士という存在そのものを否定するような……」

「はて、あなたは一体いつ、変換士という存在を否定したのですか？」

「へ？」

思わぬ言葉に拍子抜けするクロエに構わず、老人はさらに言葉を続けた。

「私は、あなたほど、変換士という仕事に対して真摯な人間を、あなたの他には一人しか知りません。クロエ・アルカサル」

「……え？」

「プルームによっていかに人々の生活を豊かにするか。より多くの人々を幸せにするか。それが、本来の我々の仕事であつたはずです。違いますか？」

「……」

「あなたと、あなたのお父上は、そのような本来あるべき変換士の姿に忠実だった、非常に数少ない変換士でした。そして恐らく、今も――」

思わず、クロエはぐっと俯いた。目の見えぬ老人に対し、無駄と知りつつ目尻から溢れるものを必死で隠した。

「クロエ・アルカサル」

「はい」

やおら老人は、威厳を帯びた重みのある声でクロエの名を呼んだ。その厳粛な声に、クロエは再び顔を上げる。だが、涙に霞んだその視界は、今やほとんど本来の用を成してはいなかった。

「イスマエル殿下は、今宵の王位継承の儀と共に、かつてレオン陛

下の手によって起動を差し止められていた王都の増幅装置を、いよいよ稼働させるおつもりです」

「変換装置、を？」

「あなたなら、その事が何を意味するか——彼の行為がこの街に何をもたらすか——よく、わかるでしょう」

クロエは何も答えなかった。いや、答えられなかったのだ。恐怖と驚愕で身体が震え、声を発する余裕すら、クロエには与えられなかった。

衝撃に立ちくらみすら覚えるクロエに、老人は、すがるような声で言った。

「この街を……国を、救ってください。クロエ・アルカサル。この老骨に出来る事は限られています、望みとあれば、出来る限りの力をあなたに貸し与えましょう」

八章

王都中心部の市民広場は、既におびただしい数の人々によって埋め尽くされていた。

いつもは、広い石畳の広場に、市場や大道芸のステージが開かれるだけの猥雑な広場は、今宵ばかりは、いつになく厳肅な雰囲気によって充たされていた。広場脇にしつらえられた式典用の舞台は、花や果物、オリーブの枝などで華麗に装飾され、舞台袖に灯された巨大なモノリス灯の光を浴び、燦燦たる輝きを放っている。

その周囲では、普段は王宮の中を行き交うだけの貴族や召使達が、今日ばかりは大理石の廊下ではなく、市民の雑踏によって磨り減らされた石畳の上を、せわしなく駆け回っている。

舞台前に詰め掛けた人々は、皆、一様にイスマエルを称える旗を振り、新しい王の登場を今か今かと待ち侘びている。すでに広場は、舞台の上に主賓を迎える前から、溢れんばかりの歓迎の意に満ちていた。

十六夜の月が、ようやく東の地平に顔を覗かせたその時、蓄積された人々の熱気が、やおら夜空へと弾けた。待ち侘びた新王が、ようやく、彼らの眼前へと姿を現したのだ。

純白のマントにジャケツト。いつもは変換士として、黒一色の服を身に纏うイスマエルにあって、それは極めて珍しい出で立ちだった。しかし、彼がそのような服を纏うのには、王の戴冠式に臨むため、という理由の他にもう一つ、重要な意味があった。

堂々たる佇まいを誇る新王の傍らには、同じく純白のロングドレスと、そして、瞳の色と同じラピスラズリをあしらった、豪華なネツクレスを身に付けた花嫁が付き従う。が、晴れやかな表情を浮かべたイスマエルに対し、花嫁は、まるで感情という感情を忘れ去ってしまったかのような相貌を呈していた。

満場の歓声、そして興奮の中、舞台中央の演説台の前に立ったイス

イスマエルをはじめ舞台上に立つ誰もが、怪訝な顔を騒乱の方へと向けた。そんな中であって、純白の花嫁ただ一人だけは、騒乱の中から微かに漏れる声を耳にするや、石像のようだったその顔に、今宵、初めて瑞々しい生気を宿した。

ラピス色の瞳が見開かれ、小さな唇が、待ち侘びたようにその名を口にする。

「クロエ……」

近衛兵達に押し戻されながら、クロエはなおも壇上に、そして、広場に集った市民達に叫んだ。

「増幅装置を起動させてはいけません！ そんな事をすれば、必ずや王都は滅びます！」

人々の間に、やおら不穏なざわめきが走った。

その様子をあくまで冷静に眺めつつ、イスマエルはなおも平然と応じる。

「皆の者、静粛に。いつの世も、悪い噂というものは絶えないもの。そのような無根拠な不安に惑わされる事なく、我々はただ、未来だけを見据えておればよい」

朗々としたイスマエルの声に、応じたのは、他でもない彼の花嫁だった。

「イスマエル。そなたは卑怯者だ」

「は？」

怪訝な表情と共に振り返る花婿に、ミラはさらに続けた。

「彼の言葉を、無根拠な噂と断じるのであれば、その前に、正々堂々と彼の説に耳を傾けた上で、それを論破してから言え」

「ミラ……！！？」

ぎり、と、花婿の端正な口元が歪む。が、構わずミラは畳み掛ける。「どうした、イスマエル。あ奴の事は、剣でなくペンで殺すのではなかったのか？」

その言葉にイスマエルは、まるで憑き物が落ちたかのように、歪め

ていた口元をはたと緩めた。

「ああ、そうだったね。ミラ」

すぐさまイスマエルは、予定外の論客に対し壇上での発言の許可を下した。

近衛兵達の列を割り、演説台の前に進み出たクロエの姿を見るや、イスマエルは、いよいよその相貌に不快の色をはっきりと浮かべた。クロエが着用していたのは、入口の老人——変換士学会本部長・コルネリウスが、公式の席でのみ身につける事を許される、儀礼用の制服とモノリス刀だった。デザインや色合いこそ通常の制服とさして変わらないものの、その布地もしつらえも、通常の制服と比べ、一層豪華な造りとなっている。わけでも、金糸によって胸元に縫い込まれた変換士の紋章が、国民に対し、とりわけ変換士達に対し、着用者の威厳を示していた。

「そんなものを着て、一体何を私に示したいのだ？」

「コルネリウス様のご意志をです、殿下。——これ以上、変換士としての殿下の横暴を看過する事は出来ない、と」

「なるほど……あの老いぼれめが」

忌々しげに吐き捨てるイスマエルを横目に、クロエは演説台の前へと恭しく進み出た。

困惑と不満、中には敵愾心さえ向ける人々を前に、クロエは改めて思い知った。

——僕の言葉は、決して彼らの心に歓迎される事はない。

それでも、僕は伝えなければならない。彼らにとっては耳障りなだけの、その真実を。他でもない、この国の未来のために——……いや。

そこでクロエは、ふと、背後に立つミラに目を向けた。

婚礼用の化粧を施したミラは、神殿を照らすモノリスの白い光の中で、宝玉さえも霞むほどの美しさを湛えていた。が、クロエの目を捕らえていたのは、そのような彼女の表面的な美しさではなかった。彼女の瞳から発せられる、決意を帯びた眼差しだった。

——そうだ。僕は、この国の未来を想う彼女のために……。

再び、観衆へと向き直ったクロエは、一つ大きく息を吸い、そして、声を発した。

「まず、最初に皆さんにお伝えしたいのは、先日消滅したクルスや、その他、辺境で消滅した多くの街や村は、流れ星などのせいで滅びたのではない、という事実です」

クロエの発した言葉に、俄かに、会場がどよめいた。どよめきに負けぬよう、クロエはさらに声を張り、続ける。

「本当の原因は、増幅装置の暴走……、そう、これから王都での稼動を予定されているものと同じ、増幅装置の暴走、すなわち、過剰なプルームの汲み出しによって起こるプルームの不安定化と、それに伴うプルームの噴出によって、滅んだのです」

が、人々はなおも、クロエに怪訝な眼差しを寄越し続けた。差し向けられる悪意の視線を堪えつつ、クロエはなおも続けた。

「その事実を、イスマエル殿下はずっとひた隠しにしてこられたのです。流れ星のせい、などという子供じみた嘘で繕い、真実を隠しておられたのです！」

いよいよ人々は、ざわめきと共に困惑顔を突き合わせ始めた。市民の反応に勢いを得てか、得意気な表情でイスマエルが口を挟む。

「一体、どのような証拠を元に言っているのだね、クロエ君」

嘲るようなイスマエルの言葉に、しかしクロエは真摯な眼差しを差し向けて答えた。

「証拠ならいくらでも提示できます。それこそ、本一冊程度では足りないほど……もっとも、あなたが私に、この場でのそれらの証拠の発表を、許して頂ければの話ですが」

そして再び、クロエは民衆に向き直って言った。

「皆さんも薄々、気付いているはずです。何故、無作為に地に墜ちるはずの流れ星が、人の住む街ばかりを狙って墜ちるのか。中でも、何故増幅装置を使用する街ばかりを狙うのか——思い込みを廃し、冷静に事実を見つめれば、自ずと答えは出せるはずです。後は、あ

なた方がいかに事実と向き合うか、ただ、その一点に託されているのです」

いよいよイスマエルは、我慢できないとばかりに哄笑を上げ始めた。一方で民衆からは、あの気の狂った変換士を、早く舞台から引き摺り下ろせとの怒号が飛ぶ。

朗々とした口調で、イスマエルは言った。

「偽りの事実と、どう向き合えと言うのだね。存在も確かでない事実より、今は目の前の問題を解決する事の方が先決だ。――増幅装置を使わない限り、市民の平穏な都市生活は決して保障されえない。不測のプルーム供給停止に、市民は皆、困り果てているのだよ」
「では、あなたは、今の快適な都市生活を維持するために、国民から真実を――おぞましい真実の存在を、隠蔽し続けると仰るのですか」

「そのようには言っていない。ただ、ありもしない問題を引き合いにして相手を責めるのは卑怯だと言っているのだ。暴走説然り、枯渴説然り」

「暴走説は事実です。もちろん、プルーム枯渴説も――増幅装置を必要としているのがその最たる証拠です。減少しつつあるプルームを、それでも以前と同じ量を汲み上げるためには増幅装置の稼働が不可欠――つまり、あなたの施策こそ、私の論を証明している事に他なりません」

「……なるほど」

静かに、そして、忌々しげにイスマエルは吐き捨てた。そんなイスマエルに、なおもクロエはまっすぐに向き合いながら続ける。

「国民の生活を思い、あくまで国民の視点に立った施策にこだわるその姿勢は、純粋に尊敬申し上げます。――しかし、だからと言って、いたずらに将来の国民の生活を犠牲にして良いとは私は思いません。どうか、彼らに真実を伝えた上で、改めて彼らに問うて下さい。今のまま、快適な生活を求めるか、それとも多少の不便を飲んでも子や孫の世代に豊かな世界を残すのか」

クロエの訴えに、しかしイスマエルは、

「問うまでもない」

言い捨て、そして、指を鳴らした。

と共に、神殿の隅に控えていた近衛兵達が、いっせいに舞台へと上がり込み、演説台のクロエを取り囲んだ。

「先王子飼いの御用学者殿には、大人しく舞台を降りて頂こう。レオンの世は、既に終わったのだ」

勝ち誇るようにイスマエルが吐き捨てる間も、鎧姿の近衛兵達はじり、じりと、クロエへの包囲の輪を縮める。

「これが、貴様の言う変換士の殺し方か、イスマエル！」

ミラの怒声に、しかしイスマエルはあくまでもにこやかに応じた。

「もはや彼は変換士ではない。どのように殺そうと、それは自由だ」

「イスマエル、貴様ああっ！」

ミラの怒声が、夜空に炸裂した、その時だ。

「ミラさまああああっ！」

「え？」

やおら観衆の渦の中から、一人の皮鎧姿の男が神殿の壇上へと飛び出して――否、放り込まれた。

どすん、ごろごろごろ……ごろん。

あまりにも無様な着地に、観衆のみならず舞台に居合わせた誰もが思わず見入った直後、男はガバと立ち上がり、そして怒鳴った。

「てめええっ！ 俺のミラ様に花嫁衣裳を着せたまではグッジョブだがなあ、その艶姿を独り占めするのだけは許せねえ！！ とりあえず全国のミラ様ファンに、おろし金で額すり減らしながら三つ指について謝れええ！ このロリコン変態野郎！」

「タンカを切る暇があったら、とつととあの泥棒猫を助けろってんですわよ！ この短小鶏頭ああっ！」

どごっつ！

続けて神殿内に飛び込んで来た、いや、先程の男にドロップキック

をかましてきたのは、メイド服を纏った緑色の髪の若い女だった。

「何すんだ、ベルダ！ 殺す気かボケエ！」

「ええ。いっそクロエさま以外の殿方は、みんな死んでしまおうが宜しいですわ」

突然の闖入者に、それまでクロエを囲んでいた近衛兵達が、すかさず向きを変えて殺到する。が。そんな兵士達を前に、二人の闖入者は怯むどころか、むしろ敢然と向き合い、身構えた。

「おいアバズレ、もし俺を邪魔した日にゃ、問答無用でぶった切つてやるからな！」

長剣を抜き取りながら、ギルは傍らのベルダを振り見る。

「あなたこそ、その阿呆面をブッ潰されたくなければ私の邪魔をなさらないよう」

ぷりぷりとベルダも言い返す。

そこへ、最初の兵士が猛然と切りかかった。ギルはこれを数手で切り伏せると、すかさず次の兵士へと刃を向ける。

だが、その背後から、兵士の一人がギルに大上段を振り下ろす。――と、がら空きとなったその懷へ、ベルダが強烈な一蹴を食らわせ、これを吹っ飛ばす。

「油断してんじゃないですわよ、鶏頭！」

怒鳴るベルダに、すかさず一人の敵兵が詰め寄り、下段から袈裟に切りかかる――と、今度はギルが、ベルダを突き飛ばしながら、この一太刀を剣ごと叩き落す。

「てめえこそ！ 無駄口叩いてんじゃないやねえ！」

苛立たしげに喚くギルの背後へ、さらに数人の兵士が殺到する。そんな彼らに、ベルダは、今し方剣を叩き落された兵士を抱え上げ、これ进行い切り投げつける。

「無駄口ではなく、忠告と仰いまし！」

勝負は、瞬く間に決した。

累々と転がされた兵士達を踏み越え、一人と一体はイスマエルの前へと詰め寄った。

しかしイスマエルは、クロエを含めた二人と一体に詰め寄られてもなお、その不敵な笑みを崩す事はなかった。どころか、いよいよ勝利を確信した笑みを浮かべる。

そんな彼の背後からは、民衆の怒号が巨大なうねりとなってクロエ達に押し寄せる。

「聞こえるだろう、君達。今、君達はこの国を、この国の民を敵に回しているのだよ」

イスマエルの説明を待つまでもなく、それらの怒号はいずれも、新しい王とその花嫁との慶事に、余計な水を差した闖入者達に対して向けられたものだった。今、この瞬間、クロエ達は間違いなく、民衆の敵だった。そして、他でもないイスマエルこそが、唯一無二の民衆にとって敬愛すべき英雄だった。

「私の声は民の声。私の手は民の手。私の下す判断は、いずれも民の意思の総意なのだ。私を否定する事はすなわち、民の意思を否定する事になる。それを知った上で、私を殺すと言うのなら殺すがいい。しかしそれは、永久に、君達がこの国の民にとっての敵となる事を意味する」

堂々然と言い放つイスマエルに、クロエは目を逸らす事なくまっすぐ言った。

「真の敵は、あなたです、イスマエル殿下」

「なに？」

つい、と片眉を上げるイスマエルを、ぎり、と睨み据えながらクロエは怒鳴った。

「国民を欺き、いや、己さえも欺き、迫り来る危機から目を逸らす、そんな貴様こそ、真の国民の敵だっ！ イスマエルっっ！」

「……なんだと？」

呆然と呻くように、イスマエルが問い直した、その時だ。

ゴゴゴゴ……。

腹の底に響くような地響きと共に、突如、足元から突き上げるような激しい振動が、広場に居合わせた人々を、のみならず、街全体を

襲った。

「な、何だよ、クロエ、何が起こってんだ？」

咄嗟に身を屈めつつ、ギルは周囲を見回す。その一方でクロエは、恐怖ではなく怒りに声を震わせながら、イスマエルに訊ねた。

「まさか、殿下。すでに装置を起動させていたのですか」

「誰も……式典終了後に起動させるなどと言った覚えは、ない」

そう答えるイスマエルさえ、すでに不安げな面持ちを浮かべ、しきりに辺りを見回している。そんな彼の背後では、突然の地震に驚き、逃げ惑う街の人々が、すでに狂乱の様相を呈し始めていた。互いにあらぬ方向へ駆け出し、どつきあい、怒鳴り喚く。まさに阿鼻叫喚の図である。

「こんなもの、いずれ収まる！」

「いえ」

イスマエルの怒声に、クロエはきっぱりと応じた。

「消滅した街から辛うじて逃げおおせた人の多くは、消滅前に巨大な地震が街を襲った、と証言しています。——だとすれば、この地震もまた、その予兆、」

「そんなはずはないっ！」

そんなクロエの言い分を、イスマエルは一喝をもって掻き消す。

「私の計算は完璧だった……。今までもずっと……それに今回も……間違いはない。正常に作動している。確かに作動後間もなくは、地脈の流れが不安定になる事もある、だが、所詮は一時的なもの……!! こんなもの、いずれ収まるんだ! いずれ!」

「殿下っ！」

今度は、クロエが怒鳴る番だった。

「完璧だろうとなかろうと、今、あなたの背中で起こっている事、それが事実なんです！」

「……事実、だと？」

ゆっくりと、イスマエルは背後を振り返った。

そこに広がっていたのは、まさしく地獄と呼ぶべき光景だった。

次々と崩壊する、簡素な石組みの家や建物。その合間を、統制も秩序もなく、ただ闇雲に駆け回る人々、そして、そんな人々によって、不幸にも押し倒され、踏みつけにされた拳句に命を落とし、そのまま誰に顧みられる事もなく広場や通りに打ち捨てられた人々。

中でも子供の犠牲は、その数についても悲惨さにおいても目立った。背も低く、また、体力も少ないために、大人よりも余計に人波の犠牲になりやすかったのだろう。

「こんなものが……こんなはずが」

肩をわななかせながら、イスマエルは呻いた。

「これが、事実です、殿下。これまで何度も、繰り返された……」

「こんなはずはないっ!」

刹那、振り返るなりイスマエルは、その腕を横一文字に一閃した。

「させませんわああ!」

すかさずベルダが床を蹴り、イスマエル目掛けて跳躍する。しかし、その蹴りが届くよりも、イスマエルの腕が空を薙ぐ方が一瞬、早かった。そのイスマエルとクロエの間に、咄嗟にギルが立ちはだかると同時にギルの長剣が、目で追う事すら敵わない速度で銀の太刀筋を描く。

バラバラバラ……。

ギルの足元に、おびただしい数の短剣が、雨あられと降り注ぐ。その数、数十本。

だが。飛来した短剣は、それが全てではなかった。

「さすがにコウモリとは……違うな」

「ぎ……ギル、さん!?!」

いつしかギルの身体には、おびただしい数の刀傷が刻まれていた。のみならず、その肩や腹の所々には、彼の太刀筋を潜り抜けた短剣が深々と突き刺さっている。

それらの刀傷から、あるいは足を伝い、あるいは雫となって滴り落ちた血が、ギルの足元にゆっくりと血の海を拡げる。

「だ、大丈夫ですか、ギルさん!」

「な、ワケねー……だろ……」

呻くなり、ギルは崩れるように膝をつく、受身さえ取る事もせず横様に倒れた。

「ギルっっ！」

弾かれたようにミラが駆け寄り、力を失った戦士の上体を抱き上げる。

そんな彼らの目の前では、抜刀したイスマエルに対し、ベルダが果敢に挑みかかっている。が、人外のパワーを持つオートマタをもつとしても、イスマエルの振るう超高温の長剣の前には、もはや成す術などありはしなかった。

「おかしいな……見切った、はずなのに……ちきしょう」

「喋るな！ 傷に障るぞ！」

長い睫毛に湿り気を宿しながら、ミラが必死の形相で怒鳴る。が、そんな彼女の腕の中で、刻一刻と、ギルは生気を失ってゆく。

「す、すみません姫様……俺、もう、ダメみたいです……」

「い、行くなああ、ギルっっ！」

「せ、せめて、さいごに、き、キス……」

言葉も半ばに、ついにギルはその瞼と共に、ぱたり、と意識を閉ざした。

「ぎ……ギル……」

ガギンッ！

その時、イスマエルの一太刀が、ベルダの腕を輪状に切り落とした。

「ベルダ！」

「駄目ですっ！」

駆け寄ろうとするクロエを、ベルダは鋭い声で制する。

「行って下さい！ この街を、救うために！」

「……っ！」

素早くクロエは踵を返し、ギルとの別れを惜しむミラの腕を取って駆け出した。向かう先は無論、地下のメインベント脇に設置されているはずの、プルーム増幅装置だ。

一方のイスマエルは、ベルダの切り口から覗くカラクリを目にするなり、俄然、その目を子供のように輝かせた。

「ほう。過去に、プルームを使い人形に命を与えた術者がいたと聞いた事があったが……よもや、その実例に出くわすとは、興味深い」
「残念ですわね！ 生憎私は、クロエさま以外の殿方には興味が沸きませんの！」

「そうか、それは私としても、」

言うなり、イスマエルはその長剣で、ベルダの腹部を内部のモノリスもろとも、一気に――――
パキン……。

「残念だ」
貫いた。

途端、ベルダの身体は、まさしく糸の切れた人形そのままに、ガクリと力を失った。

「そんな……あのギルが、負けるなど……」

クロエに連れられ、地下への階段を駆け下りながら、ミラは齒噛みと共に呻いた。

「あやつは変態だが、剣においては決して負ける事はない……なのに」

ミラの口ぶりは、そもそもギルが剣において負ける事など、ありえないと言わんばかりのものだった。事実、ギルは剣においては負けていない。彼を敗北に追いやったのは、むしろイスマエルの持つもう一つの力の方だった。

「あれは、剣術と言うより、プルームを使った投擲術です。一度投擲したモノリス刀に、継続して新たな指示を与え、軌道を変更する―――熟練した剣士でも、あれほどの数を防ぎきる事は、まず不可能です」

「おのれイスマエル……どこまでも卑怯な、」

「そういう訳でもありません。並の変換士には、あれだけのモノリ

ス刀をいちどきに制御する事など出来ません——ギルさんは確かに、剣においての天才でした。ですが、それ以上にイスマエル殿下の方が、変換技術において天才だった、という事です」

その間も、地震は激しさを増し、いよいよまともに歩く事さえ覚束なくなっていた。

王都のメインベントは、王宮の聳える岩山の底に位置している。大変深い場所にあるせいか、メインベントへ至る階段は、降りても、降りても、なおも目の前に新たな階段が現れるといった始末だ。そんな、いつ果てるとも知れない地の底への階段を、今にも、背後にイスマエルが追いつくかもしれない、王都自体が吹っ飛んでしまうかもしれないという恐怖に苛まれながら、二人はひたすら駆け下りた。

やがて、ようやく彼らの眼下に、階段の終点と思しき場所が見えた——その時だった。

これまでと比べ、ひとときひどい揺れが、二人の足元を襲った。と、その揺れに足元を狂わされてか、ミラが階段を踏み外す。

「きゃあっ！」

「危ない！」

咄嗟にクロエは手を伸ばした。だが、時すでに遅く、その腕が差し出される頃には、彼女の瘦身は、すでに宙へと大きく投げ出されていた。

思うよりも先に、クロエは階段を蹴り出していた。そして、中空でミラの身体を抱き止めると、そのたおやかな身体を懷に納め、自身の身体を下に据えた。

ドサアアッ！

が、クロエがその背中でもって、階下の石畳へ着地を果たした、その瞬間。

「ぎゃっ！」

クロエはその右肩に、これまで体験した事のない、肩口を引きちぎられるかのような激痛を覚えた。

「ど、どうした、クロエ」

痛みに耐えつつ、クロエはそっと瞼を開いた。するとそこには、吐息すらかかるほどの距離に、目一杯に涙を蓄えたミラの瞳があった。

「み、ミラ……殿下？」

「すまない……」
ぽた。

揺れるその瞳から、クロエの頬に、雫が落ちる。

「私のせいで……皆に苦勞ばかり……かけてしまった」

「え……？」

「本当は、こんな事……全部、私一人で、成すべきはずだった……のに……誰も、苦しませたく、なかった……すまない……本当にすまない……」

なおもミラは、その瞳から鼻から、とめどもなく雫を垂らし続けた。鳴咽と共に、唇が肩が、小刻みに震える。

「……すまない」

なおも、ミラは繰り返した。まるで、それ以外のあらゆる単語を、記憶から忘れ去ってしてしまったかのように。

何度目かの“すまない”が繰り返されようとした、その時。

「すま——」

その言葉を断ち切るように、クロエは、自身の唇を、ミラの唇にそっと重ねた。

キスは、一瞬で終わった。

何が起こったのか理解できず、ただ呆然と目を見開くミラに、クロエはそっと囁いた。

「あなた一人で抱え切れるほどに……軽いのですか？　あなたの国は……？」

「……え？」

「もっと……僕にも、分けて下さい。あなたが抱えるもの……」

ミラは何も答えなかった。答える代わりに、その瞳から、いよいよ止め処もなく熱いものを溢れさせた。

いつぞや、王宮で巻物を拾い集める際に見せた頑固さは、もはや面影すら失っていた。涙でぐしゃぐしゃに崩れた表情を見つめながら、クロエは、きっと彼女は、これまでもずっと、一人で重みに耐え続けていたのだろうと察した。重みに耐える事こそ、王族の使命であると自らに言い聞かせながら。

王族としての気概に水を差すつもりはない。けれどもこの時、クロエは純粹に、ミラという一人の少女の支えになりたい、彼女を守る盾になりたいと強く願った。

国のため、国民のため、将来のため……そのような大仰な事情はさておき、クロエはただ、この一人の少女のために、生きたいと思った。

——父さんの気持ち、少し、理解できたような気がする。身を起こし、立ち上がったクロエは、そこで、ある異常に気付いた。右腕が、動かない。

どうやら先程の着地の衝撃で、右肩が折れるか脱臼しているものらしかった。何とか動かそうと右腕に神経を巡らす、その腕が、指が動く様子は、いっこうにない。

「行きましょう……殿下」

未だ床にへたりこんだままのミラに、クロエは怪我を気取られないよう、無事に済んだ左手をそっと差し出した。

「……ああ」

こく、と頷くや、ミラはその手を、そっと取った。

メインベントを収める地下室は、階段からそう遠くない場所にあった。

歩く事すらままならないほどに揺れる地面に、おののきながらミラはクロエに訊ねる。

「滅びるのか、王都は」

「いえ——させません」

答えと言うより、決意と言うべき言葉を返しながら、とうとうクロ

エはメインベントへ至る鉄扉を開いた。

そこには、カサンドラのもと同様、青い輝きで満たされた、しかしながら、カサンドラのそれとは比較にならないほど広大な、プルームの湖が広がっていた。

二人にとって、そこは決して、初めて訪れる場所という訳ではない。ミラは王族として、クロエは変換士として、それぞれの目的と使命を帯び、何度もこの場所へと訪れた。が、その際には目にしなかったものを、今、湖の中心に見出すなり、二人はどちらともなく、中心の小島へ至る通路を駆け出していた。

湖の中心に、その底にかけてまっすぐに差し込まれた黒く巨大な円筒こそ、まさしく増幅装置の本体に他ならなかった。

柱は、湖と地脈流を仲立ちする湖底のベントまで至り、今まさに、地脈から強引にプルームを引きずり出す機能を作動させ始めたばかりだった。

その柱の上には、これまた黒い外観の小屋が建てられている。どうやらそこが、増幅装置を運転するための操作室であるらしかった。

操作室に辿り着くと、そこにはすでに人の影はなく、すっかりもぬけの空と化していた。

イスマエルの指示によって機械を作動させたであろう技術者——恐らくは変換士だろう——のほとんどは、今や影すらも拝む事ができなかった。唯一地上と繋がった階段で、鉢合わせる事もなかったという事は、揺れ始めるや相当早い段階で、地上への脱出を始めたのだろう。自らの責任を、早々に放棄して。

鉄板敷きの無骨な床には、手順説明書と思しき、図や文字をびっしりと書き記したパピルスの巻物が、だらしなく開いたままあちこちに散乱していた。

「止めないと……早く……」

巻物を拾い上げるべく、膝をついたクロエは、そこで思わず、あつと声を上げた。

操作盤の下では、一人の初老の変換士が、肩を丸め、膝を抱えるよ

うにしてうずくまっていた。その変換士は、クロエと目が合うや、やおろ気が触れたような金切り声で喚き始めた。

「わ、私はただ、陛下に命じられて機械を作動させたただけだ！ 私は何も……何も悪くない！ 悪いのは陛下だ！ 陛下なんだあ！」
蒼白な面でひたすら醜い自己弁護を続ける男に、しかし、クロエは咎めるでもなく、そっと語りかけた。

「誰が悪いとか、そういう事は、今はさしたる問題ではありません。とにかく今は、この装置を止める事が何よりも先決です」

しかし、このクロエの言葉さえも、男は激しくかぶりを振って拒む。
「だ、駄目だ。私には、そのような決断を下す権限など、ない」

この期に及び、都合の良い責任逃れを繰り広げる男に、いよいよクロエは怒気を覚えずにはおれなくなった。が、それでもなお、クロエは静かに言い放つ。

「責任は、僕が——学長を預かった、このクロエ・アルカサルが取ります」

「……学長の？」

はっと目を見開き、男は今一度、クロエの纏う服を眺めた。変換士であれば誰であれ、その礼服が示す意味に気付かない者はない。クロエの言葉に、ようやく安堵を覚えたと思しき男は、すぐさま立ち上がり操作盤に取り付くと、早速、盤上のスイッチやハンドル、ギアを、こなれた動作で扱い始めた。

やがて。

ギユウウウ……ン。

これまで、どこからともなく発する異音によって満たされていた操作室、そしてプルーム湖が、ゆっくりと静けさを取り戻す。

「こ、これで、止まりました」

振り返るや、男はその顔を、驚愕に硬直させた。

「へ……陛下」

「え？」

男の眼差しにつられ、クロエもまた振り返る。するとそこには、今

まさに操作室目掛けて歩み来る、純白の婚装に身を包んだ男の姿があった。男は急ぐでもなく、一步一步、足元を確かめるようにクロエ達の元へと歩み寄る。

「へ、陛下あああ！」

途端、男は弾かれたように操作室を飛び出すと、イスマエルの元へと駆け出し、すかさずその足元に平伏した。のみならず、イスマエルの長い足へとしがみつき、赦しを請う言葉をしきりに叫び始める。――が。

「邪魔だ！」

やおらイスマエルは、男をしたたかに蹴り上げ、その小さな身体を、プルームの湖面へと突き落とした。

「いひゃあああああっ！」

青い光の中へと真っ逆さまに落ちた男の身体は、湖面に触れるや、その傍から白い霞と化し、骨片一つ残す事なく、いずこかへと霧散していった。

そんな男の姿にまるで顧みる事もせず、なおもイスマエルはクロエ達の元へと歩みを進める。

「止めるなああああっ！」

常ならぬイスマエルの怒号が、ドーム状の空間に轟然とこだました。

「私は、約束したのだ！ 国民と！ 私の世が続く限り、飢えも、凍えも、闇への恐怖も、全ては無縁な存在と化すと！ それが、私が国民に誓った約束なのだ！ この約束は、誰にも、破らせはしない！」

その厳然とした声は、紛れもなく、王としての言葉――イスマエル王の言葉に違いなかった。

その言葉に、今更ながらクロエは感じた。

――彼もまた、背負っているのだ。

姿こそ違え、それはミラが背負うものと同じ、王としての重責に違いなかった。

彼もまたミラと同様に、国民の幸せを願い、国民の喜びを求めている

る。そして、ミラと同様、その重責から逃げる事もせず、彼なりの方法で、立ち向かおうとしている。

その姿は、ただ、痛々しい、の一言に尽きた。

これほど民思いの王が、何故、このような機械なぞに――。

「陛下……」

クロエは踵を返すと、なおも歩み寄るイスマエルの前に自ら進み出た。と共に、携えていたモノリス刀を鞘ごと床に置き、恭しく敬服の念を示す。

「どういう事だ、貴様」

片膝をついたクロエを憤然と見下ろしながら、イスマエルは唸った。

「あなたは、紛れもなく本物の王です、イスマエル陛下」

その言葉に、背後から怒声を上げたのはミラだ。

「クロエ！ そんな奴の言葉に耳を貸すな！ そ奴は王でも何でもない！ ただ、己の私欲、支配欲を満たしたいがだけの、王族の風上にも置けぬ俗物だ！」

が、そんなミラに、クロエは諭すように言った。

「いいえ、殿下。このお方は、紛れもなく我々の国王陛下です」

改めてクロエは、イスマエルの前に向き直り、頭を垂れた。

「畏れながら、只今の陛下のお言葉に、感服致しました。民を思う、陛下のお言葉に」

「何だ、今更」

「その陛下には、もうお分かりのはずです。今、この瞬間、国民が真に求めているのは、異常事態の収束――そうは思われませんか、陛下」

「……！」

その言葉に、イスマエルは、ミラと同じ色の瞳をはっと目を見開いた。

一方、クロエはなおも続ける。

「陛下。王として、今、ここで成すべき事をなさって下さい。枯渇

説に対する反論は、事態が収束してから、改めて学会のテーブルで伺いたく思います」

「……」

「陛下。今すぐ王宮に戻りましょう。恐らくは今頃、地上では恐怖と混乱が広がっているはずです。彼らを安心させるためには、あなたの存在が必要なのです」

「分かっていたのだ、全て……」

やおらイスマエルは、微かな、木々の葉が擦れるような覚束ない声で呟いた。

「え？」

顔を上げたクロエは、そこに思いがけない王の姿を見た。ラピス色の瞳から、その頬にかけてとめどもなく涙を流す、イスマエル王の姿を。

「陛下……？」

「だったとして……私はどうすれば良かった？　いたずらに国民に不便を強いる事が、不安を与える事が、果たして正しいとでも？」

「……いえ、陛下、あなたは、」

刹那、イスマエルの身体が、ふっ、と傾いだ。

「約束を果たせぬ王に、もはや生きる意味はない」

——まさか。

クロエが立ち上がった時にはもう、イスマエルはその足で、通路の縁を蹴り出していた。

咄嗟にクロエは、その右手を伸ばし——が、動かない。

「させないいいっ！」

咄嗟にクロエは、その足元に横たわる剣を、プルームの水面目掛けて勢いよく蹴り飛ばした。

「要請する——」

イスマエルと共に湖面へと落下するその剣へ、クロエは唱える。

「残存プルームを全て運動エネルギーに変換」

一方、いよいよイスマエルの身体は、湖面へと至る——

「打ち上げろおおっ！」

バキイイッッ！

刹那、中空に落ちつつあった剣は、誰に振るわれる事もなく、ひとりでに空を切った。そして、その強烈な一振りにより、イスマエルの身体を、天井へと軽やかに打ち上げた。

どさっ……。

鈍い音と共に、通路へと転がったイスマエルの身体に、すかさず馬乗りになりながらクロエは怒号を上げた。

「ふざけるなあっ！」

「な……何が」

呆けるイスマエルの胸倉を、左手のみで乱暴に掴み上げながらクロエはさらに怒鳴る。

「そんな事で、自分の行いにけじめをつけるつもりですか、陛下っっ！？」

ようやく事態を飲み込んだイスマエルは、しかし、なおも覚束ない口ぶりで呻く。

「だが……私には何も……主としても、変換士としても、もはや、」
が、うなだれるイスマエルに、クロエはなおも力強い口調で語りかけた。

「何もないはずはありません、陛下。あなたに出来る事は、まだ、たくさんあるはずです」

その言葉に、イスマエルはたと顔を上げた。

「――私にも、手伝わせて下さい」

「え？」

イスマエルの胸から立ち退くや、クロエはその左手を、そっとイスマエルの目の前に差し出した。

「あなたの国造りを……国民が真の意味で幸せになれる国造りを」
その横へ、今度はもう一本の手が差し出される。

白く輝く細い右手は、他でもない、ミラのものだった。

「行くぞ、イスマエル。そなたの声を、国民は待ち望んでいる」

しばし、二つの手をじっと見上げていたイスマエルは、ややあつて、おもむろに頷いた。

「……ああ」

そしてイスマエルは、差し出されたそれらの手を、両手で、ぐっと握り締めた。

終章（前書き）

お疲れ様でした。こちらがラストです。

終章

終章

あれから、約一週間後。

辛うじて大規模な損壊を免れ得た、大理石造りの王宮の回廊を、つかつかとせわしない足音を立てながら歩く者があった。簡素なデザインのドレスに身を包んだ、ミラだ。

その切れ長の目には、すでに色濃い隈が出来上がっている。この一週間というもの、彼女は、地震により被災した市民への寝食の提供や、被害状況の調査報告を取りまとめるべく、ほぼ一睡もせず、時に一人で、時に多くの侍従を侍らせながら、こうして王宮内を駆け回っているのだった。

「殿下！」

そんなミラを、中庭の向こうから呼び止める者があった。

その声に、ミラはそのせわしない足取りをはたと止める。

「どうした、クロエ」

変換士の黒い制服に身を包んだクロエは、右手の三角巾をさりげなくマントで隠しつつミラの眼前に片膝をつくと、深く頭を垂れ、恭しく言った。

「ギル・バティスタが、ようやく意識を回復しました」

「ギルが……」

大理石の顔が、微かに笑みで緩んだ、次の瞬間。

「ミラ様ああああっ！」

「げっ……」

その顔は、再びピキッと硬質な音を立ててひきつった。

ミラが視線を向けた先、クロエの背後には、全身を包帯でぐるぐる巻きにされ、さながら異国のミイラを彷彿とさせる一人の男が、今

まさに、その包帯だらけの顔に満面の笑みを浮かべつつ、ミラ達の所へと駆け寄る姿があった。

「ミラ様の愛に呼び戻され、冥土から帰って参りましたぁ！」

「ええい、呼び戻した覚えはないわっ！」

ギルの嬌声に、すかさずミラが怒鳴り返す。

「いいえっ。確かに姫様は、俺が死ぬ間際、行くなぁ！ と仰いました。だから俺は、行かなかったのです。ミラ様のご命令は絶対ですからっ！」

「では、もう一度命じる。今すぐ逝け！ すぐに逝け！」

「はい！ 姫様のご命令とあらば……って、えええっ!？」

と、今度はその背後から、もう一人の騒音メーカーが追いつがってきた。

「こらぁあっ！ ギル！ 起きた傍から走り回るのは、およしなさいまし！」

「この程度の怪我で、俺のミラ様への愛を断てると思ったら、大間違いだぜえ！」

「知るかってんですわよ！ クロエさまにあなたの看病を仰せつつっている、私の身にもなって下さいませんか!？」

あの後ベルダは、クロエと、そしてイスマエルの手によって修理され、無事、機能を復活させるに至った——のだが。

実は、単に旧来の機能を取り戻した、というのでは、なかった。

やおらベルダは、その右手をがっぽりと外し、手首に開いた丸い切り口をギルに突き出しながら言った。

「これ以上おいたが過ぎますと、この超濃縮型エネルギーキャノン・イスマエルカスタムをお見舞いして差し上げますわよ！」

「おうおう、やれるもんならやってみろ、ベルダ！ ——おいクロエ、ちよいとその剣を貸せ」

包帯だらけの手を突き出すギルに、うっかり剣を差し出しそうになる手を止めてクロエは喚いた。

「貸しませんよ！ ってか、けが人はとっととベッドに戻って大人

しくして下さい！」

「んっふっふ、鶏頭め。今日こそ、この五〇〇〇度の火球を放つ超強力キャノンで丸焼きにして、ディナーのメインディッシュに供して差し上げますわ！」

「ベルダさんも、そんな物騒なものはさっさと収めて下さい！あと、ちよいちよいイスマエル殿下の研究室で、訳の分からない改造を受けるのもうやめて下さい！」

いよいよ中庭は、二人と一体の乱闘模様を呈し始めた。が、ただでさえ忙しい所に足止めを食らっていたミラは、早々に彼らに背を向け、再び廊下を歩き始める。そんなミラの背中を慌てて引き止めながら、クロエは再び申し上げた。

「お、お待ち下さい、殿下」

「何だ」

「実はもう一つ、お伝えしたい事が」

テラス越しに麗らかな陽光が差し込む大広間は、しかし、暖かく柔らかな春の陽気とは裏腹に、ひどく硬質な、そして冷やかな緊張によって充たされていた。

部屋の中には、ぶどう酒以外は料理も何も置かれない簡素な長いテーブルが置かれ、その両端には、簡素ながらも上等な執務服に身を包んだ二人の王子が、それぞれ向き合うように席を占めている。

クロエがミラを連れて部屋に戻るや、いよいよ機は熟したとばかりに、末席に座る黒服の王子、イスマエルが口を開いた。

「今日は、兄様に是非お願いしたい事があり、こちらにお招き致しました」

「お願い？」

レオンはあくまでも淡々とした口調で問い返した。それは、かつて自らを王座から引きずり降ろし、あまつさえ牢獄へ投じた男に対するものとは思えないほどの、静かなものだった。

庭先から迷い込んだ蜂の羽音さえ響くほどの静寂の中で、さらに

イスマエルは続ける。

「是非、兄様にはもう一度、このカスパリアの王として、冠を戴いて頂きたいのです」

が、その言葉に、レオンは俄かには答えを寄越さなかった。

しばしの静寂の後、レオンは小さく溜息をつくど、ぶどう酒で唇を湿し、そして言った。

「随分と、身勝手な言い分だな、イスマエル。一旦王座から引き摺り下ろした人間に、今度は、再び王位に就けとは」

「分かっております。しかし、それがこの国にとって——いえ、国民の幸福にとって、最も理に叶った選択なのです」

「そなたの理など、聞いてはおらん」

淡々と、しかし同時に、厳然と放たれたレオンの言葉に、イスマエルは気圧されるように口を閉ざした。

再びの静寂の後——ややあって、レオンは部屋の隅に控える妹と、その友人に声を投げかけた。

「そなた達は、どう思う」

その言葉に促され、黒服の青年と白いドレス姿の少女は、互いの目をじっと見合わせた。

しばし、探るように視線を交わした後、口を開いたのはクロエだった。

「私は、やはりイスマエル殿下の仰るとおり、もう一度、レオン陛下に王位に立って頂く事が、良策かと思えます」

「……そうか」

思慮深げな溜息と共に、レオンが背もたれに身を預けた、その時、
「ただし」

今一度、クロエは口を開いた。

「恐れながら率直に申し上げますと、やはり当面は、レオン殿下一人で国を治める事は、大変困難かと思われます。ここはイスマエル殿下と協力し、統治する事が望ましいかと、」

「クロエ君！」

咄嗟に、クロエの言葉を遮ったのは、イスマエルだった。

「私はもはや、国政に関与するつもりはない……。兄様が王位に就かれた暁には、母の実家に、大人しく自らの身を封じる所存だ。王族として、今回の事態の責任を……」

「だから、そなたの理など聞いてはおらんとやっているだろう」

弟の言葉を制すると、レオンは再びクロエに話を促した。

頷き、クロエは続ける。

「現時点における、イスマエル殿下に対する国民の支持には、確かに圧倒的なものがあります。伝えるべき真実を伝えずにいた、という件を差し置いたとしても、恐らく、この事実に変わりはないでしょう。——なぜなら、真に国民が望んでいるのは、イスマエル殿下が彼らに約束なされた、暗闇や寒さに怯える必要のない、快適な生活なのですから」

「うむ……確かに」

「プルーム政策に対する考え方という点については、確かに、お二人の考え方は正反対だったかもしれませんが……。ですが——だからこそ私は思います。きっと、そんなお二人だからこそ、共に手を取り合う事で初めて、この国を、真に歩むべき道筋へと導く事が出来るものと……」

「なるほど——だが、クロエ」

強い眼差しでクロエの目を見据えながら、レオンは言った。

「そなたは本当に、そのような事が可能だと思っておるのか？　まるで正反対の考え方を持つ我々が、本当に協力し合えるなどと、」

「可能です」

きっぱりと、クロエは答えた。

「国民の幸福を、心の底から望んでおられるという点では、お二人は互いに、何ら劣る所はございません」

「そうか……」

溜息と共に、レオンは今一度イスマエルに向き直った。

「そういう訳だ、イスマエル。余は再び王冠を戴く。——ただし、

そなたの協力を前提の上で、だ」

「し、しかし、私は兄様に対し、償いきれない罪を……」

「罪ならば、今後の働きで返せ。イスマエル。——いいな？」

包み込むような兄の言葉に、もはやイスマエルは、何らの反論も口にする事はなかった。

代わりに、決然とした眼差しで新王を見据えると、こく、と力強く頷いて言った。

「はい。兄様」

その夜、クロエは大広間のテラスにて、一人、ぼんやりと月を眺めていた。

少し肉厚な弓張り月を、濃藍色の空に望みながら、クロエはこれから自分が成すべき事について思いを馳せていた。

「何を、考えているのだ」

不意に背後から声がし、クロエは振り返った。

そこには、絹に金糸を縫いこんだ優美なドレスに身を包んだミラが、大広間から漏れ出る光を背中に纏いながら立っていた。

カサンドラにて同じく月を眺めた時に比べると、ここ数日の激務のためか、ただでさえ肉付きの薄いその頬や目元は、尚一層やつれて見えた。

が、それらはいずれも、彼女が、王族としての使命を必死に果たしている事の証拠に他ならなかった。そんな彼女の気高さと、同時に危うさが、クロエの心を打った。

綺麗だ……あの時よりも、ずっと。

ふと胸に生じたざわつきを、慌てて隠すようにクロエはその視線を逸らした。

「いえ、こ、これから僕は、何をすべきなのか……この国で、僕が求められている仕事は何なのか、その事に、思いを巡らせていたのです」

「……そういえば、そなた、腕が完治し次第、再び旅に出るそうだな」

ミラの弁が示すとおり、クロエは腕の治療が済み次第、再び旅に出るつもりでいた。その事は、すでに周囲の者には伝えている。二人の王子にも、ギルにもベルダにも、もちろん、ミラにも。

「だが、全都市からの増幅装置の撤廃が決定された今……もう、ルームの暴走に関する調査など、必要なだろう？」

俯き、軽く口を尖らせつつそう口にするミラは、何故か、気まずげですらあった。

そんなミラの、いつにない調子を軽く怪訝に思いつつ、クロエは返す。

「だからこそ、です。殿下」

「は？」

顔を上げたミラに、クロエは柔らかに微笑みながら答えた。

「増幅装置を使えなくなった以上、新しいエネルギー源と、その効果的な使用方法の模索は、これまで以上に急務となります。——研究対象こそ、確かにこれまでは変わります。……が、しかし、僕の変換士としての仕事に、終わりはありません」

「……そう、か」

再び、ミラは口を尖らせながら俯いた。

ローズマリーの香る庭先からは、微かな虫の音が夜風に乗って届けられる。

互いの息遣いが感じられるほどの距離に、静けさに、次第にクロエの中で、王族に対するものではない緊張が満ち始めた、そんな時だ。

「決めた」

「へ？」

「私も、そなたと共に、旅に出る」

「え？　——殿下も、旅に……？」

「そうだ。そなたと共に、国内外の様々な街を、村を、港を、森を、いいや、それだではない、私もまだ知らない、未知の世界を、たく

さん、たくさん旅するのだ！」

その表情は、威厳を湛えた王女のそれと言うより、むしろ、好奇心と冒険心を浮かべた少年そのものと言った方が正しかった。

「……殿下」

振り返るやミラは、やおらニツと口元をほころばせた。

「ミラでいい——ただし、二人きりの時に限るが」

「ミラ……？」

戸惑いと喜びに表情が崩れそうになるのを、すんでの所で堪えるクロエの一方で、ミラはあくまで澁刺とした眼差しでクロエを見上げながら訊ねた。

「なあ、クロエ。旅するのに必要な技術や、知識があれば申せ。

そなたの腕が治るまで、学んでおくから」

「え？ 知識、ですか？」

「例えば……ほれ、虫の調理方法だの、食べられるキノコの選び方だの、地図の読み方だの……そういう話だ。なあ、どんな知識が必要なのだ？」

なおも瞳を輝かせながら問い詰めるミラの顔を、半ば呆然と見下ろしていたクロエは、ふと、今の彼女には絶対的に不足した、しかも、旅には欠かすことのできない重要なスキルにの存在に思い至った。

「ああ、そうですね、そういうえば……」

「何だ、何を準備すればいいのだ？」

「とりあえず、馬の餌の味に慣れて頂く所から、始めてもらいましょうか」

了

終章（後書き）

最後まで読んで頂き、大変お疲れ様でした。
そして、ありがとうございます。

どうか眼球に疲れをお残しにならないよう、目薬などをお差し下さ
いませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4956ba/>

アルカサルの黒い剣

2012年1月13日20時47分発行